

岡田向遺跡・本田氏館跡 発掘調査報告

～三重県伊賀市岡田・柏尾所在～

2007(平成19)年3月

三重県埋蔵文化財センター

巻頭写真



岡田向遺跡・本田氏館跡上空より（西から）

序

布引山中に源を発する一級河川木津川は旧青山町の北西部をゆるやかに流れております。ここ岡田向遺跡と本田氏館跡は木津川左岸の段丘上と丘陵上に分布する遺跡です。

近年の発掘調査によって、岡田、柏尾地区では古く、縄文時代から人々の生活が営まれ、生産活動が活発に行われた様子が分かってきました。特に当地域は、木津川を望む小高い丘陵地にあるところから地域の有力者たちの古墳も造営され、文化が隆盛したと考えられます。

さて今回の報告は、農村総合整備事業に先だって実施した発掘調査の成果です。この調査によって岡田向遺跡では1次調査に統いて、古墳に関わる遺物や当時の人々の生活用具や建築部材を含む多種多様な木製品が出土しました。これら貴重な出土品のひとつひとつを整理し、記録保存に努め、それらを含む調査の全容を、県内外の人々に公開することが我々の役目であると考えております。

末筆ですが、調査に協力いただいた地域の方々をはじめ関係諸機関の皆さんに厚くお礼を申し上げる次第です。

平成19年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

1 本書は、三重県伊賀市岡田字向及び柏尾字中森に所在する岡田向（おかだむかい）遺跡と本田氏館跡（ほんだしやかたあと）の発掘調査報告書である。

2 本書が扱う原因事業は、平成16年度農村総合整備事業（畿央伊賀地区）である。

3 発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　　三重県埋蔵文化財センター

調査担当　　現地調査　　調査研究Ⅱグループ　G L 泉 雄二、主査 中川 明

調査協力　　伊賀市教育委員会（旧青山町教育委員会）

調査受託者　（株）安西工業

保存処理機関　（株）吉田生物研究所

4 本書の執筆、編集は中川明が行い、遺物写真撮影も中川が担当した。

5 本書が対象とした調査面積は岡田向遺跡が212m²で、本田氏館跡は1,400m²である。

6 本書が対象とした現場調査期間は平成16年9月16日から平成17年1月31日である。

7 本書で示す方位は、真北を用いた。なお、今回は世界測地系に準拠し、方位を示しており、座標北は0度18分西偏し、磁北は6度40分西偏している。（平成10年、国土地理院）。

8 本書で使用した遺構表示略号及び名称は凡例のとおりである。

9 本書で表記する色調は、小山・竹原編「新版標準土色帖」（第9版1989年）に準拠した。

10 発掘調査及び本書の作成に際しては、伊賀市教育委員会職員、地元柏尾、岡田地区在住の方々に協力いただきました。記して謝意を表します。

11 発掘調査の経費は三重県農水商工部が負担した。

12 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

〈地図類〉

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、旧青山町計画図、農村総合整備工事図（三重県農水商工部）である。
- 2 上記地図類のうち、国土地理院発行地形図は旧地形を表記するため掲載した。そのため国土調査法の日本測地系による座標第VI系（旧国土座標）で表現されている。現在使用されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
ただ、調査区位置図の元となる整備工事図については、世界測地系に基づいて作製している。
- 3 挿図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北で示している。なお、磁北は $6^{\circ} 40'$ 西偏している。（平成10年、国土地理院）。

〈遺構類〉

- 4 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
- 5 土層図の色調は、既述のとおり、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（第9版1989年）を用いた。
- 6 当報告書での遺構番号は各遺跡毎に1からの通番となっており、確認したものから順に付番している。
- 7 作業日誌抄については作業着手順に記している。
- 8 本書で使用した遺構表示略号は以下のとおりである。
SX：墓・周溝 SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 Pit：柱穴・小穴
- 9 遺構は、調査時に付加した遺構番号を基本的に使用しているが、整理中に変更したものもある。その変更は遺構一覧表に示した。なお、出土遺物の注記については、調査時の遺構名をそのまま使用した。

〈遺物類〉

- 10 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。
- 11 遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。
- 12 当報告書での用語のうち、つぼは「壺」、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。
- 13 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号	……………	挿図掲載番号である。
実測番号	……………	実測段階の登録番号である。
器形	……………	「壺」「椀」といった通有の形状を示した。
器種	……………	遺物の器種を示す。
グリッド	……………	調査時に設定したグリッド名を記した。本田氏城跡については、当初4分割の大地区を設定して行い、付番した。なお、後で岡田向遺跡と併せてグリッド番号を割り当てている。
遺構・層名	……………	遺物の出土した遺構や層名を記した。
計測値(cm)	……………	遺物の規格等を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(高台)は高台部径、(脚柱)は脚部上端径、(脚裾)は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。
調整・技法の特徴	……………	特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。調整は、基本的に各面の上から下端にかけて施されている方法を順に記した。
胎土	……………	小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調	……………	その遺物の外、内面の基本的な色調を記載した。カラーコードは、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度	……………	土器についてその部位を12分割表示とし、残存度合を示した。各部において12/12は完存と表記した。
特記事項	……………	遺物の特徴となる事項を記した。ヘラ記号や墨書きなど。

〈写真図版〉

- 14 写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。
- 15 握図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡毎の実測図番号と対応している。
- 16 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

第1章 前 言	(1)	
1 調査に至る経緯	(1)	
2 調査に至る経過	(1)	
3 調査の体制と委託にかかる経緯について	(1)	
4 調査の方法	(1)	
5 資料の公開・普及・保存について	(2)	
6 調査の方法・経過	(3)	
7 文化財保護法に関する諸通知	(3)	
第2章 位置と歴史的環境	(5)	
1 縄文時代	(5)	
2 弥生時代	(5)	
3 古墳時代	(5)	
4 古代～中世	(5)	
第3章 岡田向遺跡の遺構	(7)	
1 基本的層序	(7)	
2 遺 構	(7)	
第4章 岡田遺跡の出土遺物	(11)	
1 SD 1 出土土器	(11)	
2 SD 1 出土木製品	(11)	
3 包含層出土土器	(13)	
第5章 本田氏館跡の遺構	(23)	
1 地形・層序	(23)	
2 遺構概要	(23)	
曲 輪 I	(23)	
曲 輪 II	(23)	
曲 輪 III	(23)	
曲 輪 IV	(24)	
中 世 墓	(24)	
土 坑	(24)	
第6章 本田氏館跡の出土遺物	(34)	
第7章 結 語	(37)	
第8章 自然科学分析	(株)吉田生物研究所	(41)

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	(4)
第2図 調査区位置図	(6)
第3図 調査区配置図	(7)
第4図 岡田向遺跡土層断面図	(8)
第5図 岡田向遺跡遺構平面図、SD1・SB2実測図、B2Pit3・6断面図	(9-10)
第6図 調査区地区割図	(9-10)
第13図 本田氏館跡地区割図	(24)
第14図 土層断面図	(25)
第15図 土層断面図	(26)
第16図 調査前測量図	(27-28)
第17図 本田氏館跡測量図	(29)
第18図 曲輪I平面図・断面図	(30)
第19図 SX13・14実測図	(31)
第20図 SK1・2・3・4・5・6実測図	(32)
第21図 SK7・8・9・10・11実測図	(33)

表 目 次

第1表 遺物観察表1	(19)
第2表 遺物観察表2	(20)
第3表 遺物観察表3	(21)
第4表 遺物観察表4	(22)
第5表 遺構一覧表	(25)
第6表 遺物観察表	(36)
第7表 SX13石材計測表	(39)
第8表 SX14石材計測表	(40)
第9表 樹種別出土点数一覧	(40)
第10表 岡田向遺跡出土木製品同定表	(43)

遺物図版目次

第7図	出土遺物実測図(1).....	(13)
第8図	出土遺物実測図(2).....	(14)
第9図	出土遺物実測図(3).....	(15)
第10図	出土遺物実測図(4).....	(16)
第11図	出土遺物実測図(5).....	(17)
第12図	出土遺物実測図(6).....	(18)
第22図	出土遺物実測図(7).....	(34)
第23図	出土遺物実測図(8).....	(35)
第24図	櫛の使用例	(38)

写真図版目次

図版1	岡田向遺跡遺構写真(1)	調査前風景・調査区全景
図版2	岡田向遺跡遺構写真(2)	調査区西壁土層・SD1
図版3	岡田向遺跡遺構写真(3)	SD1柱穴・各柱痕半切状況
図版4	岡田向遺跡遺構写真(4)	SD1木製品出土状況・櫛出土状況
図版5	岡田向遺跡出土遺物(1)	SD1出土土器
図版6	岡田向遺跡出土遺物(2)	SD1出土土器
図版7	岡田向遺跡出土遺物(3)	SD1出土土器
図版8	岡田向遺跡出土遺物(4)	包含層出土土器
図版9	岡田向遺跡出土遺物(5)	SD1出土木製品
図版10	岡田向遺跡出土遺物(6)	SD1出土木製品
図版11	岡田向遺跡出土遺物(7)	SD1出土木製品
図版12	岡田向遺跡出土遺物(8)	SD1出土木製品
図版13	本田氏館跡遺構写真(1)	調査前風景・調査区西斜面
図版14	本田氏館跡遺構写真(2)	調査区全景
図版15	本田氏館跡遺構写真(3)	東斜面
図版16	本田氏館跡遺構写真(4)	SX13・腰曲輪他
図版17	本田氏館跡遺構写真(5)	東半・丘陵頂
図版18	本田氏館跡遺構写真(6)	西・東斜面
図版19	本田氏館跡出土遺物(1)	表土・SK2

写 真 図 版 目 次

図版20 本田氏館跡出土遺物（2）

図版21 本田氏館跡出土遺物（3）

分析結果組織写真

図版22 木製品No1～3

図版23 木製品No4～6

図版24 木製品No7～9

図版25 木製品No10～12

図版26 木製品No13～15

図版27 木製品No16～18

図版28 木製品No19～21

図版29 木製品No22～24

図版30 木製品No25～27

図版31 木製品No28～30

図版32 木製品No31～33

図版33 木製品No34～36

図版34 木製品No37～39

図版35 木製品No40～42

図版36 木製品No43～45

図版37 木製品No46～48

図版38 木製品No49～51

図版39 木製品No52～54

図版40 木製品No55～57

図版41 木製品No58～60

図版42 木製品No61～63

図版43 木製品No64～66

図版44 木製品No67～69

図版45 木製品No70～72

図版46 木製品No73～75

図版47 木製品No76～77

第1章 前　　言

1 調査に至る経緯

地域に根ざす農林業は、年々深刻な問題を抱えている。特に市街地と距離をおく市町にとっては、交通網とあわせて必至の問題である。青山においても産業従事者が高齢化し、流通面の低迷化が進んでいる。

今回の事業地は、伊賀市岡田字向及び柏尾に位置する。平成16年度に消滅する部分について遺跡保存の協議を当該部局の伊賀県民局農政部および旧青山町農林部と再三にわたり協議をもった。この協議の結果、事業によって消滅する部分が広範囲に及ぶことが判明し、これを受け現状保存の協議を行った。しかし、広域農道の整備は地元市民必至の問題であり、問題解決のためには、速やかに発掘調査を実施し、両遺跡について記録保存を行うことが求められている。

この事業計画に関わる周辺の埋蔵文化財の事前調査は、断片的に実施している。近年では、当該部局により事業照会のあった計画範囲が各遺跡を縦貫するため、当センターでは西から順次、分布調査や試掘調査の協議を開き、これに対応してきている。

このうち阿保地区に所在する中出向遺跡、羽根中島遺跡、花代遺跡、沢代遺跡は旧青山町や当センターによってそれぞれ近年発掘調査が実施された。これらの遺跡からは古墳時代を中心とした竪穴住居やこれに伴う遺物が出土している。

今回の岡田向遺跡は、旧青山町遺跡調査会によって昭和61年度に1次調査が実施されており、その結果、1号墳からは5世紀の須恵器や土師器が数多く出土した。

今回の調査は、農道整備事業の一環で実施されるもので、当遺跡の東側の縁辺部と東側丘陵の一部分が対象となる。なお、本調査については安西工業に委託している。

2 調査に至る経過

今回の岡田向遺跡、本田氏館跡はそれぞれ本調査

や予備調査によって周知されており、遺跡番号は191及び144である。岡田向遺跡は、古墳時代の集落跡であり、この時代の遺物が出土している。中でも石室を有する1号墳が確認されている。本田氏館跡では、分布調査において、曲輪や井戸が確認されている。

これらの結果をもとに農林水産商工部基盤整備課と協議し、農道敷設工事が遺跡の一部を消滅させることが判明したので、緊急発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることになった。調査期間は、平成16年9月16日から平成17年1月31日である。

3 調査の体制と委託にかかる経緯について

当該年度の発掘調査体制は以下のとおりである。なお、今回の本調査にかかる調査委託については記録部門と土工部門の両部門を含む委託内容であり、受託者は、登録名簿に挙げられた企業体のうち、指名競争入札により落札された業者と契約を結ぶことになっている。

委託業務の施工については両者の協議後、実施され、発掘調査に着手してきている。下記の担当者はすべて監督員として、調査現場の施工管理を行い、調査業務の進行について、指揮・監督した。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱグループ

GL 泉 雄二

主査 中川 明

調査委託 安西工業株式会社

4 調査の方法

調査区の設定は、両遺跡で単独のグリッド番号を配置した。可能なかぎり、道路センターラインを基軸にグリッド割を設定したが、曲線を描く箇所が多く、直線部分を使って任意の起点ポイントを決定し、4m四方のメッシュを区切った。

東西方向に西から1から15までを、南北方向にアルファベットのAからIまでを当てはめた。これら

の組み合わせで各地区を呼称し、掘削を開始した。表土掘削着手に際しては、丘陵斜面が大部分を占める本田氏館跡につき、樹木伐採作業から開始した。この間に麓の岡田向遺跡の重機による表土掘削に着手した。

各グリッドには地区杭を打ち、座標については、基準ポイント、図面作成ポイントに対して旧座標をとりつけ現地調査終了時に世界測地系（日本測地系）に変換した。

5 資料の公開・普及・保存について

平成17年2月8日午前10時より現地説明会を地域住民を対象にして実施した。この際、柏尾地区の調査現地にて出土遺物である土師器や須恵器を展示し、保存処理のため公開できない木製品等はパネルにて展示説明を実施した。なお、岡田向遺跡については調査地の壁の崩落の危険性が出てきたので速やかに埋め戻したため、説明会当日は、パネル展示にて説明を行った。隣接市町からは40名の参加者があった。

両遺跡の出土遺物については埋蔵文化財センターの収蔵庫にて保管。保存処理の必要な木製品・鉄製品については（株）吉田生物研究所にて委託処理後、当センターにて保管。

6 調査の方法・経過

本田氏館跡の立木伐採から開始した。残土置場が両遺跡間の谷間に設定されていたため、本田氏館跡は急涯な山の斜面から排土を落さなくてはならず、全体の排土を1箇所に集めることは作業的にも危険性が高いためここへの排出は断念し、南側の緩斜面から平坦部へ排出する方法をとった。そして、掘削は南側の丘陵の張り出し部との間の谷に排土を捨てる形をとり、南側の一部を終了して後、北側へと掘削を広げていった。基本的に可能な限り、重機で表土掘削し、それ以下の遺構面までは移植ゴテやスコップ等を併用し、人力で行った。ベルトコンベアの設置には苦慮したが、丘陵南側から北側中腹までの掘削には、その進捗を速める結果となった。

一方、岡田向遺跡の調査は、本田氏館跡の表土掘削終了後の地区杭設定の合間をみながら、重機によ

る掘削に着手した。当遺跡は、かつてほ場整備による事前調査が実施されていることから、かなり土壤は改変され、谷も形成されていることから湧水も激しく、難航が予想された。

調査前と調査後の地形測量を平板と光波測距儀を併用し実施した。測量図の縮尺は1／100である。このほか略測図を1／100、土層断面図や遺物出土状況図を1／20、土坑や集石遺構およびこれらの遺物出土状況図は1／10で作成した。事前測量図、全体の遺構図は1／20で作成した。全景写真の撮影は、丘陵部であることからローリングタワー上からの撮影は中止しラジコンヘリによる撮影を実施した。使用したカメラは4×5ライカでフィルムはコダックE 100 Gおよび100 TMXである。補助的に35mmのニコンカメラを使用し撮影した。

＜本田氏館跡調査日誌抄＞

10月12日 丁張設置作業実施。排土置き場等協議書作成。丘陵上で表土厚30cm、裾部は流出土が分厚く堆積。丘陵全体を4分割で調査実施か。

10月15日 ベルトコンベアを設置。J 7・8区で土師器片と染付けを探集した。

10月18日 施行計画内容の確認、事前地形測量の準備。I—B・C・Dへベルコン設置。

10月21日 I—C・D・E区表土掘削開始。表土厚はD区で50cm程度。

10月27日 I—D、C区検出の通路跡の肩部が落ちきった部分まで掘削する。I—E地区南側で検出した階段状遺構が合坂になるか吟味して掘削を続行。

10月28日 I—C・D・E区掘削完了。掘削完了につき、全景写真撮影。

11月2日 I—B区掘削。抜根に難航。

11月4日 I—B—A区掘削完了。西側堀切の肩部でサヌカイト片出土。

11月5日 B II・IIIを表土掘削開始。土橋に続く、テラス状の遺構を検出。

11月8日 II B—Iで古墳の周溝を改変と予想した通路跡を検出。II B—Iで集石遺構を確認、実測終了。無頸壺出土。

11月9日 I区B IIで掘削開始。I区B IIIの集石遺構中、1石ずつ計量の後、取り上げ。

11月11日 検出した土坑について協議。
今後の計測と記録類について調整する。

11月17日 ベルコンの配置を換え、B IV区の掘削開始。古墳の周溝と予想した溝が連続、土師器片等が出土。

11月29日 A区の掘削開始。B III区の集石遺構の写真撮影と1石ごと取り外し。

12月1日 B地区の土層断面の写真撮影実施。

12月2日 B III、B IV区の掘削実施。

12月7日 B IV区の掘削続行。階段状遺構は5段構成と判明。

12月9日 B IV区にて、帶曲輪を検出。南北畦の分層および写真撮影。

12月13日 F区掘削実施。横穴2カ所に縦断ボイントを設定。表土下に抱衣壺らしき土器出土。

12月15日 F区の掘削。階段状遺構の検出。

12月20日 F区の丘陵裾周り掘削。D 8区検出の集石2の遺構写真撮影実施。

12月24日 B区の土層断面図作成。

12月28日 F区横穴8の土層断面写真撮影および実測。

1月6日 堀切を清掃。A地区中央より下を地山まで掘削。東側で角礫が混在することから溝状遺構を想定。

1月7日 B地区頂上部の遺構を精査。墓坑および棺痕跡は確認できず。

1月13日 ラジコンヘリにて空中写真撮影実施。現地説明会準備を開始。

1月15日 午後1時より地元向け現地説明会開催。雨天ながら25名の参加者を得た。

1月20日 完掘後の地形測量を実施。主郭、帶曲輪、腰曲輪、通路跡、土坑等を順に計測。

1月21日 図面整理。遺構台帳作成と整理。現地調査終了。

<岡田向遺跡調査日誌抄>

11月13日 表土以下包含層まで、重機掘削開始。地区割りを協議、設定。

11月16日 包含層掘削終了。南端の攪乱が激しく、土層断面図作成後写真撮影し、埋め戻しを予定。

11月17日 包含層下に黒褐色粘質土層を検出。須恵器や瓦器碗が含まれる模様。

11月24日 A 1区～A 2区で、径20cmの柱穴を検出。柱痕も残存。

11月26日 B 1区～C 2区の掘削。須恵器蓋・杯身、下駄・農具等木製品出土。

11月29日 E 2、F 2区を掘り下げ。最深で2mに及ぶ。橿状の木製品出土。

12月2日 西壁及び北壁の土層を分層し、写真撮影終了。北側のA 1～B 3区までのPitを精査。木製品桶の出土状況写真撮影。

12月3日 Pitの半裁実施。平面図及び断面図作成。

12月6日 流路内の木製品の写真撮影と遺構カード記入終了。

12月10日 平面の遺構実測図作成。エレベーションを開始。

12月13日 深掘りで2.7m下に湧水層を確認。以下崩落の危険性が大であることから検出中止。

12月15日 付近への影響を考慮し、早期に埋め戻しを決定。木製品搬出。

7 文化財保護法に関する諸通知

両遺跡ともに、以下の諸通知を提出している。
法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項
(県教育長宛)

平成16年9月10日付 教理第187号
・ 遺失物法にかかる文化財発見・認定通知
(名張警察署長宛)

平成17年2月10日付 教理第4 - 14号



- 1 岡田向遺跡 2 本田氏館跡 3 ナメリ石谷遺跡 4 勝地大坪遺跡 5 羽根中島遺跡
 6 東出遺跡 7 柏尾銅鐸出土地 8 上代古墳群 9 桐ヶ谷古墳群 10 岡田向古墳
 11 北の権現古墳群 12 手登古墳群 13 塚原古墳 14 中出向遺跡 15 小鴨氏城
 16 岩野氏城 17 菊山氏城 18 沢代遺跡 19 西山遺跡 20 勝地中世墓 21 安田中世墓

0 2000m

第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) 『この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図
(伊勢路、阿保)を掲載したものである。』

第2章 位置と歴史的環境

1 縄文時代

今回の岡田向遺跡（1）と本田氏館跡（2）周辺には、縄文時代から室町時代の遺跡が分布している。以下、順に記述したい。

旧青山町の縄文時代は上津村の伊勢地において、ナメリ石谷（3）が遺跡として最初に登場する。また、今回の両遺跡から東へ3kmの地点には勝地大坪遺跡（4）、旧青山町内には羽根中島遺跡（5）・東出遺跡（6）が分布している。それぞれ石鏃・石匙等生活の足跡が確認されている。羽根中島遺跡では近年の調査で、縄文時代中期末～後期初頭の土器が数多く確認されている。¹²³このように人々の往来がさかんになるにつれ、文物交流も盛んになり次の弥生文化を創造する基盤が造られていく。

2 弥生時代

弥生時代になると、低位丘陵に囲まれたこの地域でも狭隘ながら水田耕作が営まれてくる。柏尾・岡田地域周辺にも生活の基盤がつくられる。旧青山町については後期以降、各地に集落が営まれてくる。

まず、柏尾地区では、昭和元年に弥生時代の壺形土器や土錘が発見されている。昭和初期になって地元本田氏の田普請が行われ、共同墓地近くにおいて「柏尾銅鐸」（7）が発見されている。これらは祭祀具としての用途も考えられ、農耕社会の芽生えと人々の生産活動の安定が伺える。

3 古墳時代

古墳時代に入ると、伊賀地域には全体で780基もの古墳が築造される。このうち当地域には107基の分布が認められる。ほとんどが6世紀の築造である。特に伊賀市比土所在の城之越遺跡からは、湧水点祭祀の行われた大溝跡やこれに伴う大型掘立柱建物が確認され、県指定文化財に認定されている。

この柏尾周辺では木津川右岸の平坦部から低位丘陵や左岸の後背丘陵地に後期古墳が集中している。

阿保地区には上代古墳群（8）、桐ヶ谷古墳群（9）のそれぞれ円墳と横穴墓が築造される。また、岡田地区には岡田向古墳群（10）などの方墳や円墳が確認されている。これらは直径10m程の円墳で、有蓋須恵器や直口壺や俵瓶が出土している。⁵⁶

4 古代～中世

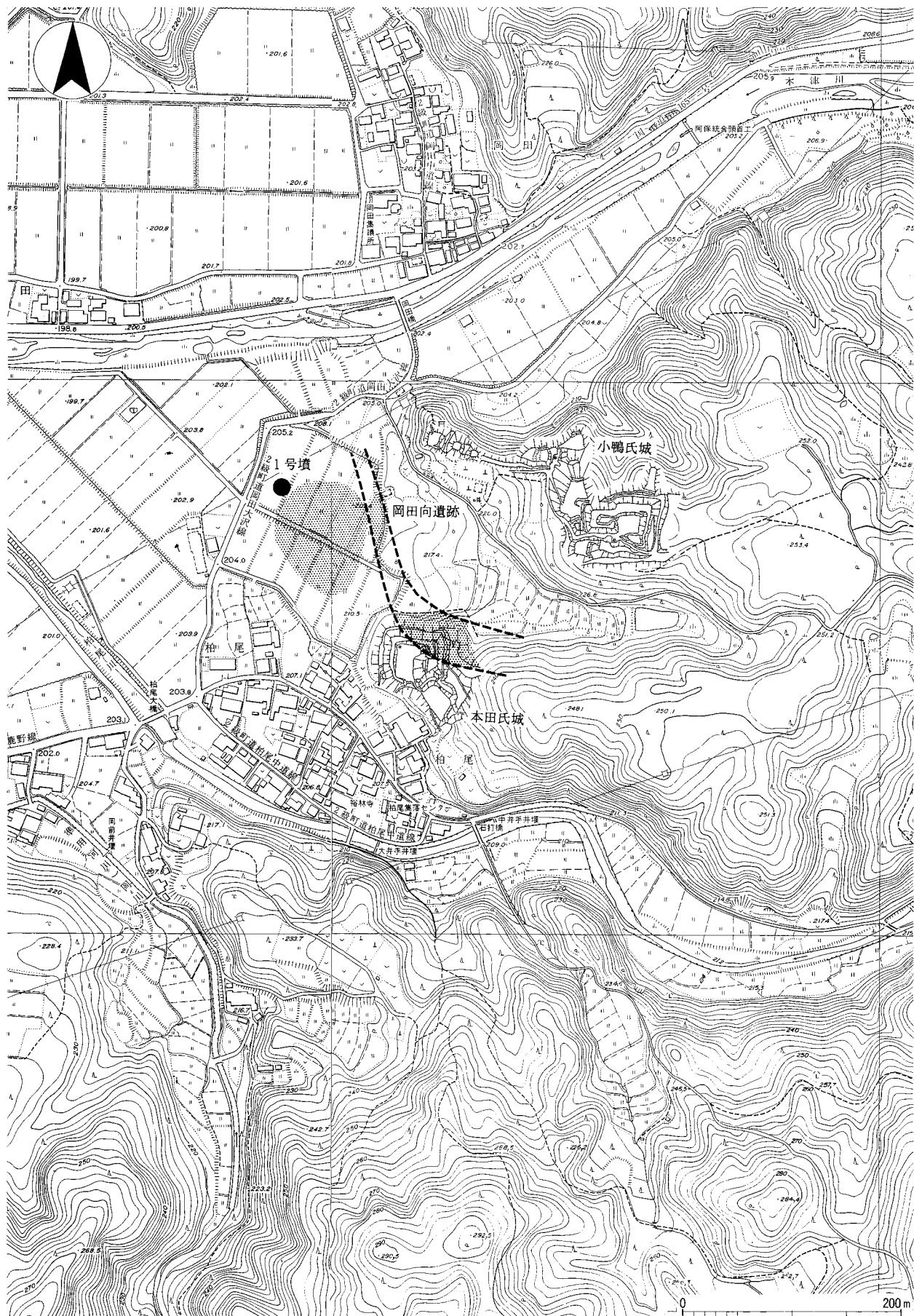
古墳時代の終わりから各地域に国家的なまとまりができると、伊賀の地でも豪族が権力の支配関係がうまれ始めた。特に地元で優勢であった氏族は阿部氏である。文献では、新撰姓氏録や古事記、日本書紀によると、「阿倍朝臣」「阿部臣」「伊賀臣」や「名張臣」「阿保朝臣」等の文字が伺える。阿部氏は伊賀北部を中心に勢力を誇った氏族で、北部地域に残る5世紀代の前方後円墳はこれらの有力氏族の権勢を振るった現れであろうと考えられている。⁷

当時、伊賀は阿拝・山田・伊賀・名張の4郡に分かれて統括され、大和方面からの文物の流通も盛んになった。一方、街道では東海道が桜井から名張を抜け、小波田から伊賀上野方面へ抜けるルート、また、南伊勢方面へ抜けの街道では、阿保を通過する一志川口へのルートである。これを含め他2ルートが往復することになる。11世紀半ばころになると、当地域の田地も荘園制下に入り、阿保が藤原実遠によって統括される。⁸この時期では集落遺跡としての西山遺跡（19）が知られていてこの時期の瓦器や土師器皿が出土している。中世に入ると強大な勢力は当地には見られないが、在地土豪の隆盛が伺える。本田氏（2）が地元土豪として権勢を振るった時代は、隣接して小鴨氏（15）や岩野氏（16）や菊山氏（17）が虚勢を張って、各氏ともに城館を築いていった。また、当地域には、中世墓も分布し、上流には勝地中世墓（20）や下流では安田中世墓（21）が知られる。

これ以降の歴史的な事象については、その他の文献に譲りたい。

【註】

- 1 「阿保」『日本地名辞典』角川書店、1998
- 2 「阿保」『三重県の地名』24 平凡社 1983
- 3 松本仁志『阿保山の歴史』青山文芸社1995
- 4 船越重伸他『羽根中島遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2001. 3
- 5 中島千年他『岡田向遺跡発掘調査報告』青山町遺跡調査会、1986. 3
- 6 竹内英昭他『中出向遺跡（第2次）発掘調査報告』—本文編—三重県埋蔵文化財センター 2001. 3
- 7 『青山町史』青山町教育委員会 1986
- 8 『日本荘園制』平凡社2002



第2図 調査区位置図 (1 : 5,000)

(縄張図は『伊賀の中世城館』より引用)

第3章 岡田向遺跡の遺構

1. 基本的層序

今回の調査区は小鴨氏城の西側、丘陵裾部に広がる岡田向遺跡の東端部に位置する。また、1号墳は調査地点に比較すると1段高い水田にある。調査区は殆どがほ場整備による相当の攪乱を受けていた。このため遺構検出は困難を極めた。

北半部は第1層が黒褐色粘質土（耕作土）、第2層は暗褐色粘質土（床土）、第3層灰黄褐粘質土（包含層）第4層褐灰色粘質土が堆積しており、第5層は褐灰色粘質（砂質土含む）で、この上面で、小穴や流路を確認した。南半部は第1層～第3層までは北半部と同層序で、第4層のみ、青灰色砂質土が堆積している。主に北側で検出したPit群は第4層上から掘り込まれている。ここで検出した建物等が機能しなくなつて直後、流路自体も埋没したと考えられる。順に概説する。

2. 遺構

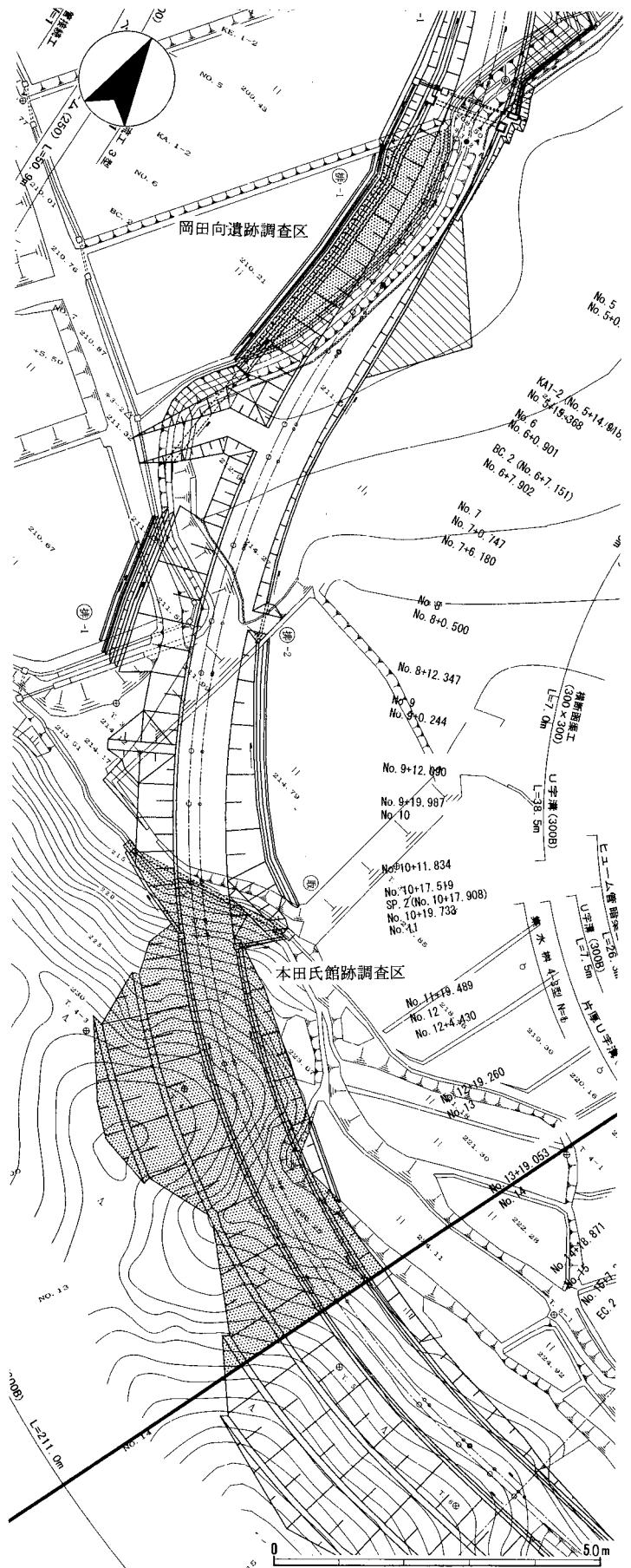
古墳時代の遺構

S B 2 東西1間以上×南北1間以上の建物で、柱間寸法は、桁間は1.6m、梁間は1.0m前後である。柱穴は、掘形が60cmで深さは30cmである。柱痕も確認できた。径は20cmである。検出面から古墳時代後期の須恵器が出土している。

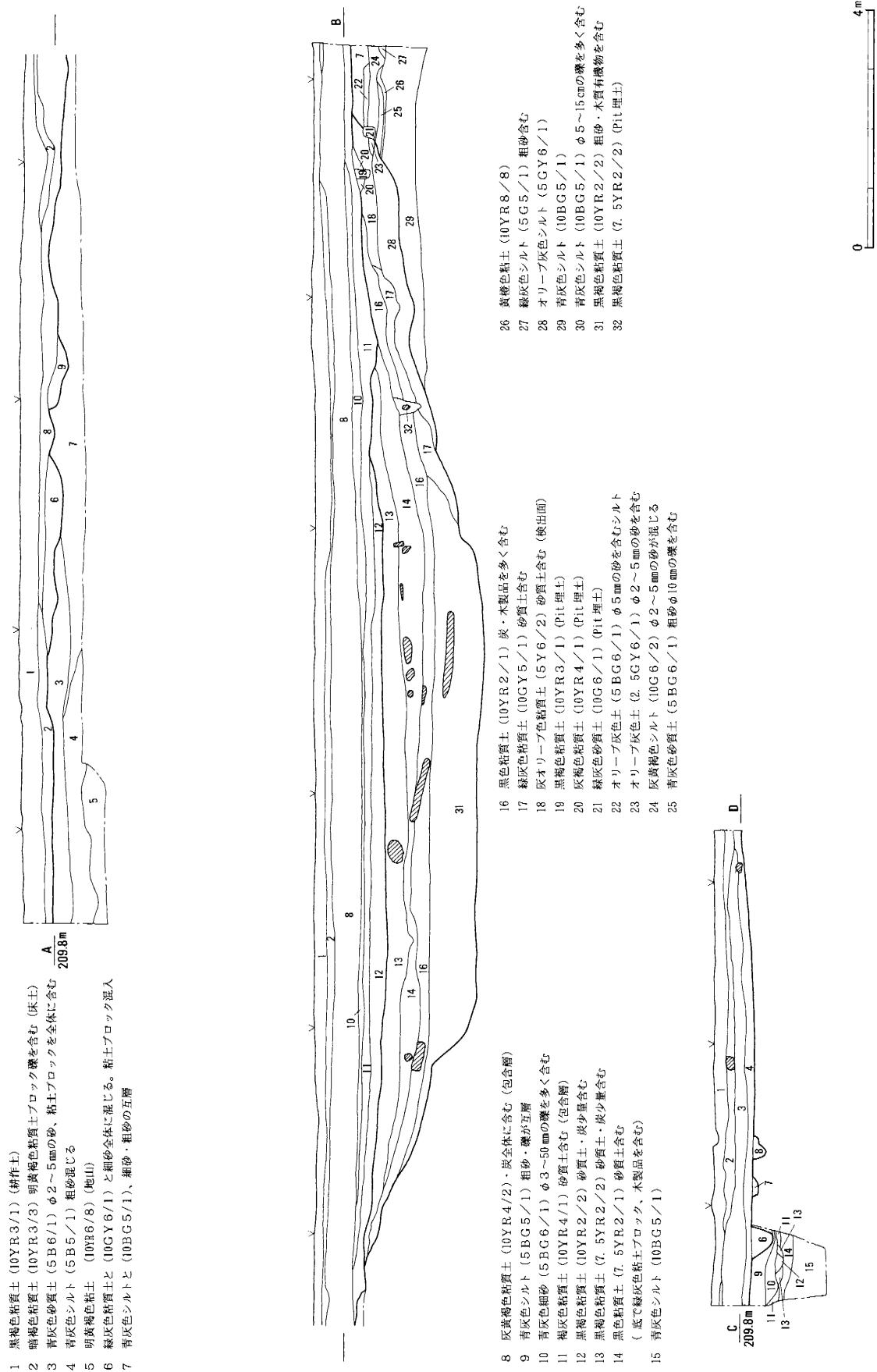
S D 1 調査区の中央の中央部で検出した。最大幅は18m、深さ2.7mの流路である。東側の谷から連続するものであろう。地形から推察するに、この地点は流路の分岐点に相当し、木津川へ流入する支流と柏尾集落へ流入する流路にあたる。埋土からは、容器、運搬具、建築部材等多数の木製品が出土した。時期的にはS B 2と同様であると考えられる。

B 2 Pit 3 直径は40cm、深さ30cmで、中央から柱痕が認められ、そこから地山に打ち込まれた部材も出土した。S B 2と同時期の遺構と考えられる。

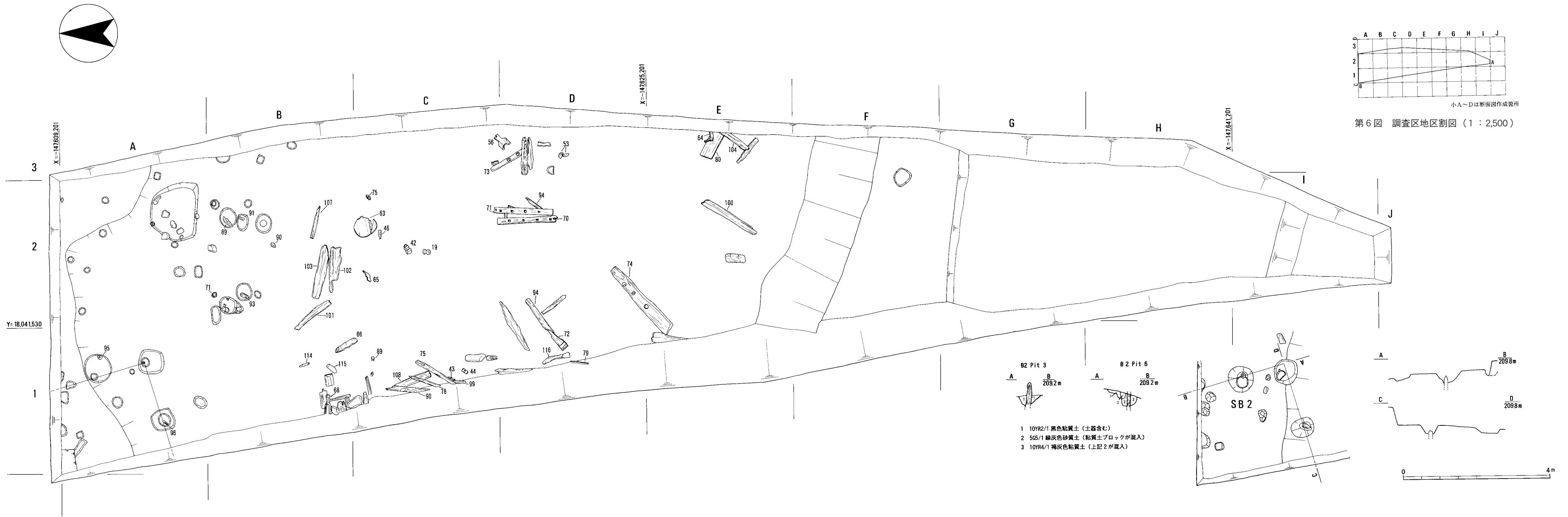
B 2 Pit 6 直径は40cm、深さは20cm程であった。検出直後に、小礫10個ほどを中央部で確認した。これらは根石とも考えられる。中央で地山に打ち込まれたままの部材を確認した。時期確定できる土器は出土していないので、詳細時期は不明である。



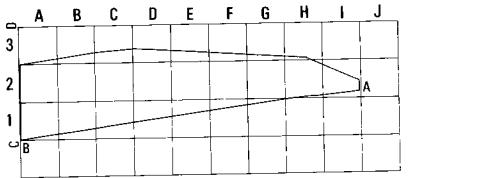
第3図 調査区配置図 (1 : 1,000)



第4図 岡田向遺跡土層断面図 (1 : 100)



第6図 調査区地区割図 (1 : 2,500)



第4章 岡田向遺跡の出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどがSD 1から出土している。土師器、須恵器等の土器類がコンテナパットで19箱、多種多量に出土した木製品は15箱である。木製品の内訳は、建築部材38点、農具10点、紡織具2点、容器5点、杭等が5点、雑具2点、用途不明品15点である。

以下、概略を順に記述する。

1. SD 1 出土土器

1～21は、古墳時代の須恵器で、1～5・17が杯蓋、6～12が杯身、14が脚付長頸壺、15～16が高杯、19～20が甕である。このうち、杯身6は立ち上がりが大きく、底部が扁平で口クロケズリも丁寧で、5世紀末から6世紀初頭頃に遡るであろうが、他はいずれも6世紀以降である。12・13には、底部に「X」のヘラ記号が認められる。脚付長頸壺14は、壺部の肩の張りが弱く、やや古相を示す。高杯は、15が短脚、16が長脚2段透である。

21～30は、飛鳥時代から奈良時代の須恵器である。21は大甕、22～24は杯蓋、25～30が杯身である。大甕21は内面に墨痕がわずかに認められ、転用硯と考えられる。30は非常に大きな杯身で、底径は21.5cmを測る。

31～33・34～37は飛鳥時代から奈良時代の土師器類（34のみ古墳時代に遡る可能性あり）で、31～32は杯、33は皿、34は椀、35～37は甕である。皿33にはかすに螺旋状暗文の痕跡が認められる。

甕はいずれもハケ調整で、口縁端部を摘み上げるもので、36は長胴甕であろう。

37は、弥生土器壺である。近傍にあったものが混入したものと思われる。

38～40は瓦器である。38は瓦器皿で、底部内面に暗文が施されている。39は瓦器椀で外面に横方向に筋状のミガキが、内面に口縁から下に底部までのミガキが緻密に施されている。40も瓦器椀の底部破片であり、螺旋状のミガキが認められる。

2. SD 1 出土木製品

後述する自然科学分析には77点を抽出し、切片を採取後、器種を判別し、樹種同定を行い、保存処理を実施した順に記述する。

下駄（42・43）

長さ、幅共に異なり、対にならない。鼻緒の取付孔から共に右足用であろう。脚右端部ほど激しく磨り減っている。42は細身で、残存状況は良好である。柾目を使用している。台と歯に段のない組み合わせは六大A遺跡分類のB 2類に相当する。43は、幅広で、使用痕が明瞭である。歯と台の間に段をもつ部分は六大A遺跡分類のA 3類である。ともに原材料

にはスギである。

木錘（44）

丸太材の中心を外した位置に穿孔を施して紐通し孔としたもので、『木器集成』の5類、六大A分類のB類である。材質は、ヒノキ。

紡錘車（45）

やや大きいが、紡錘車であろう。中央に向けて斜め方向に削り込んだ調整痕が認められる。スギ。

杓型木製品（47）

柄が殆ど欠落している。日用雑器の類ではこれ1点のみ確認しただけである。

棒状具（48～51）

49・50は断面円形で、ともに面取り加工を施している。48は片端部を細く削り出しており、別材に差し込むための調整を行っている。

曲物（52～54・63）

52は底板で、側縁から木釘が打ち込まれているほか、円周に沿って小円孔が穿たれており、底裏からも木釘で止めたと思われる。材質はヒノキである。63は、SD 1の護岸から倒立して出土した遺物である。直径が62cm、深さは7cmである。側板と底板は、木釘で接合されていた。接合部には2mmの孔が等間隔に開けられ、各部を桜皮で接合したものである。3力所で樹皮が付着していた。

把手付槽（55）

破片になっているが、出土遺物のうち最も良好な残存状態であった。側面から斜め方向に角材（把手）を挿入して使用したとみられる。把手は確認できなかった。

案（56～57）

57は、残存状態が良好である。天板は加工の容易なヒノキの柾目を使用している。脚部は、一辺が3cmの角材で、この部材は、天板の裏面に開けられた木口に挿入された状態で出土した。もう一方は抜け落ちて認められない。56は大きな案脚の未製品である。上・下部に加工が施されている。

武器形木製品（59・62）

剣状であるが把の表現から刀形であろう。

先尖棒（58・60・61）

先端が尖るなど当初は武器形の範疇で考えたが、断面形が円形となるなど確定するには至らなかった。61は先端が斜めに切り落とされている。

曲柄又鋤（64～65・67）

64は曲柄鋤の反柄、65はナスピ形曲柄又鋤である。65はアカガシ属に類する材で製作されており、笠部の下が鋭く抉

り込まれており、古墳時代後半以降の形態を示している。67も又鍬の刃部であろう。

紡織具（66）

緯打具であろう。中央部の抉り部は、いわゆる「アリ溝」状を呈する。材質はユキノシタに属する。

豎杵（68）

出土時には握部から2分割した状態であった。この接点も一部欠落している。使用時は全長が80ほど遺物であったと考えられる。先端部に擦面が認められる。

長方板（69）

長方形の板目材である。中央左に8mmの小孔が開けられている。

櫛（70～71）

ともに脚部で160cmを超える。先端が、スキー板状に角が丸められている。側面には5箇所に木口が穿たれていて、この部分に横方向の横桟木が差し込まれていたと考えられるが、桟木は残存しない。近隣では、伊賀市上神戸の高賀遺跡で類例がある。

梯子（72）

残存長168cmを測る。上面の右側に1段目のエグリが施されている。他の部位には認められないため未製品である。

横架材（73～74）

73はヒノキで、方形孔が多く穿たれている。図中最上部の2個一対の小方孔は固定のため縄で縛るための紐通し孔であろう。74はマツ材で、73よりも小さな円孔が開く。

柱材（76・77・78・84・88～98）

77は、頂部に出ホゾが造り出されており、横架材を差し込んで固定するための仕口と思われる。下部は腐食が激しく、この部分から土中に埋められていた可能性がある。掘立柱建物の柱材であろう。82も77同様、端部に出ホゾをもつが、本体の表面が面取りされており、柱材にはならないかもしれない。84は表面に樹皮を残す。材質はマツ科に属する。

垂木？（87）

樹皮が残る細い棒状材で、片側端部に抉りがある。欠損しているため確定できないが、垂木として用いられた可能性があろう。

板材（79～80・99～106）

79は側縁部に小円孔、80は潜り孔が穿たれている。80は側縁の有孔部が薄く削がれており、ここに同材を2枚重ねて縛ったと推定される。

残材・杭等（76・85・87・112～117）

76は長さを揃えるためか、何かを製作するために切り落としたものであろう。

3. 包含層出土土器

118は調査区内においては1点のみ確認した、高杯である。杯底部から屈曲して口縁にかけて八の字を開く。端部は、若

干内側につまみ上げられて収まる。古墳時代の遺物と考えられる。

119は須恵器高杯の杯部残片である。おそらく長脚透かしの高杯になろう。

120～122は杯蓋、124～128は杯身である。127・128は扁平で、口縁からの立ち上がりも短く、内傾する。時期的には古墳後期の後半頃に相当すると考えられる。

130～134は杯Bである。130～132の高台は屈曲部からやや離れて貼り付けられている。これに対して133・134は屈曲部寄りに付けられている。

136は土師器杯Bである。内面に放射状暗文が1段施されている。高台は比較的高く、屈曲部に貼り付けられている。奈良時代初頭ころに該当する。

137～140は土錘である。

141はサヌカイト製の石槍である。右側縁ほど細かい調整剥離痕が認められる。全体に若干の風化がある。

142・146は瓦器皿である。142の内面には螺旋状のミガキが施されている。146には密に斜格子状のミガキが認められる。どちらも中期ころの遺物である。

143・144・147は土師器甕である。144の口縁は若干外反気味であるが、端部は上方に摘み上げられる。

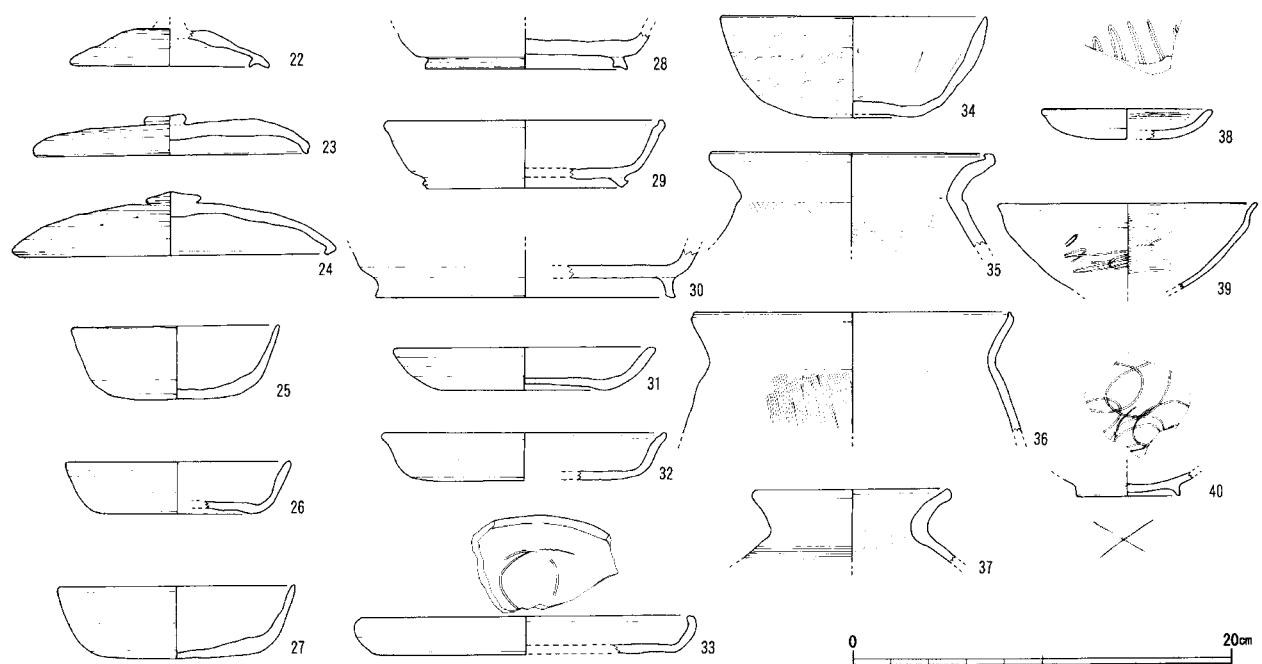
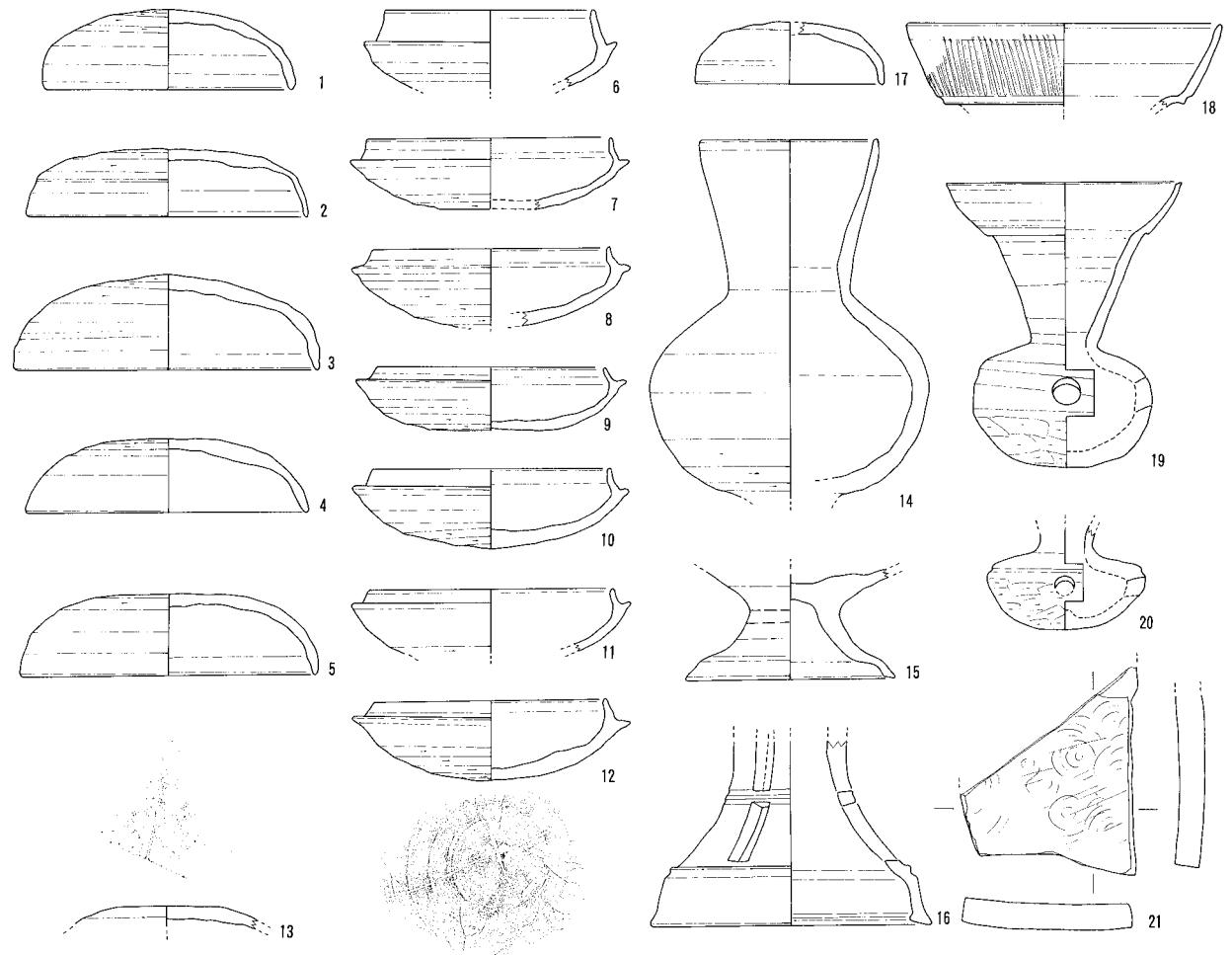
149は頸部でやや内湾気味に立ち上がり、端部はヨコナデされて、若干内側で丸みを持つ。150は大型品である。口径は28cmである。内外面ともに頸部下に斜行のハケメが施されている。

145は古墳時代の甕かとも考えられる。151は製塩土器である。152は陶器甕で、底部に透孔が1力所認められる。

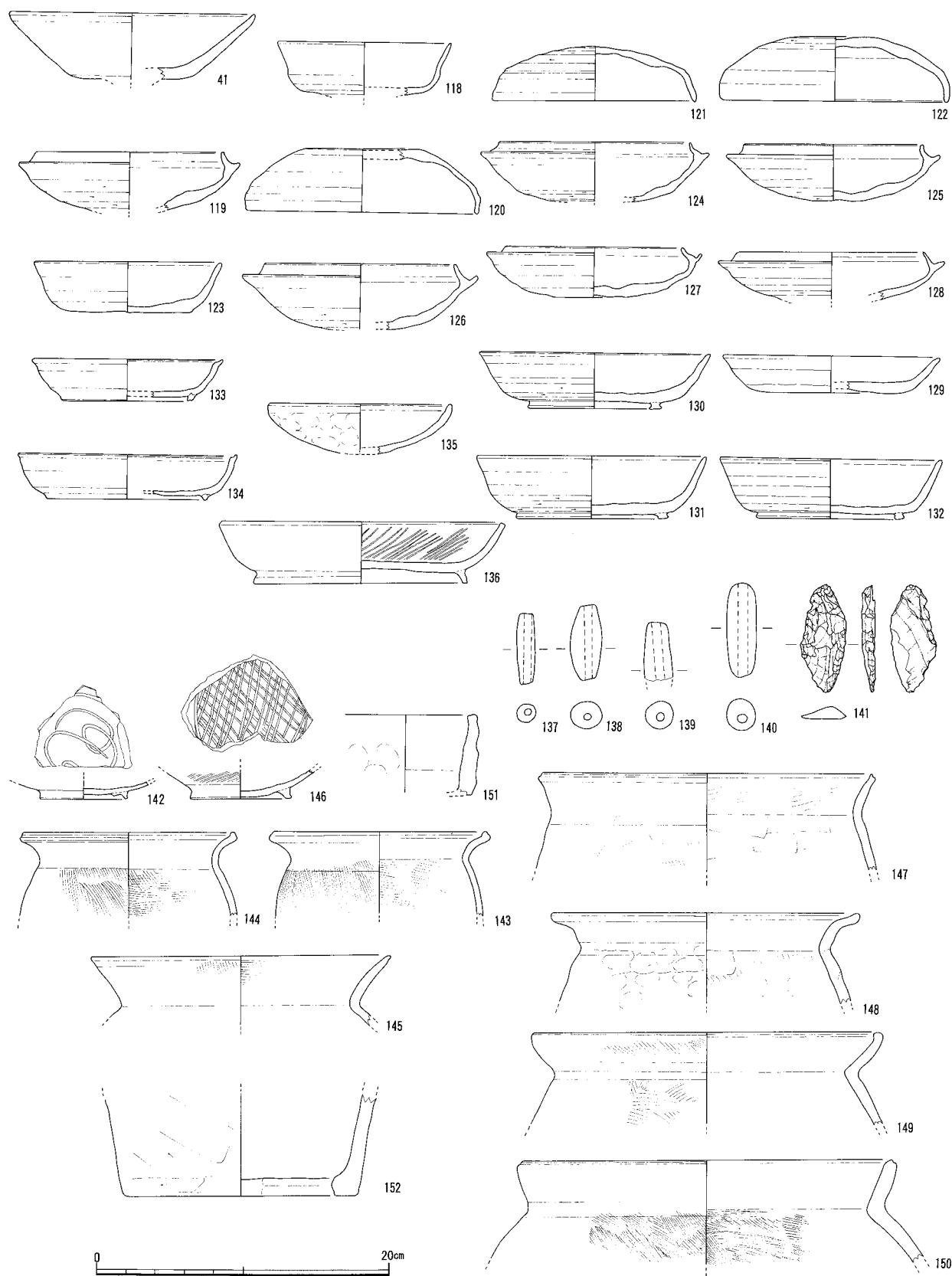
155・156は土師器杯Aである。底部から口縁にかけての屈曲はややS字気味に外反する。底部はどちらも肥厚する。奈良時代の後期以降の遺物である。

【参】

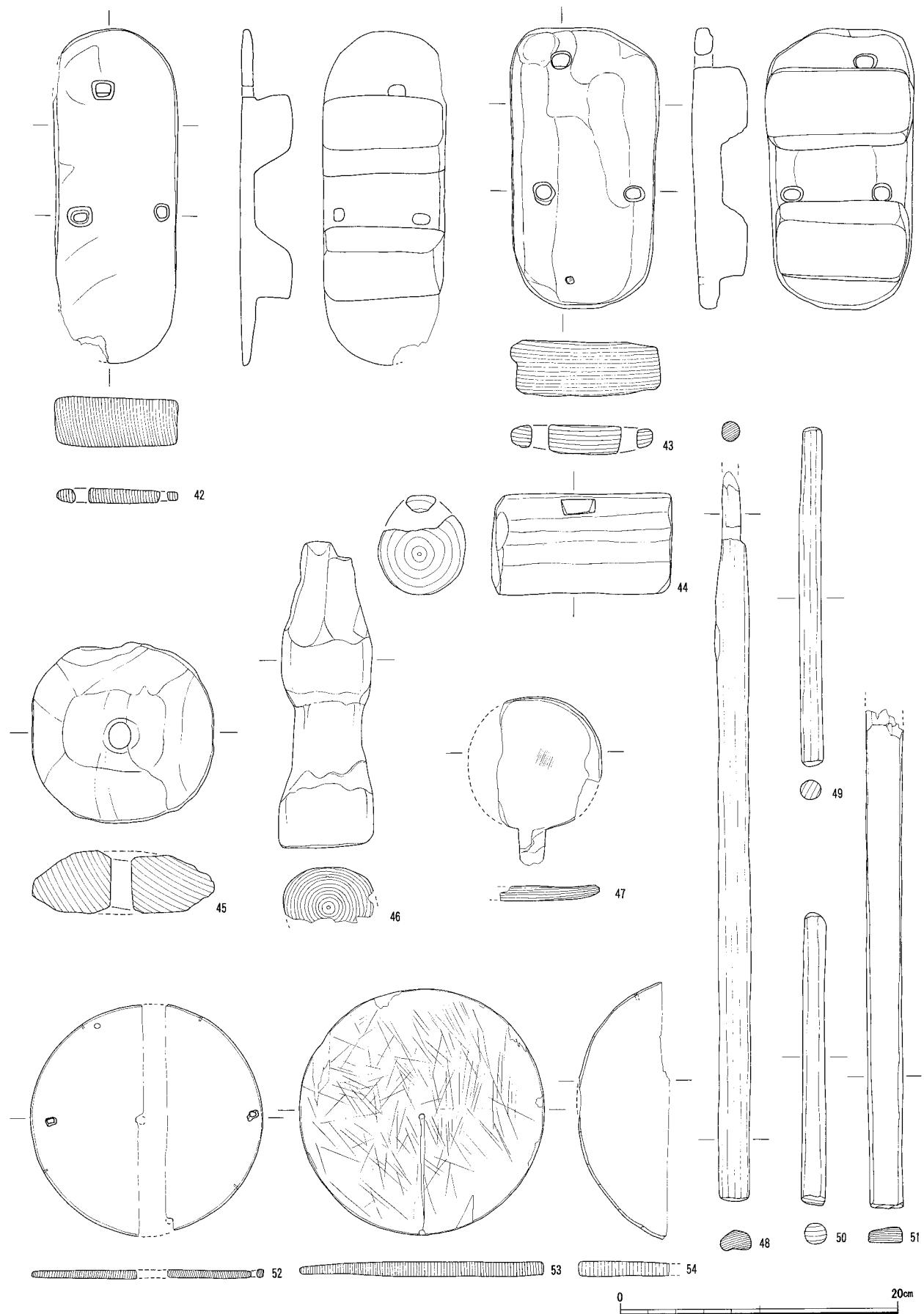
- 1 穂積裕昌「木製品の解説」『六大A遺跡発掘調査報告』(木製品編) 三重県埋蔵文化財センター 2000.3
- 2 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の編年的研究」『陶邑』』大阪府教育委員会1978
- 3 田辺昭三ほか『陶邑古窯址群。』平安学園考古クラブ 1966
- 4 「木器集成図録 近畿原始編」『奈良国立文化財研究所 資料』第36冊 1993
- 5 樋上昇「耕作のための道具—ナスピ型農耕具を中心にして」『季刊考古学』47 1994
- 6 『鬼虎川遺跡調査概要。』遺物編 木製品 (財) 東大阪市文化財協会1988
- 7 「第5章考察、弥生時代の櫛」『鬼虎川の木製品』— 第7次発掘調査報告書第4冊— (財) 東大阪市文化財協会1987
- 8 穂積裕昌「3. 高賀遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』—第3分冊—三重県埋蔵文化財センター1995



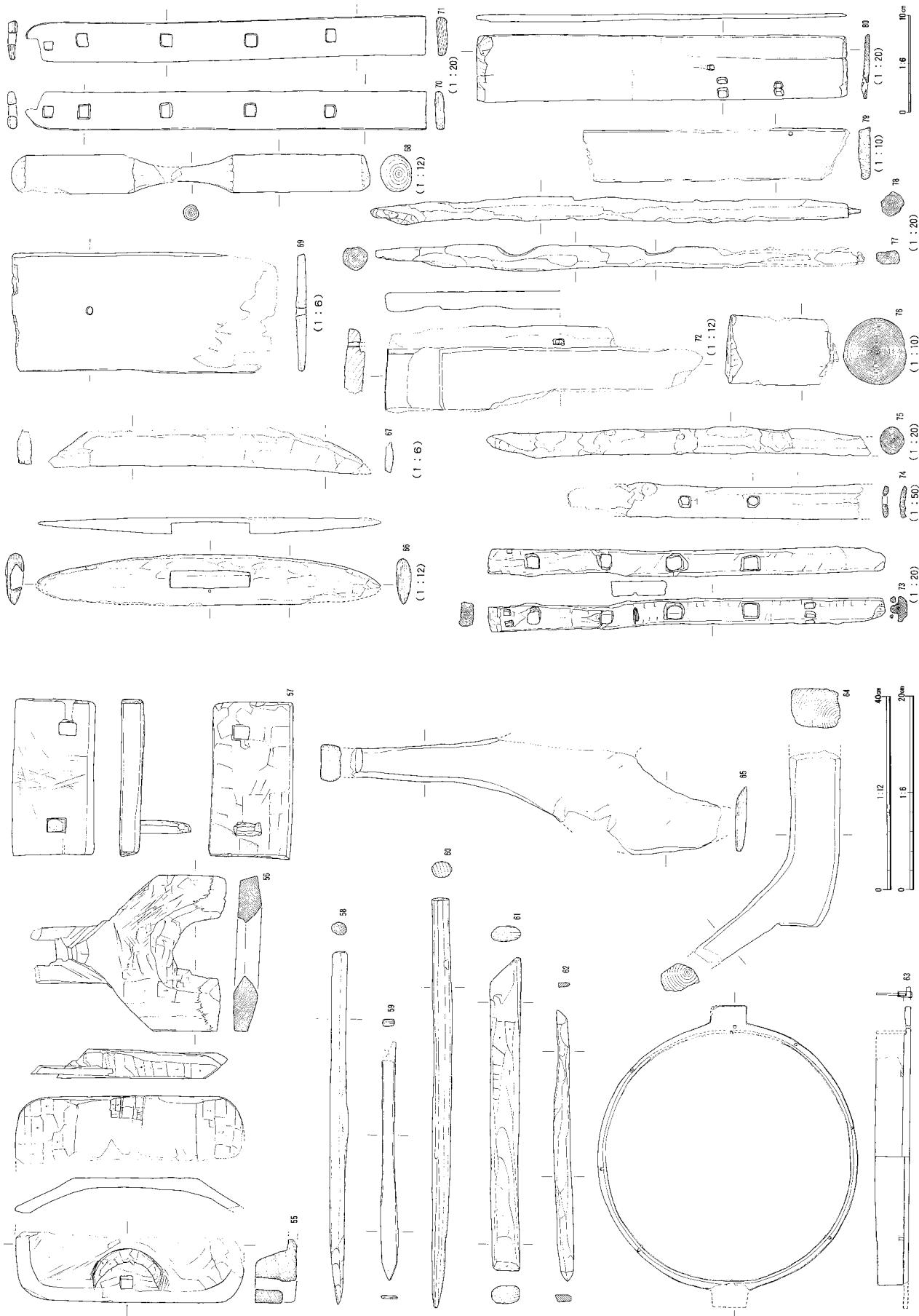
第7図 出土遺物実測図(1) (1 : 4)



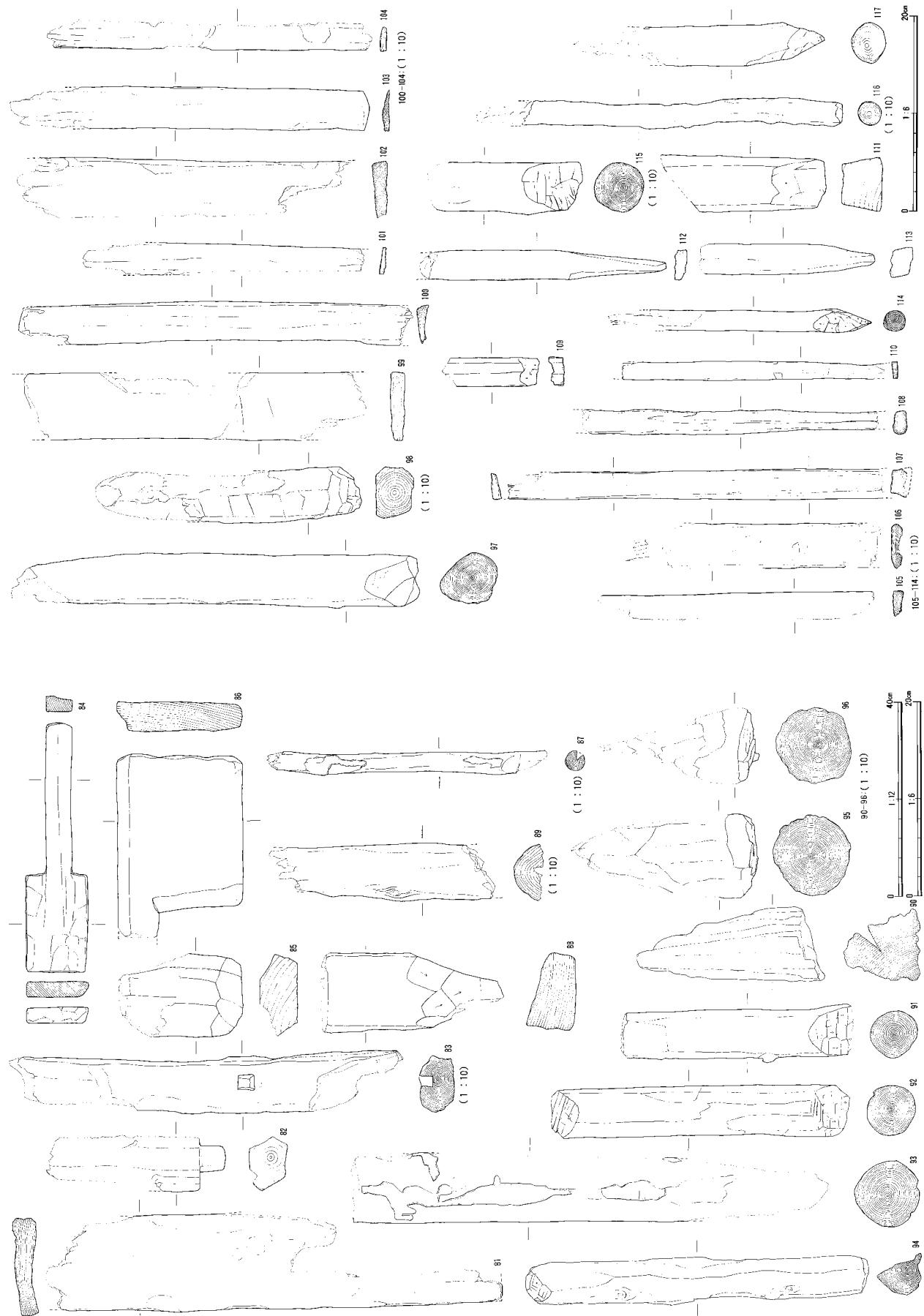
第8図 出土遺物実測図(2) (1 : 4)



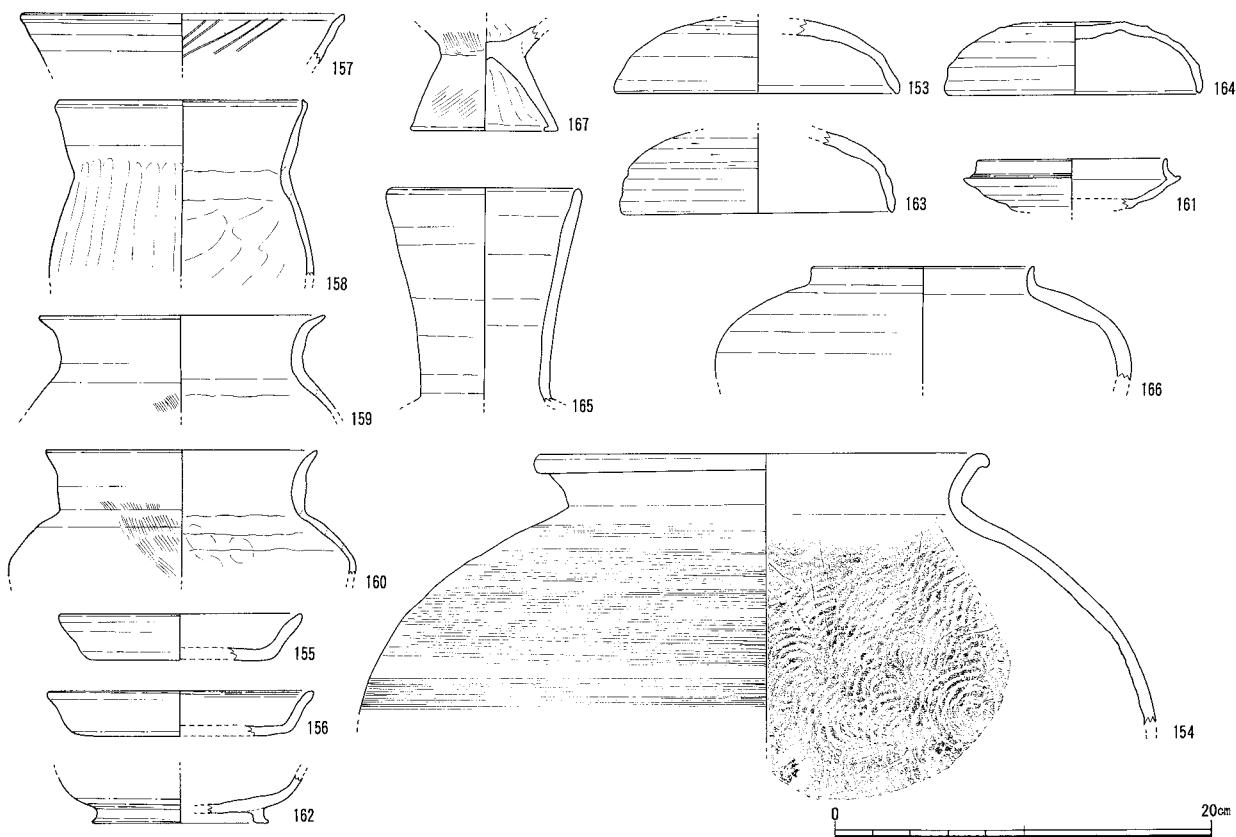
第9図 出土遺物実測図(3) (1:4)



第10図 出土遺物実測図(4) (1 : 6他 縮尺は図中に示す)



第11図 出土遺物実測図(5) (1 : 6他 縮尺は図中に示す)



第12図 出土遺物実測図(6) (1 : 4)

番号	実測番号	器種	器形	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	011-06	須恵器	杯蓋	D 3	S D 1	(口)13.4 (器高)4.3	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰黄色2.5Y7/2 灰白色N7/0	口縁5/12	内面煤付着
2	016-03	須恵器	杯蓋	C 2	S D 1	(口)15.0 (器高)3.7	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N5/0	口縁1/12	
3	014-01	須恵器	杯蓋	C 1	S D 1	(口)16.3 (器高)5.1	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁4/12	
4	012-02	須恵器	杯蓋	B 1	S D 1	(口)15.0 (器高)3.9	外：ヘラ切り→ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	口縁1/12	天井部裏面に当て具痕跡あり
5	013-02	須恵器	杯蓋	D 1	S D 1	(口)15.9 (器高)4.3	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0 黄灰色2.5Y4/1	口縁4/12	
6	009-02	須恵器	杯身	B 2	S D 1 (黒色粘質土) (受径)13.4	(口)11.2	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N6/0	口縁4/12	
7	016-04	須恵器	杯身	C 1	S D 1	(口)13.0 (器高)3.8	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色2.5Y4/1 灰色N4/	口縁3/12	
8	015-01	須恵器	杯身	B 2	S D 1	(口)12.7	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	黄灰色2.5Y5/1	口縁4/12	
9	011-04	須恵器	杯身	C 2	S D 1	(口)12.2 (器高)3.4	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	完存	
10	012-01	須恵器	杯身	B 1	S D 1	(口)12.6 (器高)4.2	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色5Y5/1 褐灰色7.5YR5/1	ほぼ完存	口縁端部全体に研磨痕跡あり
11	009-01	須恵器	杯身	B 2	S D 1 (黒色粘質土) (受径)14.8	(口)13.2	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N5/0	口縁8/12	
12	011-05	須恵器	杯身	B 2	S D 1 (器高)4.3	(口)12.3	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N4/0	口縁11/12	ヘラ記号「×」
13	016-06	須恵器	杯蓋	B 1	S D 1	—	外：ヘラギリ→ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗	灰色N5/	天井部残片	ヘラ記号「！」あり
14	014-04	須恵器	長頸壺	C 2	S D 1	(口)9.6 (体径)15.0	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ→指オサエ	密	灰色N5/0	口縁4/12	接合部に透かしあり
15	011-02	須恵器	高杯脚部	D 2	S D 1	(底)11.2	外：ロクロナデ→ナデ 内：ロクロナデ→ナデ	密	灰色N5/0	底部4/12	
16	012-03	須恵器	器台	B 1	S D 1	(底)15.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	底部2/12	2段透かし
17	010-02	須恵器	杯蓋	E 2	S D 1	(口)10.1 (器高)3.3	外：ヘラケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰白色N7/0 灰色N6/0	口縁3/12	
18	016-05	須恵器	瓦泉	E 3	S D 1	(口)17.0	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N4/ 灰色N6/	口縁2/12	カキメ
19	011-01	須恵器	瓦泉	C 2	S D 1 (黒色粘質土) (器高)15.2	(口)12.7	外：ロクロナデ→ナデ後ヘラケズリ→ナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁9/12	
20	013-01	須恵器	瓦泉	C 2	S D 1 取上N o 5	(体部径)8.5	外：手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	頭部以下残	穿孔1力所
21	013-06	須恵器	甕(硯)	D 1	S D 1	(口)10.1 (横)9.3	外：タタキ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	体部残片	
22	010-03	須恵器	蓋	B 3	S D 1	(口)10.6	外：ヘラケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰白色N7/0 灰色N6/0	口縁4/12	ツマミ欠損
23	011-03	須恵器	蓋杯	C 2	S D 1	(口)14.5 (器高)2.1	外：ロクロナデ→ナデ 内：ロクロナデ→ナデ	密	灰色N6/0	口縁6/12	転用硯、墨付着
24	009-07	須恵器	杯蓋	C 1	S D 1	(口)17.2 (器高)3.35 (ツマミ径)2.9	外：貼り付け後ナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	灰色N5/0	口縁2/12	
25	013-05	須恵器	杯	E 2	S D 1	(口)11.0 (器高)3.8	外：ロクロナデ→ロクロケズリ→ヘラ切り後ナデ 内：ロクロナデ	密	灰白色N7/0	口縁1/12	
26	009-04	須恵器	杯	A 2	S D 1	(口)12.0 (器高)2.75	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0 灰色N5/0	口縁1/12	
27	009-06	須恵器	杯	C 1	S D 1	(口)12.6 (器高)3.8	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	灰白色2.5Y7/1	口縁3/12	
28	009-03	須恵器	杯	F 2	S D 1	(台径)10.7	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N8/0	台部4/12	裏面に墨痕跡
29	017-05	土師器	杯	C 2	S D 1	(口)16.4 (器高)3.6	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ→ロクロナデ 内：ロクロナデ→ヨコナデ	やや密	灰白色10YR8/2	口縁2/12	
30	012-04	須恵器	杯	C 2	S D 1	(台径)15.8	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ→糸切り 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0 灰色N5/0	底部3/12	
31	017-04	土師器	皿	C 1	S D 1	(口)13.8 (器高)2.2	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	粗	にぶい橙色5YR6/6 灰白色10YR8/2	口縁2/12	
32	009-05	土師器	皿	C 1	S D 1	(口)15.0 (器高)2.5	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	やや粗	浅黄橙色7.5YR8/3	口縁2/12	
33	017-06	土師器	皿	C 1	S D 1	(口)18.0 (器高)2.0	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→暗文→ナデ	やや密	淡橙色5YR8/4 灰白色10YR8/2	口縁1/12	螺旋状暗文
34	012-05	土師器	杯	C 2	S D 1	(口)14.0 (器高)5.3	外：ヨコナデ→指オサエ、ナデ 内：工具ナデ	密	灰黄褐色10YR6/2	口縁9/12	
35	017-02	弥生土器	壺	B 2	S D 1	(口)10.4	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→工具ナデ	やや粗	橙色7.5YR7/6	口縁2/12	
36	012-06	土師器	甕	C 2	S D 1	(口)15.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ	密	灰白色2.5Y8/1	口縁2/12	
37	005-02	土師器	甕	B 2	S D 1	(口)16.6	外：ヨコナデ→タテハケ 内：ヨコナデ→指オサエ	やや粗	褐灰色10YR4/1	口縁4/12	1701と接合
38	010-06	瓦器	皿	D 3	S D 1	(口)9.0 (器高)1.6	外：ヨコナデ→ナデ→指オサエ 内：ヨコナデ→ナデ	密	灰色N4/0 灰白色N8/0	口縁3/12	
39	010-05	瓦器	椀	D 3	S D 1	(口)13.6	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N4/0 灰白色N8/0	口縁1/12	
40	010-04	瓦器	椀	A 1	S D 1	(台径)5.4	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N4/0 灰白色N8/0	台部6/12	螺旋状暗文
41	002-04	土師器	高杯(杯部)	B 2	S D 1	(口)16.9 (器高)4.5	外：ナデ 内：ナデ	密	にぶい橙色5YR6/3 にぶい赤褐色5YR5/3	口縁2/12	

第1表 遺物觀察表

番号	実測番号	器種	器形	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
118	004-05	須恵器	高杯	D 2	包	(口)12.0	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや密	灰色5Y5/1	口縁1/12	高杯か?
119	015-04	須恵器	杯	B 2	包	(口)12.8 (底)8.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白色2.5Y7/1	小片残	
120	005-03	須恵器	杯蓋	C 2	包	(口)15.8 (器高)4.4	外:ケズリ→ナデ 内:ロクロナデ	やや密	黒色N2/ 褐色10YR6/1	口縁2/12	
121	016-02	須恵器	杯蓋	C 1	包	(口)14.0 (器高)3.7	外:ロクロケズリ→ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰色N6/0 灰色N5/0	口縁2/12	
122	013-03	須恵器	杯蓋	D 1	包	(口)16.0 (器高)4.4	外:ロクロケズリ→ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
123	015-02	須恵器	杯身	B 2	包	(口)12.8	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁3/12	
124	003-04	須恵器	杯身	B 2	包	(口)13.2	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰色7.5Y5/1	口縁3/12	
125	003-03	須恵器	杯身	B 2	包	(口)12.5 (器高)3.9	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁4/12	
126	015-03	須恵器	杯身	B 2	包	(口)13.2	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰色N4/0	口縁3/12	
127	014-03	須恵器	杯身	C 1	包	(口)12.4 (器高)3.4	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁3/12	
128	004-03	須恵器	杯身	C 2	包	(口)14.8	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰色N6/	口縁2/12	
129	008-02	土師器	皿	D 2	包	(口)15.0 (器高)2.5	外:ヨコナデ→工具ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/3 灰褐色7.5YR4/2	口縁1/12	
130	003-02	須恵器	杯	B 2	包	(口)16.0 (器高)3.85	外:ナデ→ロクロケズリ→貼り付け後ナデ 内:ナデ	密	灰色N5/0	底2/12	
131	002-01	須恵器	杯	B 1	包	(口)15.8 (器高)4.3	外:ロクロナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
132	002-02	須恵器	杯	B 1	包	(口)15.4 (器高)4.1	外:ロクロナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰色N6/0	口縁2/12	
133	005-04	土師器	杯	C 3	包	(口)13.0 (器高)2.8	外:ヨコナデ→貼り付けナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	にぶい橙7YR7/4 浅黄橙色5.YR8/3	口縁2/12	高台貼付部裏面に沈線を施す
134	002-03	土師器	杯	B 1	包	(口)15.0 (器高)3.1	外:ロクロナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙色5YR6/4	口縁2/12	高台貼付部裏面に沈線を施す
135	001-05	土師器	椀	B 1	包	(口)12.6 (器高)3.4	外:ヨコナデ→ナデ→指オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	密	にぶい黄橙色10YR6/3	口縁3/12	
136	005-01	土師器	杯	B 1	包	(口)19.4 (器高)4.2	外:ヨコナデ→ミガキ→貼り付け後ナデ 内:ヨコナデ→暗文→ナデ	やや密	浅黄橙色7.5YR8/4	口縁6/12	
137	008-06	土師質	土錐	A 1	包	(長)4.8 (幅)1.35	外:ナデ→オサエ	やや粗	褐色10YR4/1 黄色N5/1	完存	
138	008-05	土師質	土錐	A 2	包	(長)5.1 (幅)2.15	外:ナデ→オサエ	やや粗	褐色10YR5/1 灰色N4/0	完存	
139	008-07	土師質	土錐	A 1	包	(長)4.1 (幅)1.9	外:ナデ→オサエ	やや粗	にぶい黄橙色10YR7/3	半分折損	
140	008-04	土師質	土錐	C 1	包	(長)6.5 (幅)2.15	外:ナデ→オサエ	粗	灰黄色2.5Y7/2 暗灰色N3/0	完存	
141	004-06	石器	U F	C 3	包	L = 7.4, W = 3.2, H = 1.0					
142	002-05	瓦器	椀	B 2	包	(高台径)6.0	外:ナデ→貼り付け→ヨコナデ 内:ナデ→螺旋旋	密	にぶい黄橙色10YR7/3	底8/12	
143	001-03	土師器	甕	B 1	包	(口)15.2	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	灰白色2.5Y8/1	口縁3/12	内面に炭化物付着
144	001-04	土師器	甕	B 1	包	(口)15.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	灰白色2.5Y7/1	口縁4/12	
145	008-01	土師器	甕	D 2	包	(口)20.6	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ナデ	やや粗	にぶい褐色7.5YR6/3 灰褐色10YR6/2	口縁2/12	
146	005-05	瓦器	椀	C 3	包	(底)7.0	外:ヨコナデ→ミガキ→貼り付け後ナデ 内:ヨコナデ→暗文	やや密	灰白色2.5Y8/2	底部2/12	
147	004-01	土師器	甕	B 2	包	(口)23.0	外:ヨコナデ→ヨコハケ 内:ヨコハケ→ナデ	やや密	にぶい橙色5YR7/3 灰色2.5Y8/2	口縁3/12	外面に煤少量残る
148	001-02	土師器	甕	B 1	包	(口)21.2	外:ヨコナデ→指オサエ→ナデ 内:ヨコナデ→ヨコハケ→ナデ	密	にぶい褐色7.5YR5/4	口縁3/12	
149	002-06	土師器	甕	B 2	包	(口)24.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	にぶい黄橙色10YR7/3	口縁1/12	内面煤付着
150	001-01	土師器	鍋	B 1	包	(口)26.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	外:灰褐色10YR5/2 内:	口縁1/12	
151	008-03	土師質	製塩土器	E 3	包	(器高)5.5	外:ヨコナデ→指オサエ 内:ヨコナデ	やや密	明赤褐色2.5YR5/6	口縁残片	
152	004-02	須恵器	瓶	C 3	包	(底)16.0	外:ケズリ→ヨコナデ 内:回転ナデ→ケズリ(透かし)	密	灰色N6/	口縁6/12	
153	013-04	須恵器	杯蓋	D 1	包	(口)15.1	外:ロクロケズリ→ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
154	007-01	須恵器	甕	D 2	包	(口)24.0	外:ロクロナデ→カキメ 内:ロクロナデ→タタキ	密	灰色N4/0	口縁10/12	自然軸が全体にかかる
155	006-04	土師器	杯	C 3	包	(口)12.8 (器高)2.45	外:ヨコナデ→ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	粗	灰白色10YR8/2 にぶい橙色7.5YR6/4	口縁2/12	
156	006-05	土師器	杯	C 3	包	(口)14.0 (器高)2.40	外:ヨコナデ→ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	やや粗	灰白色10YR8/2	口縁2/12	
157	006-03	土師器	杯	C 3	包	(口)17.0	外:ヨコナデ→ナデ 内:ヨコナデ→暗文	やや密	外:淡赤褐色2.5YR7/4 内:浅黄橙色10YR8/3	口縁1/12	放射状暗文あり
158	006-06	土師器	甕	D 2	包	(口)12.8	外:ヨコナデ→工具ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	暗灰色N3/	口縁1/12	外面全体が被熱する
159	006-01	土師器	甕	B 2	包	(口)15.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	やや粗	褐色10YR3/2 にぶい黄橙色10YR6/3	口縁4/12	
160	006-02	土師器	甕	D 2	包	(口)14.2	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ナデ後指オサエ	やや粗	にぶい黄橙色10YR7/2	口縁2/12	内面に黒色部分あり
161	004-04	須恵器	杯身	C 3	包	(口)10.3	外:ハケ→ナデ 内:ハケ→ナデ	やや密	灰色N6/	口縁1/12	外面に黒斑あり
162	003-01	須恵器	杯	B 2	包	(高台径)9.2	外:ナデ→ロクロケズリ→貼り付け後ナデ 内:ナデ	密	灰色N6/0	口縁4/12	ヘラ記号有りか
163	010-01	須恵器	杯蓋	E 2	包	(口)14.5	外:ロクロケズリ→ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗	灰色N5/0	口縁5/12	
164	016-01	須恵器	杯蓋	B 2	包	(口)13.2 (器高)3.2	外:ヘラギリ→ロクロケズリ→ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗	灰色N7/0	口縁4/12	
165	015-05	須恵器	長頸甕	B 2	包	(口)10.3	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰色N5/0 灰色N4/0	口縁10/12	
166	014-02	須恵器	短頸甕	C 1	包	(口)11.8 (体径)22.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
167	017-03	土師器	台付甕	A 1	包	(底径)7.8	外:綻ハケ→横ハケ 内:ヨコナデ	やや粗	灰黄色2.5Y6/2	底部完存	

第2表 遺物觀察表

番号	実測番号	器種	材質	グリッド	遺構・層位	取上番号	計測値			木取り	残存度	特記事項
							長・幅・厚(高) cm					
42	007-01	下駄	スギ	C 2	SD 1 黒色粘質	2	24.1	8.8	3.6	柾目	ほぼ完存	
43	012-01	下駄	スギ	C 1	SD 1 黒色粘質	9	20.2	10.7	3.9	板目	ほぼ完存	小人用か
44	005-01	木錘	ヒノキ	C 1	SD 1	3	12.8 (小孔2.1, 1.1)	7.0	6.2~7.0	芯材	完存	
45	022-01	紡錘車	スギ	C 2	SD 1 黒色粘質	7	13.15	12.9	4.5 孔φ1.9	辺材	完存	
46	002-02	木錘	ツバキ	C 2	SD 1 黒色粘質	8	22.1	6.9	4.1	芯材	完存	
47	022-02	杓形木製品	スギ	C 3	SD 1 黒色粘質		12.15	7.6	1.1	辺材	柄欠落	
48	029-04	棒状具	ヒノキ	D 2	SD 1 黒色粘質		52.4	2.2	1.4	芯材	完存	先端細く削り、折損。
49	031-03	棒状具	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		24.5	φ1.4		芯材	完存	面取加工有り。
50	031-04	棒状具	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		21.1	φ1.5		芯材	完存	面取加工有り。
51	021-01	角形棒状具	ヒノキ	C 3	SD 1 黒色粘質		35.95	2.45	1.1	柾目	完存	
52	032-01	曲物底板	ヒノキ	D 2	SD 1		16.8	0.6		柾目	半分残存	3孔の内1孔は貫通せず。 木釘孔4カ所。半部で割れ。
53	002-01	曲物底板	ヒノキ	D 3	SD 1 黒色粘質	5	17.6 工具のアタリ痕有り	1.1 (側面に孔5箇所)		柾目	一部欠	
54	006-03	曲物底板	ヒノキ	C 1	SD 1		18.4	6.5	1.1	柾目	半分残存	栓が残存(左縁部)
55	001-01	柄付容器(槽)	ヒノキ	C 1	SD 1 黒色粘質		46.9	14.0	8.5	芯材	推定半分	孔L:2.7 w: 2.6 奥行3.0
56	004-01	案(未整)	ヒノキ	D 3	SD 1 黒色粘質	1	40.3	32.3	6.1	板目	未製品	上下端にチョウナのハツリ 痕有り。
57	011-01	案	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質	3	32.2 (脚14.7	17.0 2.7 4.0)	4.45	板目	脚欠	脚部1本残存。上面に工具 のアタリ痕。
58	009-02	先尖棒	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		36.7	1.55	1.3	芯材	ほぼ完存	
59	021-02	鎌形木製品	ヒノキ	E 2	SD 1 黒色粘質		24.65	1.7	柄φ0.7	辺材	完存	後部が折損。
60	021-03	先尖棒	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		42.4	2.0	1.65	辺材	ほぼ完存	
61	029-02	先尖棒	スギ	E 2	SD 1 黒色粘質		32.4	3.1	1.9	辺材	完存	右端が折損。
62	029-03	剣形木製品	イヌマキ	E 2	SD 1 黒色粘質		28.0	1.7	0.7	辺材	完存	
63	035-01	桶	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質	9	52.0 底板φ58.5	5.3~6.0	側板厚0.5	柾目	底板端部欠	孔6カ所。樹皮残る。
64	003-01	曲柄鍼柄装着部	モクレン	E 3	SD 1 黒色粘質	1	21.8	5.1	装着部厚3.9 柄厚2.6	芯材	基部欠損	
65	008-01	曲柄又鍼	アカガシ	C 2	SD 1 黒色粘質	1	38.5	柄幅3.75	先6.6 厚2.1	柾目	半分残存	
66	014-01	緯打具	ノリウツギ	B 1	SD 1	3	71.9 (挿入部16.5	10.3 3.6 2.5)	3.4 孔φ0.4	柾目	刃部残	中央に木釘孔有り。
67	032-02	曲柄鍼柄	アカガシ	B 1	SD 1		32.5	3.15	0.9 (右端3.65 1.40)	柾目	柄一部残	
68	005-03	豎杵	ツバキ	B 1	SD 1 黒色粘質		(80.0)	握部φ3.2	叩部φ7.7	丸太	握部一部欠	握部で2分割。
69	030-01	長方板	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		27.5	12.2	0.6~1.0	辺材	一部残	中央左に小孔φ0.8
70	017-01	櫛	ヒノキ	D 2	SD 1 黒色粘質	2	164.3	15.2	3.5 (角孔5.0 4.0)	辺材	船走部の残	角孔4カ所所有り。
71	017-02	櫛	ヒノキ	D 2	SD 1 黒色粘質	1	168.6	16.0	4.0 (角孔5.0 4.0)	辺材	船走部の残	角孔4カ所所有り。先端に奥 行5cm,巾3.3の差込部有り。
72	013-01	梯子	スギ	D 1	SD 1	4	65.4	17.3	4.0 (孔1.1 2.4)	板目	半分残	上端1段目の抉り加工。
73	010-02	横架材	マツ	D 3	SD 1 黒色粘質	2	50.6 (大孔6×5,	9.65 小孔2.5×3.0)	6.1	芯材	一部残	015-01の部材と接合。
73	015-01	横架材	マツ	D 3	SD 1 黒色粘質		117.5 (孔6.3	10.3 6.5	6.8 小孔3.5 2.5)	芯材	一部残	010-02の部材と接合。
74	018-01	横架材	マツ	E 2	SD 1 黒色粘質	1	242.2	29.0	5.0 (角孔3.0 円孔φ3.8)	柾目	一部残	上端に調整痕。
75	023-01	桁材	マツ	C 1	SD 1	6	157.5	φ11.0		丸太	一部残	抉り2カ所巾12.0~13.0cm。 全体に被熱。
76	001-02	柱材	マツ	B 1	SD 1 黒色粘質		23.0	φ13.6		丸太	一部残	両端に加工痕。
77	019-01	柱材	ヒノキ	C 1	SD 1 黒色粘質		200.0	10.2		丸太	一部残	全体に被熱。
78	019-02	柱材	ヒノキ	C 1	SD 1 黒色粘質	5	201.6	9.5	(挿入部5.0 3.0)	丸太	一部残	全体に被熱。面取加工有り。
79	015-03	板材	スギ	D 1	SD 1 黒色粘質	6	54.7	10.5	2.5 (小孔φ1.1)	柾目	一部残	
80	020-01	板材	ヒノキ	E 3	SD 1	2	152.8	26.0	2.8 (角孔2~3cm, 巾4cm)	板目	ほぼ完存	角孔5カ所所有り。中央に紐 痕有り。

第3表 遺物観察表

番号	実測番号	器種	材質	グリッド	造構・層位	取上番号	計測値			木取り	残存度	特記事項
							長・幅・厚(高) cm					
81	027-02	板材	マツ	C1.C2	SD 1		118.0	25.0	6.2	柾目	一部欠	両端角は残存良好。 下半部は大きく欠落。
82	005-02	建材(柱)	ヒノキ	B 1	SD 1 黒色粘質	2	30.5 (挿入部4.3	9.2 4.4	6.5 2.4)	芯材	一部残	六角柱
83	026-01	建材	マツ	D 2	SD 1 黒色粘質		101.8 (角孔3.3	14.65 4.3	9.0 3.7)	芯材	一部残	全面被熱有り。
84	034-01	加工板状製品	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質	6	25.8	6.3	(柄2.6 1.6)	柾目	完存	
85	030-03	加工木片	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		12.6	8.3	3.9	割材	一部欠	未製紡錘車か。
86	006-02	加工材	マツ	C 1	SD 1		19.0	12.8	3.1	板目	一部残	左上部は軸又は把手。
87	013-02	棒状加工材	シキミ	C 1	SD 1	2	48.5	φ3.4		芯材	部分残	樹皮残存。
88	009-01	柱材(角)	マツ	C 2	SD 1 黒色粘質	4	18.75	8.1	5.15	芯材	一部残	先端部削痕有り。
89	015-02	柱材	クリ	B 2	SD 1 黒色粘質	5	45.8	φ11.5		半截	一部残	
90	016-01	柱材	クリ	B 2	SD 1 黒色粘質	4	24.3	9.5		割材	一部残	部分的に被熱。
91	023-02	柱材	クスノキ	B 2	P 7 柱痕		47.3	φ9.7		丸太	部分残	下端に調整痕有り。
92	023-03	柱材	マツ	A 3	P 6 杭		61.0	9.8		丸太	ほぼ完存	両端にチョウナ痕有り。
93	023-04	柱材	マツ	B 2	P 3		98.0	13.3		丸太	部分残	下端に加工痕。樹皮残存。
94	026-02	柱材	ヒノキ	D 2	SD 1	3	70.6	9.7	9.0	丸太	半分残	先端に加工有り。
95	026-03	柱材	ヒノキ	A 1	P 5		31.8	φ13.8~14.2		丸太	一部残	下端に加工痕。
96	026-04	柱材	ヒノキ	A 1	P 10		26.85	φ12.5~12.85		丸太	一部残	下端に加工痕。
97	028-01	柱材	クスノキ	B 2	P 3 柱痕		83.1	φ11.2		芯材	部分残	先端に調整痕。
98	033-02	柱材	マツ	B 1	SD 1 黒色粘質		54.7	10.3	7.8	芯材	部分残	部分的に被熱。 先端に面取り。
99	006-01	板材	スギ	C 1	SD 1		35.3	7.0	1.5	板目	一部残	
100	024-01	板材	マツ	E 2	SD 1 黒色粘質	3	161.6	16.0	4.5	板目	部分残	
101	024-02	板材	マツ	B 2	SD 1 黒色粘質	2	115.3	11.0	2.8	板目	部分残	
102	025-01	板材	マツ	E 1	SD 1 黒色粘質	2	136.2	24.55	6.5	柾目	部分残	割材か
103	025-02	板材	マツ	B 2	SD 1 黒色粘質	3	146.7	18.0	3.0	板目	部分残	
104	025-03	板材	マツ	E 3	SD 1 黒色粘質	3	132.3	11.9	2.7	板目	部分残	中央/下側に巾10cmの抉り痕有り。
105	027-03	板材	ヒノキ	D 1	SD 1	3	114.5	10.7	4.5	板目	部分残	上面は残存良好。
106	028-02	板材	スギ	B 1	SD 1		104.6	18.2	4.6	板目	部分残	表裏面に調整痕有り。
107	010-04	角材	スギ	B 2	SD 1	1	77.9	6.1	3.4	板目	部分残	
108	013-03	角材	ヒノキ	B 1	SD 1	7	60.7	4.6	2.9	割材	部分残	棒状。先端に加工痕。
109	029-01	角材	スギ	E 2	SD 1 黒色粘質		19.8	5.8	2.8	柾目	一部残	
110	029-05	角材	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		54.0	3.4	1.2	柾目	部分残	
111	030-02	角材	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		17.0	4.8~5.8	4.0	割材	ほぼ完存	
112	031-01	角杭	マツ	C 2	SD 1		25.3	3.0	1.1	板目	部分残	先端に面取り加工。
113	031-02	角杭	ヒノキ	C 2	SD 1		18.0	3.0	2.2	柾目	部分残	
114	010-03	杭	カヤ	B 1	SD 1 黒色粘質	1	53.9	φ9.0		芯材	部分残	先端にハツリ痕有り。
115	010-01	杭?	マツ	B 1	SD 1 黒色粘質	2	31.9	φ10.0~10.2		丸太	部分残	下端に調整痕。
116	024-03	杭?	クリ	D 1	SD 1	5	150.1	φ9.6		芯材	部分残	柱材か
117	033-01	杭	カヤ	B 1	SD 1		51.5	φ7.1~8.1		芯材	一部残	先端にハツリ痕有り。

第4表 遺物観察表

第5章 本田氏館跡の遺構

1. 地形・層序

(1) 地形

今回の調査区は、既述のとおり岡田向遺跡から比高差30～40mの丘陵の西側先端部の尾根筋に位置する。標高は234mで、城館の東北半部にあたる。

丘陵一体は山林で、部分的にマツ等針葉樹が植林されている。西側谷筋と東北部裾には竹林が広がっている。このうち東北部裾の山側斜面には土坑が掘られているのが認められる。この尾根は、表土下は岩盤でしかも分厚く堆積しているものと考えられる。

竹林のある東から西側にかけての斜面は、急峻で斜度はおおよそ40°以上を示す。この地点を過ぎて、標高220mから頂上にかけての斜面はやや緩やかになり、頂部の平坦部にたどりつく。

一方、頂部を過ぎて南方側には、土堤で囲まれた平坦部が広がる。主郭部分（未調査）の可能性がある。ここには井戸残存している。さらにこの地点から西側には柏尾の現集落につながる生活道路が伸びている。現集落の標高は、平均で210mと考えられる。

一方、東側から南側裾には、現在、作業用の通路（畦道）が細長く連続しており、さらに奥部には氏神が祀られている。

城館は、既述のように南から北にかけて連続する尾根上のほぼ先端部に構えられ、主要施設はこの狭隘な半径25m程の範囲に配置されている。当時の登城路は、現在の通路（畦道）に削平され認められないがほぼ同様の箇所に重複していたものと考えられる。

(2) 層序

表土は、茶褐色土（腐植土）が頂部においては分厚く堆積しているが、裾部においては枯木、枯枝のみで地山に達する箇所が殆どである。

標高220～230m付近の基本的な層序は次の通りである。第1層は、腐植土で、第2層は黄暗褐色粘質土が堆積し、数カ所でこの第2層が改変された第3層、灰黃褐色粘質土が堆積している。

これに対して、南側の一部では、この第3層がさらに改変された第4層、粘性の強い灰黃褐色粘質土を検出した箇所もあった。曲輪や中世墓はおもに第2層下面で検出した。

2. 遺構概要

標高234m地点の平坦部に認められるのは、曲輪Iである。この曲輪には南側から近現代の地道が取り付いている。

曲輪Iの北側縁辺の落ち込んだ平坦部には曲輪II、さらに下方の北側に降りた標高228m付近に細長く続く平坦部が認められる。これは曲輪IIIである。

この地点から西側に通路を隔てて同じレベルに曲輪IVが認められる。曲輪Iの東側には通路がつづら折れで麓へ延びている。西側には南北方向に谷が認められるが、これは後世に取り付けられた地道である。

一方、東側法面では、中世墓や土坑を確認した。表土下で礫石が認められた中世墓や殆ど遺物の認められなかった土坑も検出した。順に記述し、後の表にまとめた。

a. 曲輪I

曲輪Iは調査区の最高所にあたる、標高234mに位置する。土壘は築かれていらない。長軸6m、短軸は4mの平坦部である。立木伐採により、東側の眺望が伺える。表土は腐植土で分厚く覆われていた。除去後は、地山に至ったが、施設内に主な遺構は認められなかった。

なお、丘陵頂の表土下で古墳時代の須恵器を採集しているので、周辺遺構との関連性からかつては古墳が存在したとも推察される。

b. 曲輪II

曲輪IIは曲輪Iの谷を挟んで東側丘陵斜面に位置する。標高は228m前後である。一辺が6mほどのやや方形に近い平坦部で、そこから半円弧状の平坦部が両側に延びている。遺物は認められない。

c. 曲輪III

曲輪IIからはやや下った低位置に認められた。や

や傾斜した平坦部である。幅は3mで、延長20mほどを検出した。いわゆる帶曲輪である。

d. 曲輪IV

通路の途中にやや傾斜した平坦部が認められる。曲輪、である。上記の曲輪と比較すると最も小規模である。四方が4mほどの施設である。この曲輪と対岸の尾根を挟んだ平坦部の間には土堤が設けられている。これはおそらく後世の地道であるとみられる。

e. 中世墓

S X 13 H 10グリッドで確認した。縦2.4m×横1.5mの範囲に認められた。立石2個体と積石を検出した。総量は115個体であった。これらはおおよそ3段に重ねられており、上面で陶器片を確認した。室町時代後半のものと考えられる。

S X 14 D 8グリッドで検出した。上記S X 13と比較すると小規模である。積石もややまばらである。陶器等時期決定につながる遺物は確認していないがその規模や積石が多数出土したことから同時期の遺構であると考えられる。

f. 土坑

検出時には横穴と捉えていた遺構である。丘陵裾部分集中し、11箇所を確認した。どれもやや斜め上から掘削されていて、不整形なものが多い。順に記述する。

S K 1 B区で、上層の集石を除去した後の下面で検出した。平面形はやや四角形気味の遺構である。両辺ともにほぼ1mで、深さは0.5mである。底から室町時代後期の土師器皿が出土した。

S K 2 削平を受け、残存状況が悪く、平面形は不整形である。長軸は2mで、深さは0.2mと非常に浅い。炭化物が見られた。

S K 3 丘陵東裾で検出した遺構である。検出当初は覆土がよく締まり、不明瞭な楕円形であった。完掘後はいわゆる隅丸方形になった。流土の進入も激しく確定に困難を極めた。上面の集石除去後に確認できた遺構である。縦1.2m、横0.7mで深さは山側で0.4mである。底部で獸骨片が出土した。

S K 4 S K 2の南方で確認した。不整形で縦1.6m、横1.2m、深さ0.2mである。出土遺物が土師器細片であるため詳細時期は不明である。

S K 5 S K 4の南隣りで検出した。規模的にはS K 4を一回り小さくした規模の遺構である。直径1.2m、深さは0.3mである。上記同様、時期を特定できる遺物は出土していない。

S K 6 S K 5のすぐ西方上で確認した。平面形は楕円で断面形は袋状である。直径1.2mである。当初横穴墓としたが、遺物が認められず、炭化物等も検出してないので、単に土坑とした。

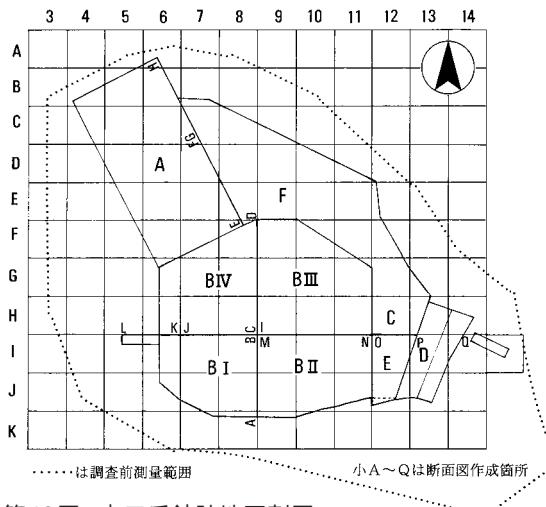
S K 7 S K 2のすぐ下で確認した。直径0.8mと比較的小規模な遺構である。深さは0.7mと他よりやや深く、底部からの立ち上がりがややオーバーハング気味である。細片は出土しているが詳細な時期は不明である。

S K 8 東側裾の通路脇で検出した遺構である。山側ほど先端がすぼまり、底部検出が非常に困難であった。推定で直径が1m、深さは0.6mである。

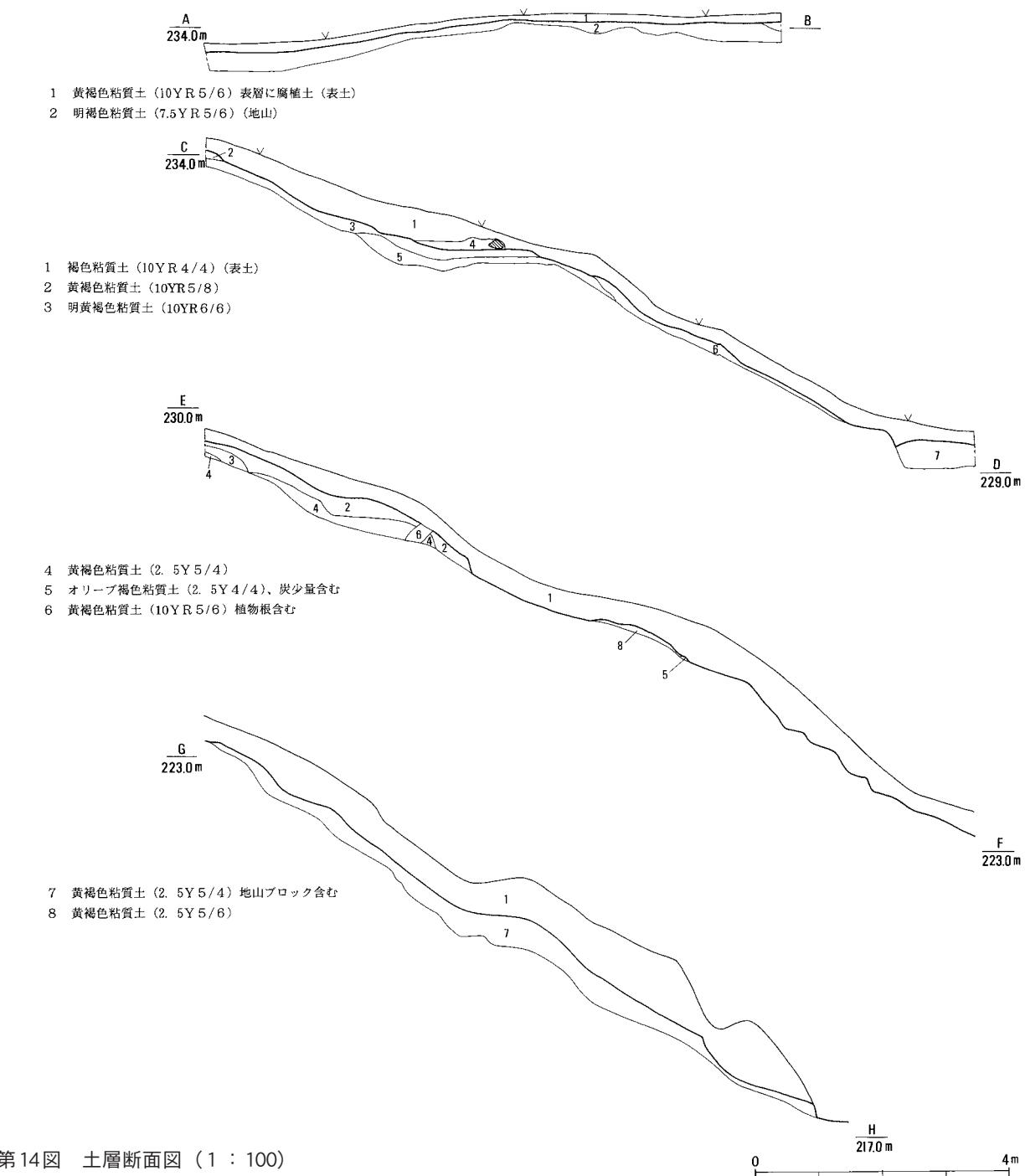
S K 9 S K 2の北方下で確認した。表土除去直後は、地山と埋土色に差が無く見極めがつかなかったが、結果的に浅い窪みとなった。形状は不整形で、直径1m、深さは0.2mである。

S K 10 S K 9の隣、E 11グリッドで確認した。不整形で、直径が0.6m、深さ0.3mである。詳細時期は不明。

S K 11 D 9グリッドで検出した。検出当初は、後世の土取り跡と考えたが、周囲の土坑の規模や埋土の状況から最終的に土坑とした。直径2.4m、深さ1.4m以上である。開口部は縦長で後部と先端との高低差が40°と険しい。



第13図 本田氏館跡地区割図

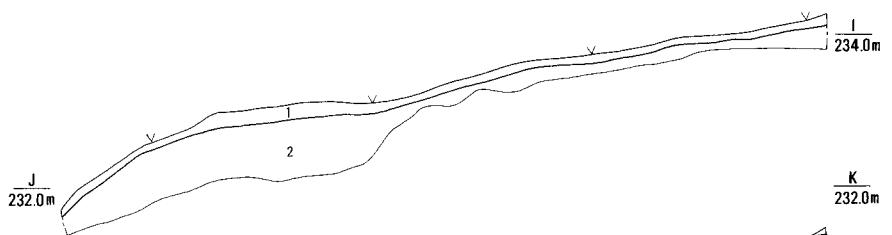


第14図 土層断面図 (1 : 100)

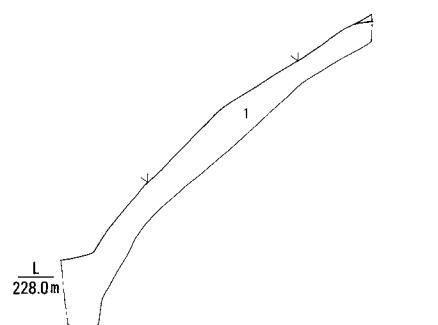
遺構番号	検出時	性格	時期	地区	遺構面	グリッド	特徴・形状・計測数値など	備考
SK 1	SK 1	土坑	室町	B	2	H 9・10	不整方形 1.0m×1.0m	土師器皿
SK 2	SK 2	土坑	室町	F	2	F 11	不整形 2.0m 0.2m	
SK 3	SK 3	土坑	室町	F	2	D 8	不整橢円 0.6m×0.6m 0.4m	上層に S X14、骨片
SK 4	SK 4	土坑	室町	F	2	F 11・12	不整形 1.6m 0.2m	
SK 5	SK 5	土坑	室町	F	2	G 11・12	不整形 1.2m 0.3m	
SK 6	横穴 1	土坑	室町	F	2	G 11	橢円形、袋状 1.2m 0.5m	
SK 7	横穴 2	土坑	室町	F	2	F 11	不整形 0.8m 0.7m	
SK 8	横穴 3	土坑	室町	F	2	E 12	不整形 1.0m 0.6m	
SK 9	横穴 4	土坑	室町	F	2	E 11	不整形 1.0m 0.2m	
SK 10	横穴 5	土坑	室町	F	2	E 11	不整形 0.6m 0.3m	
SK 11	横穴 8	土坑	室町	F	2	D 9	不整形 2.4m 1.4m	
S X13	集石 1	中世墓	中世	B	1	H 10	不整方形,三段積,立石 2 個体有	土師器、瓦器
S X14	集石 2	中世墓	中世	F	1	D 8	不整方形,一段積	

第5表 本田氏館跡遺構一覧表

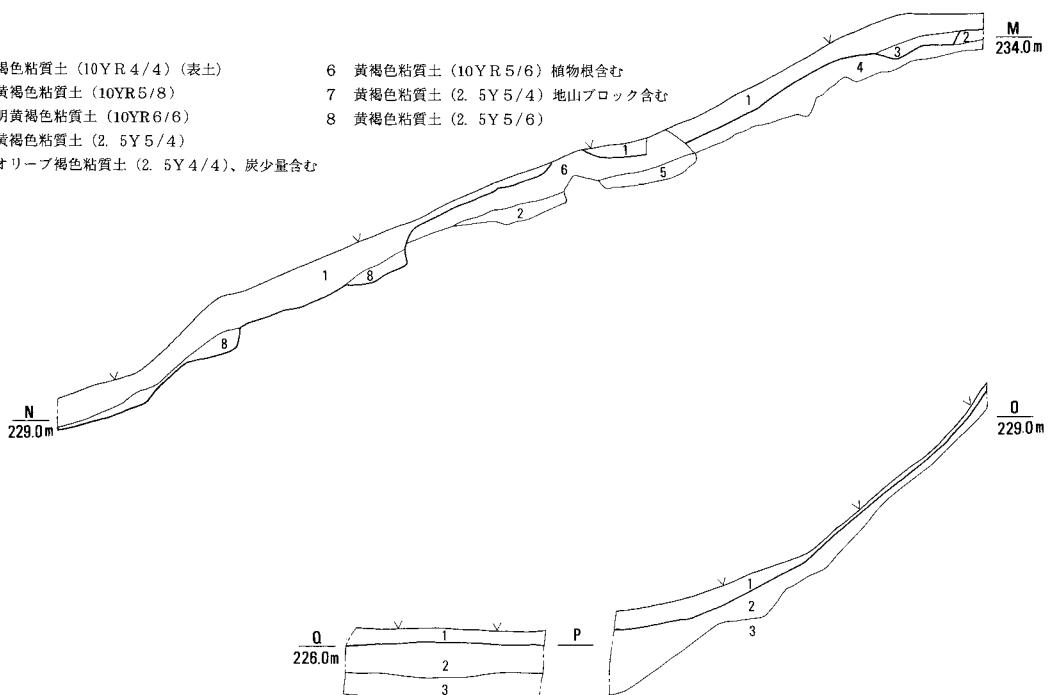
* 遺構番号12は欠番



- 1 褐色粘質土 (10YR 4/4) 表層に腐植土含む
2 黄褐色粘質土 (2. 5Y 5/3)



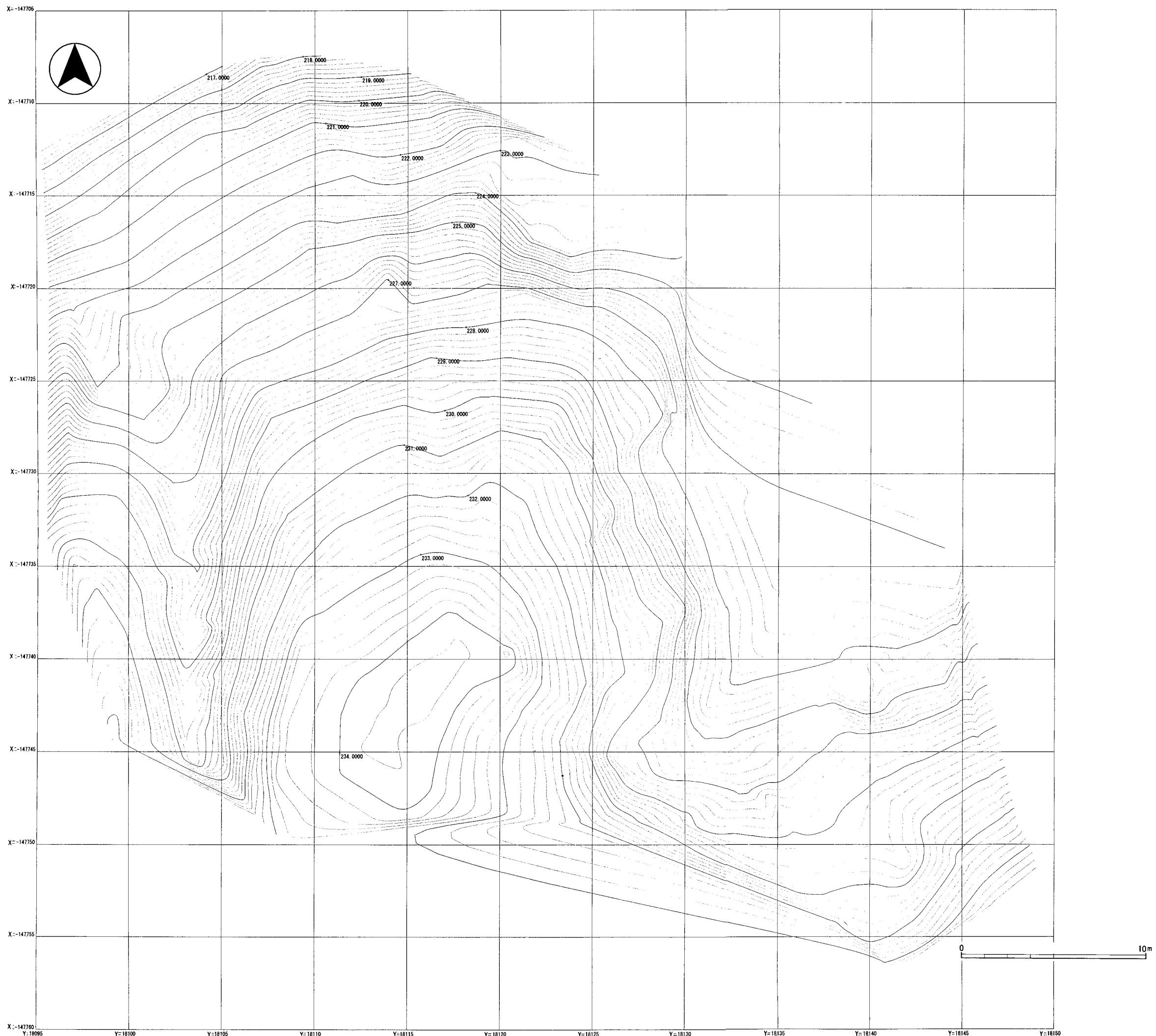
- 1 褐色粘質土 (10YR 4/4) (表土)
2 黄褐色粘質土 (10YR 5/8)
3 明黄褐色粘質土 (10YR 6/6)
4 黄褐色粘質土 (2. 5Y 5/4)
5 オリーブ褐色粘質土 (2. 5Y 4/4)、炭少量含む
6 黄褐色粘質土 (10YR 5/6) 植物根含む
7 黄褐色粘質土 (2. 5Y 5/4) 地山ブロック含む
8 黄褐色粘質土 (2. 5Y 5/6)



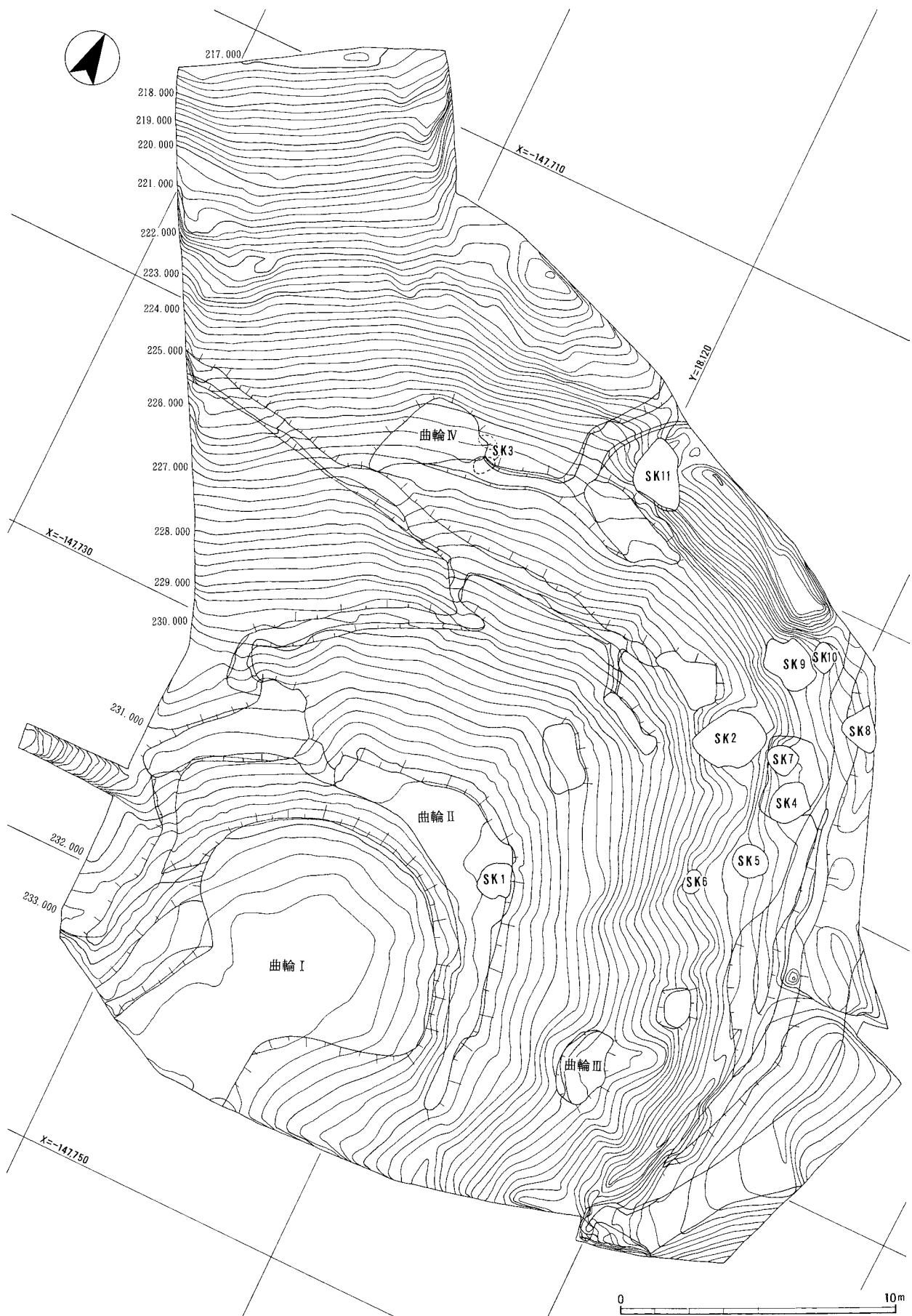
- 1 にぶい黄褐色粘質土 (10YR 4/3) (表土)
2 褐色粘質土 (10YR 4/6) (第2層)
3 明黄褐色粘質土 (10YR 6/8) マンガン含む花崗岩 (地山)



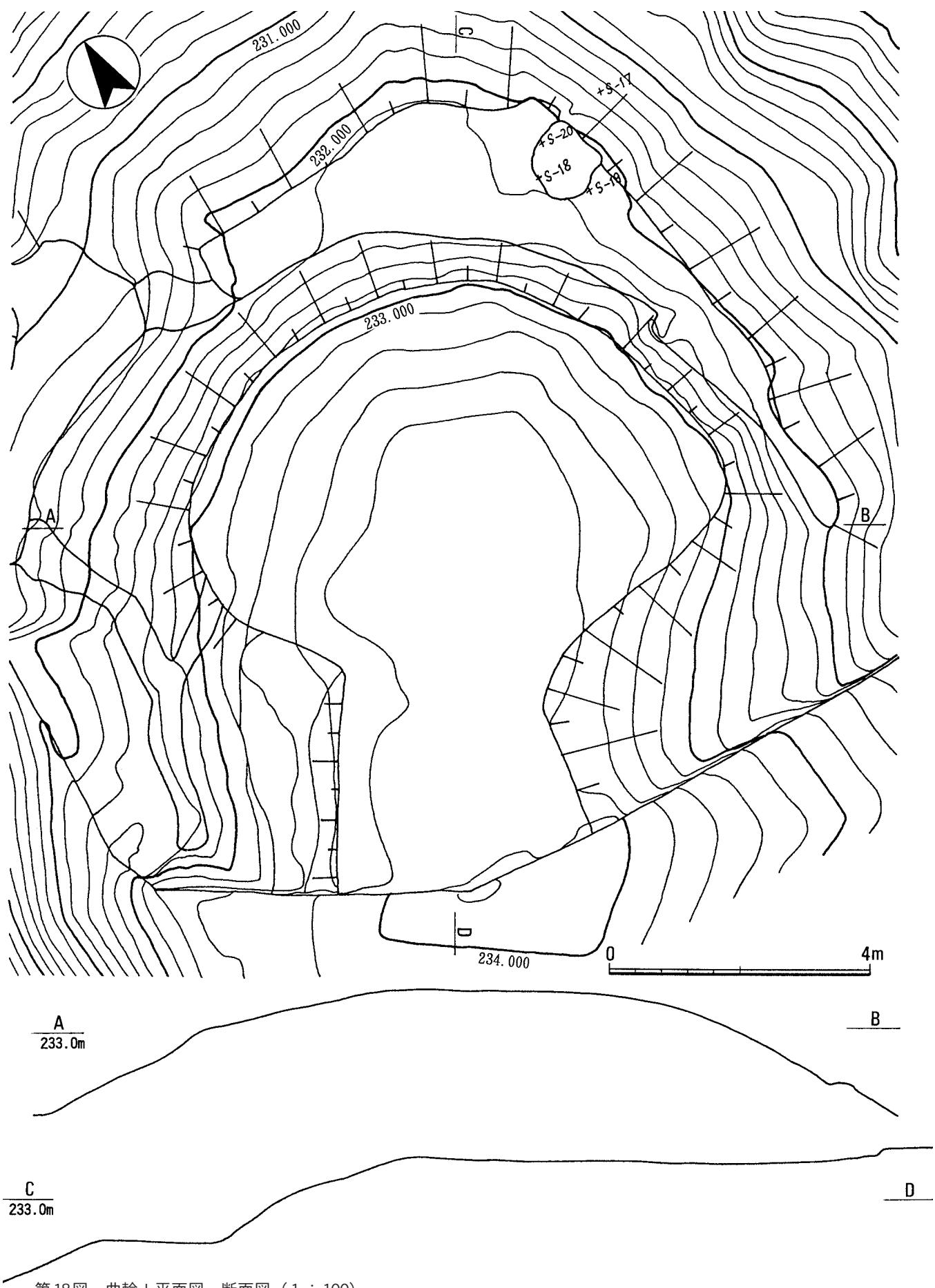
第15図 土層断面図 (1 : 100)



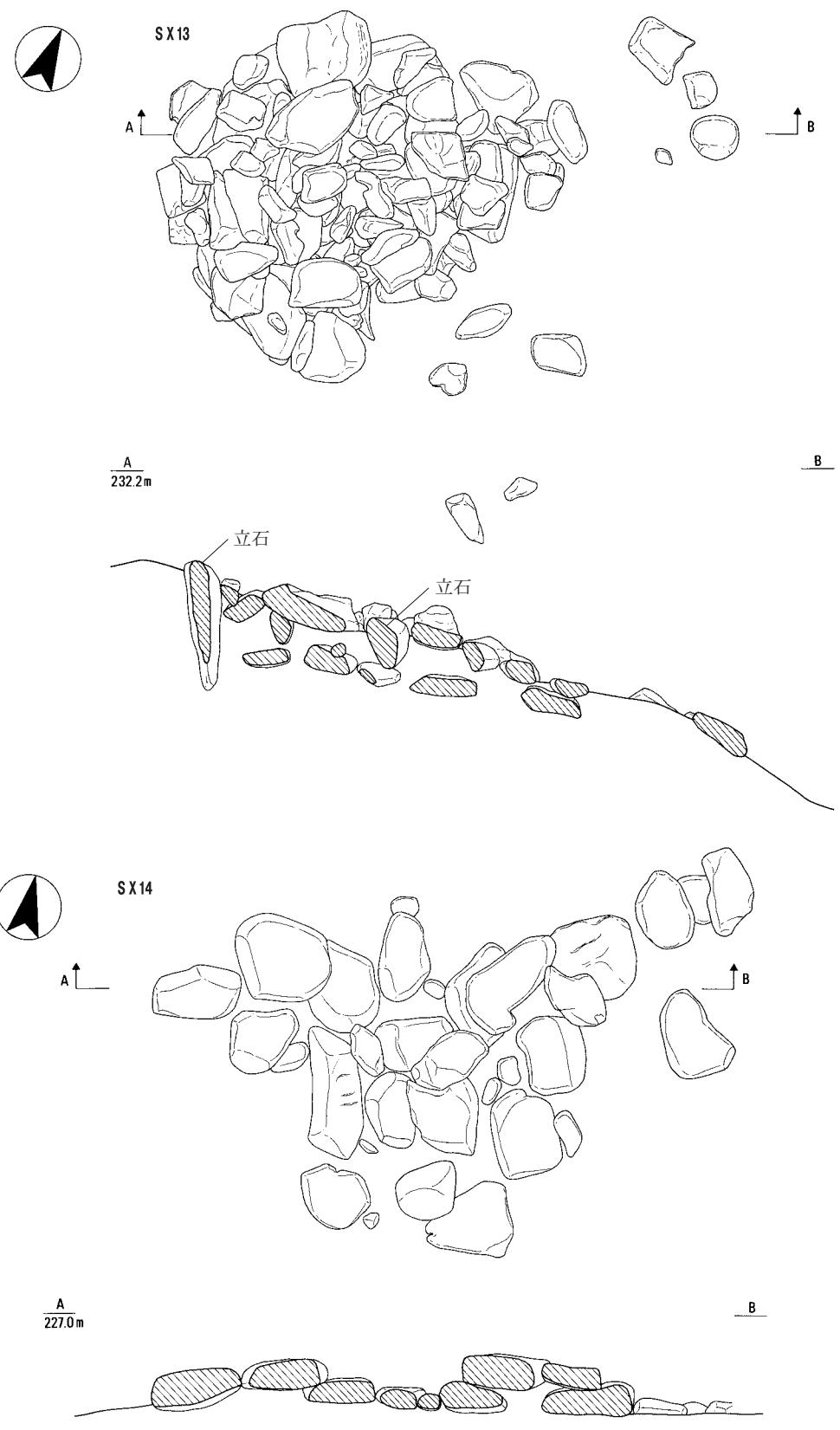
第16図 本田氏館跡 調査前測量図 (1 : 200)



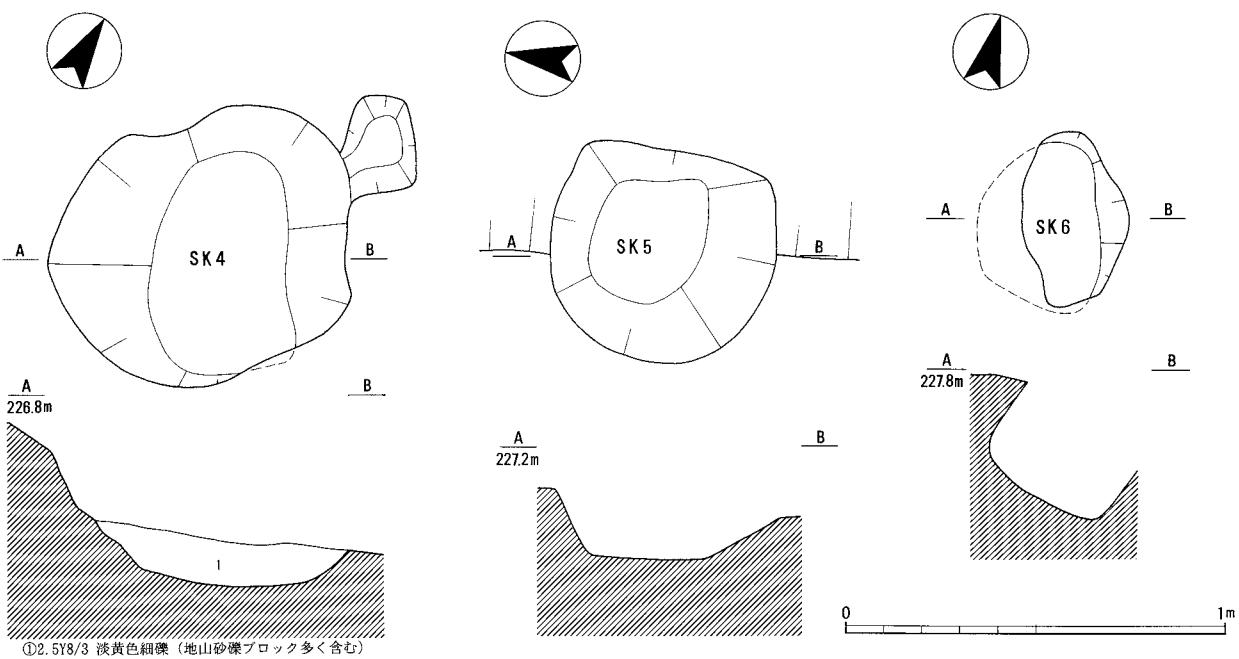
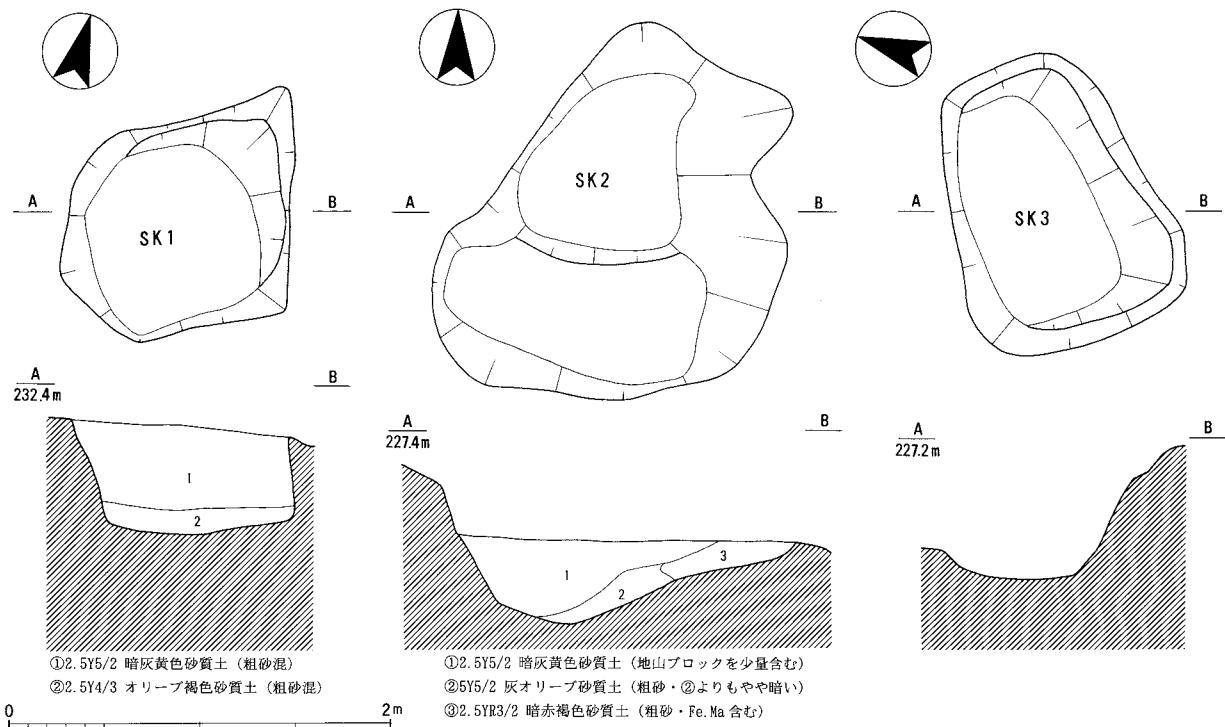
第17図 本田氏館跡測量図 (1 : 200)



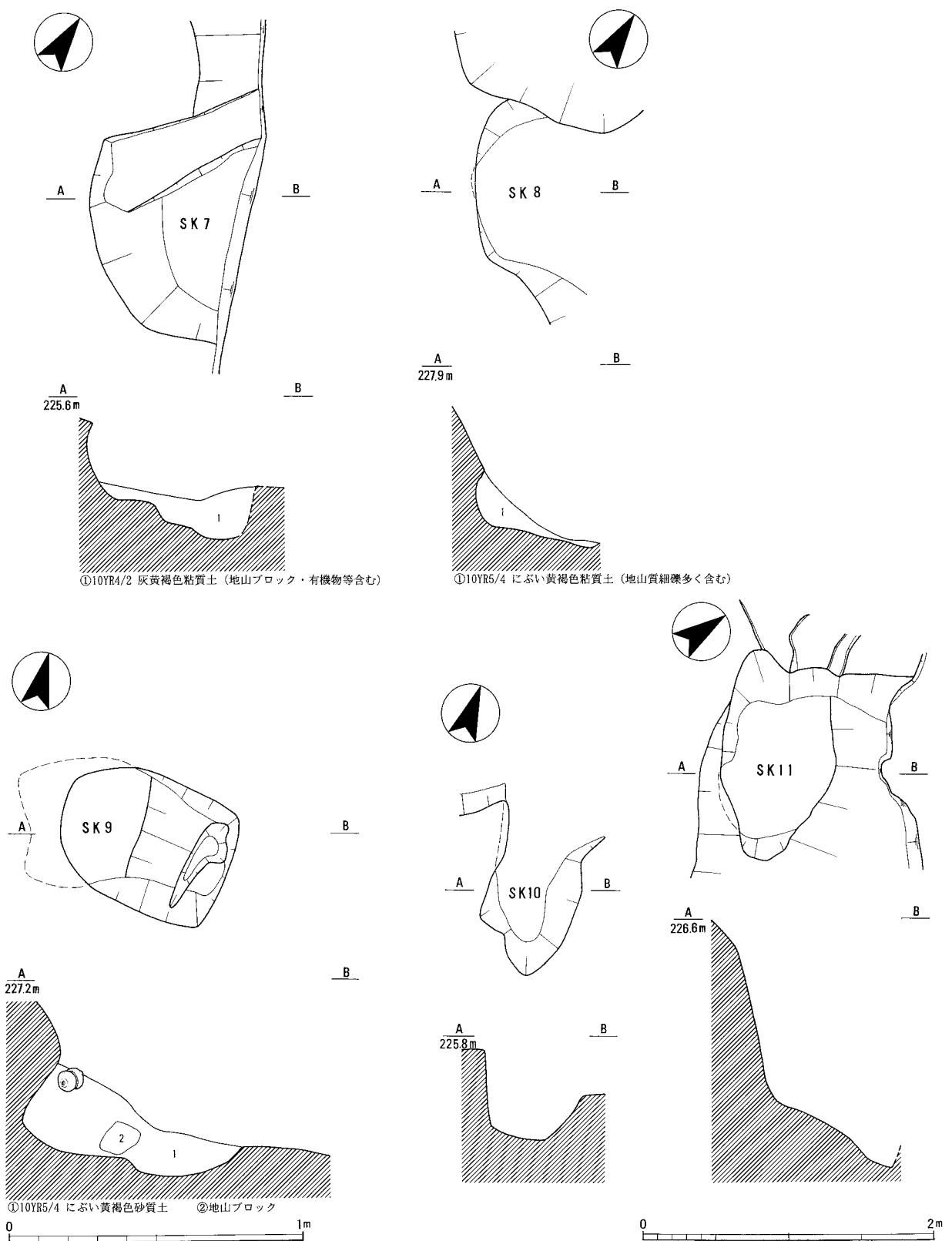
第18図 曲輪Ⅰ平面図・断面図 (1 : 100)



第19図 SX13・14実測図 (1 : 20)



第20図 SK1・2・3・4・5・6実測図 (SK1のみ1:40、他は1:20)



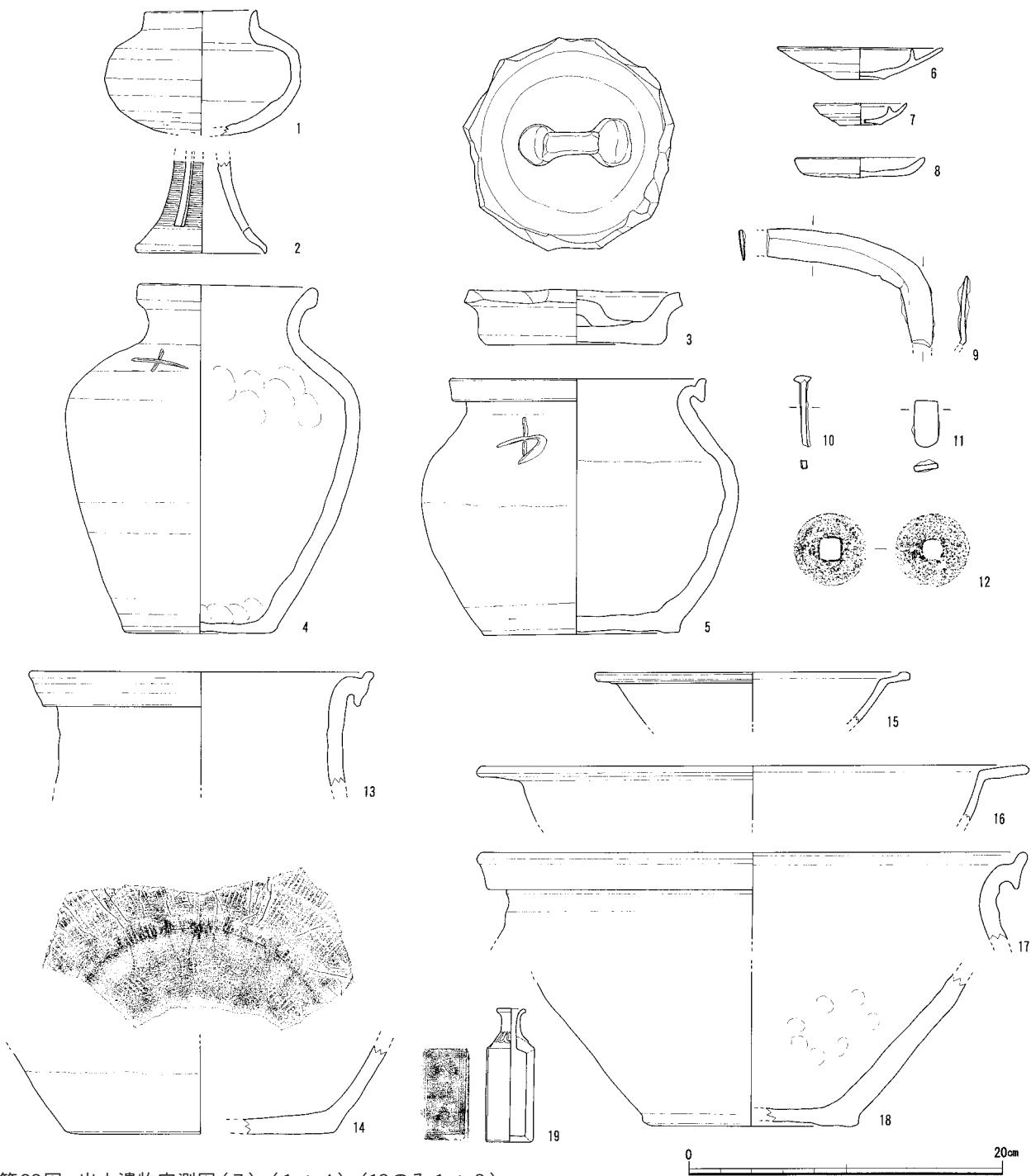
第21図 SK 7・8・9・10・11実測図 (SK 11のみ1:40、他は1:20)

第6章 本田氏館跡の出土遺物

出土した遺物は、岡田向遺跡に比較すると城跡であるためか、少量であった。コンテナバットで8箱である。中世の陶器類が中心で、石塔も含まれていた。順に記述する。また、表土除去の際には、周辺に分布する古墳群関係遺物も認められたので、これらも列記した。

1. 古墳時代の出土遺物

1は須恵器無頸壺である。底部外面はヘラケズリが施され、不調製である。2は須恵器高杯の脚部である。外面には、横方向のカキメが施される。透かしは三方に開けられている。ともに脚部が長くなる古墳時代中葉ころの遺物とみられる。¹



第22図 出土遺物実測図(7) (1:4) (12のみ1:2)

2. 中世の出土遺物

3～5は藏骨器である。3は常滑焼蓋である。4の口縁はやや外反気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びて、面をもつ。外面肩部に「十」の字のヘラ記号が認められる。5は4に比較し、降る遺物である。肩から底部が比較的短い器種である。口縁は外反し、端部は垂下して、外方からの強いナデによって面が作られている。

6・7は灯明皿である。7ほど小型で、口径は6cmである。煤が付着している。ともに近世遺物であろう。

8は土師器皿で、底部は指才サエが明瞭である。

9～12は金属器である。9は鎌、10は釣、11は楔である。12は角孔が開けられた古銭で、劣化のためか文字は判読できない。

13～18は容器で、室町時代末ころの遺物である。13は常滑焼の大甕で、頸部から上の残存である。14は擂鉢で、スリメは緊密である。おそらく藤澤編

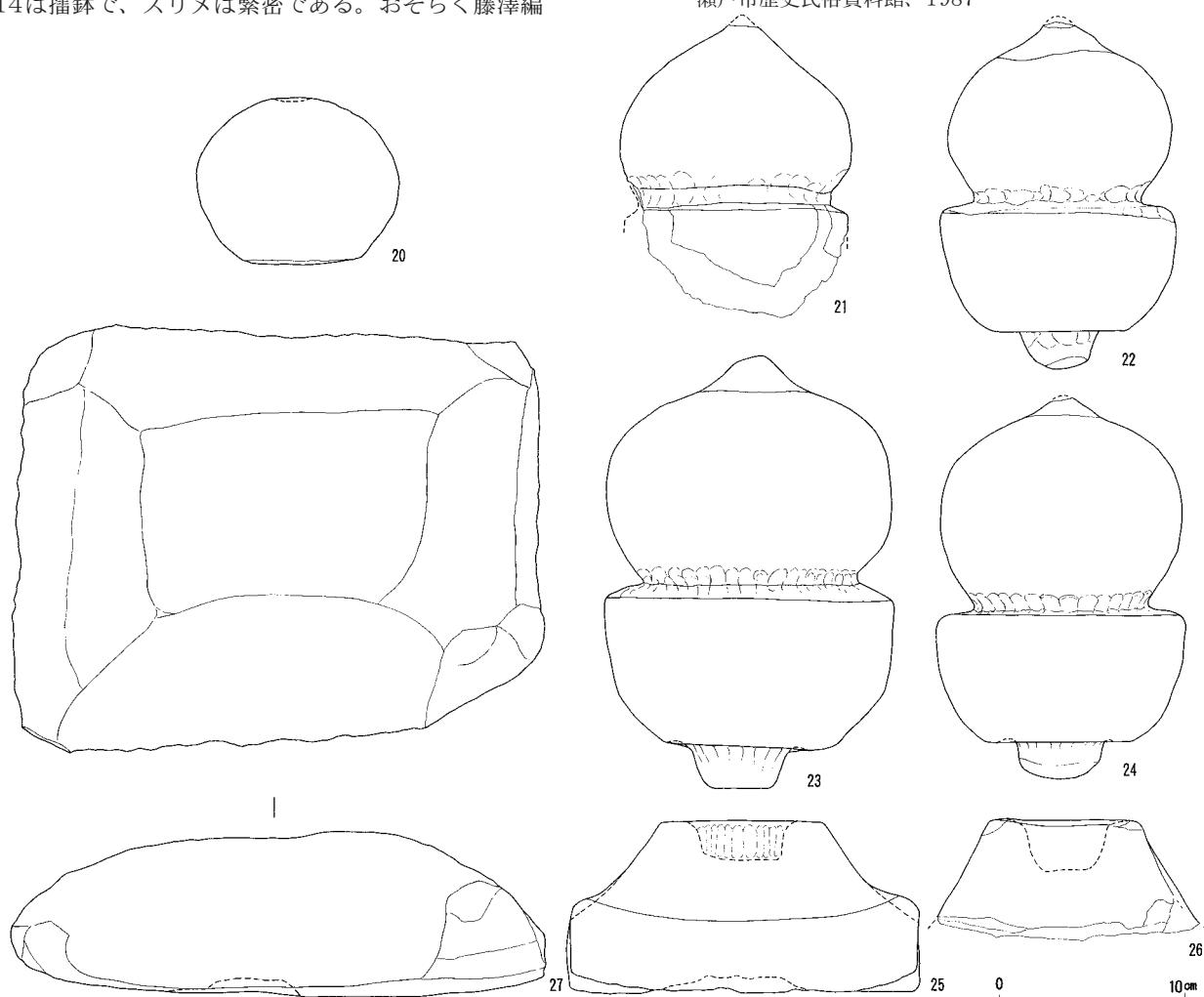
年のVI期の後半に相当するものであろう。15は鍋である。口縁は、屈曲し水平に引き出され、端部はヨコナデによってやや膨らむ。16の端部は膨らみを持たず、自然に丸められている。17は13と同時期の遺物である。

18は捏鉢である。19は瓶である。側面に太神宮と刻まれている。神棚に供したものであろうか。

20～27は石塔の各部品で、20～25は五輪塔である。20は宝珠で、先端が欠落している。21～24は空風輪で21を除いて他はほぼ完存品である。石材は花崗岩である。25と26は地輪である。27は笠石である。戦国～近世初頭ころであろうか。詳細時期は不明である。

【註】

- (1) 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑III』大阪府教育委員会、1978
- (2) 赤羽一郎・中野晴久「中世常滑焼きを追って」シンポジウム資料、1994
- (3) 藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館、1987



第23図 出土遺物実測図(8) (1 : 4)

番号	実測番号	器種	器形	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土(材質)	色調	残存度	特記事項
1	103	須恵器	短頸壺	IIB III	第II層	(口)7.2 (体部径) 12.5	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	灰色N6/0	口縁1/12	
2	104	須恵器	高杯	I 8	表土	(底)8.5	外:ロクロナデ→カキメ 内:ロクロナデ	密	灰色N6/0	口縁2/12	透かし三方向
3	202	陶器	蓋	J 12	第II層	(底)11.2	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ→鉄釉	密	釉)黒色7.5YR3/2 素地)にぶい橙色5YR7/4	完存	伊賀焼
4	502	陶器	甕	F 11	表土	(口)11.6 (高)22.3 (底)10.0	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ	やや粗	にぶい褐色7.5YR5/3 にぶい橙色7.5YR 6/4	口縁3/12	常滑焼、ヘラ記号あり
5	501	陶器	甕	E 11	S K 2	(口)16.3 (高)16.4 (底)12.5	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ	やや粗	灰褐色5YR4/2 灰白色N7/0	完存	常滑焼、ヘラ記号あり
6	303	陶器	灯明皿	E 11	表土	(口)10.5 (高)2.0 (底)3.0	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ→施釉	密	釉)淡黄色2.5Y8/3 素地)灰白色2.5Y8/2	口縁1/12	未使用か
7	304	陶器	灯明皿	J 8	表土	(口)6.0 (高)1.4 (底)2.6	外:ロクロナデ→ロクロケズリ 内:ロクロナデ→施釉	密	釉)灰白色2.5Y8/1 素地)浅黄色2.5Y7/3	口縁3/12	未使用か
8	305	土師器	小皿	H 10	B III SX14下層	(口)8.2 (高)1.3	外:ヨコナデ→ナデ→指オサエ 内:横ナデ→ナデ	密	橙色7.5YR6/6	口縁6/12	
9	1102	金属品	鎌	J 12	第II層	(横)10.6 (縦)7.4 (厚)0.3	刃幅2cm	鉄	——	先端部欠損	
10	1105	金属品	釘	F 1	包含層	(長)4.7 (重)7	断面:角型	鉄	——	下端部折損	
11	1103	金属品	楔	J 12	第II層	(横)1.0 (縦)3.0 (厚)0.3	下端部:半楕円形に仕上げ	鉄	——	完存	
12	1104	銭貨	寛永通宝	J 9	表土	(重)6	表面:記銘	銅	——	完存	
13	401	陶器	甕	E 8	S K 3	(口)22.1	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白色N7/0 褐灰色5YR4/1	口縁1/12	
14	201	陶器	摺鉢	F 11	表土	(底)17.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→クシメ	密	釉)黒色7.5YR2/1 素地)灰黃褐色10YR6/2	底部残片	伊賀焼
15	301	陶器	鉢	I 12	包	(口)20.0	外:ロクロナデ→灰釉 内:ロクロナデ	密	釉)灰白色5Y7/1 断面)灰白色5Y7/1	口縁1/12	灰釉僅か
16	102	土師器	焙烙	F 11	表土	(口)35.0	外:ヨコナデ→工具ナデ→施釉 内:ヨコナデ→ナデ→施釉	密	灰黄褐色10YR6/2 灰黄褐色10YR5/2	口縁2/12	うすい施釉
17	101	陶器	甕	E 11	表土	(口)35.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰色N4/0 褐色7.5YR4/3	口縁1/12	自然釉が口縁内面にかかる
18	402	陶器	甕	E 8	S K 3	(底)13.6	外:ロクロナデ→ナデ 内:ロクロナデ	やや粗	褐灰色10YR5/1	底部3/12	
19	302	陶器	瓶	E 11	表土	(口)1.8 (高)8.5 (幅)3.0	ナデ	密	にぶい赤褐色5YR4/4 赤褐色5YR4/6	完存	
20	902	石造物	空輪	F 11	表土	(径)11.0 (高)9.1 (重)2.1	下部は平らなケズリ	花崗岩	——	上端部欠損	
21	702	石造物	空風輪	F 11	表土	(径)12.2 (高)15.8 (重)2.85	——	花崗岩	——	風輪下部欠落	
22	701	石造物	空風輪	F 11	表土	(径)12.0 (高)16.8 (重)3.4	突入部高:2cm	花崗岩	——	上端部欠損	
23	1001	石造物	空風輪	E 11	S K 7 埋土	(径)15.2 (高)21 (重)7.4	突入部:深さ2.2cm	花崗岩	——	完存	
24	1002	石造物	空風輪	E 11	表土	(径)15.2 (高)18.7 (重)4.6	突入部:深さ1.9cm	花崗岩	——	上端部欠損	
25	901	石造物	火輪	F 11	表土	(上)8.8 (下)18.7 (高)9.3 (重)5.5	受入部:深さ2.2cm	花崗岩	——	一部欠損	
26	801	石造物	火輪	F 11	表土	(口)7.5 (高)6.5 (重)1.5	受入部:深さ2.5cm	花崗岩	——	上半部のみ	
27	601	石造物	地輪	F 11	表土	(横)28.9 (縦)23.1 (高)8.9	——	花崗岩	——	右角部欠落	

第6表 遺物観察表

第7章 結語

1. 岡田向遺跡・古墳群の所在について

岡田向遺跡は、農道建設に先立つもので、全体面積に制約を受けるかたちとなった。幅の狭い調査区となつたが、東方奥の丘陵からの谷地形から延びる箇所に S D 1 を検出した。出土遺物は古墳時代の須恵器や木製品に注目に値するものがみられた。この S D 1 を検出した地点は、先述のとおり、溝が集落方向、つまり南方へ向かう分岐点にあたると考えられ、このため遺物が集中したものと考えられる。

一方、岡田向古墳をはじめ周辺には北の権現古墳やさらに柏尾地区には 1 次調査時に岡田向古墳が発見されているため、同時期にこの地域一帯に築造された古墳群がさらに多数存在したことが考えられる。

さて、岡田向古墳群の 1 号墳については主体部が一部攪乱されてはいたが、この調査によって大きな発見となった。ここでは石室が 1 基検出され、須恵器杯身・杯蓋等古墳後期を代表する遺物が確認された。¹

今回はこの地点に近接する調査区であることからこれに関係する遺物の流入もしくは古墳時代の集落との関連性も考えられる。まだこのほかにも複数基の古墳の存在も類推できる。

2. 岡田向遺跡出土木製品「櫛」について

S D 1 出土遺物の中には、多種多様な製品が出土している。柱材から日用雑器に至るまで規格も大小様々ある中で、類例の少ない櫛 (No70・71) が注目できる遺物である。今回の遺物は運搬具のなかでも大きく、本県では、高賀遺跡に同形状の遺物が報告されている。² 近隣では大阪府の鬼虎川遺跡や他に滋賀県や静岡県に 2 ~ 3 類例が知られているだけで、本県では 2 例目となる。例えば、鬼虎川遺跡出土の櫛を例にとると、滑走部は「滑り板」とこれに垂直に「隆起部」が構成されている。^{3・4} しかし、本品の場合は一枚板を垂直に立て、側面に木口を作り出している。さらに先端部を接地面から上方向に緩くカーブさせて削っている。これらの規格は、岡田向遺跡の製品と比較して小さめで重量が比較的あるものの運搬には適さないことが考えられる。農耕具発祥説はひとまず置くことにして部材の厚みや材質か

ら考えた場合、今回の出土品は木材やあるいは石材などの重量感のあるもの、又はある程度長い物資の運搬に使用したと考えられる。

3. 岡田向遺跡出土木製品の樹種と用途について

自然科学分析の結果を受けて、対象試料の 77 点について、樹種とその使用方法についての相関関係を考察した。まず、最も多く使用された樹種はヒノキで、32 点を数えた。これは、軟質材であり、加工の容易な点に起因していると考えられる。用途別には建材から曲物、下駄に至るまで幅広い。次に使用頻度が高かったのはマツであった。これは板材や柱として使用されていた。やはりこれも建築材料として使われている。第 3 には、11 点でスギであった。これは梯子や杓・角材に加工されて使われていた。

材質的には硬質材であり、劣化の進度が比較的遅いものである。その次にはブナである。これは柱材や杭への利用が多い。又鋤等農具としても使用されている。⁵ クスノキを利用したのは柱材であった。ゴマキやモクレン、シキミ等は 1 点のみの利用であった。

4. 本田氏城築城以前の遺構について

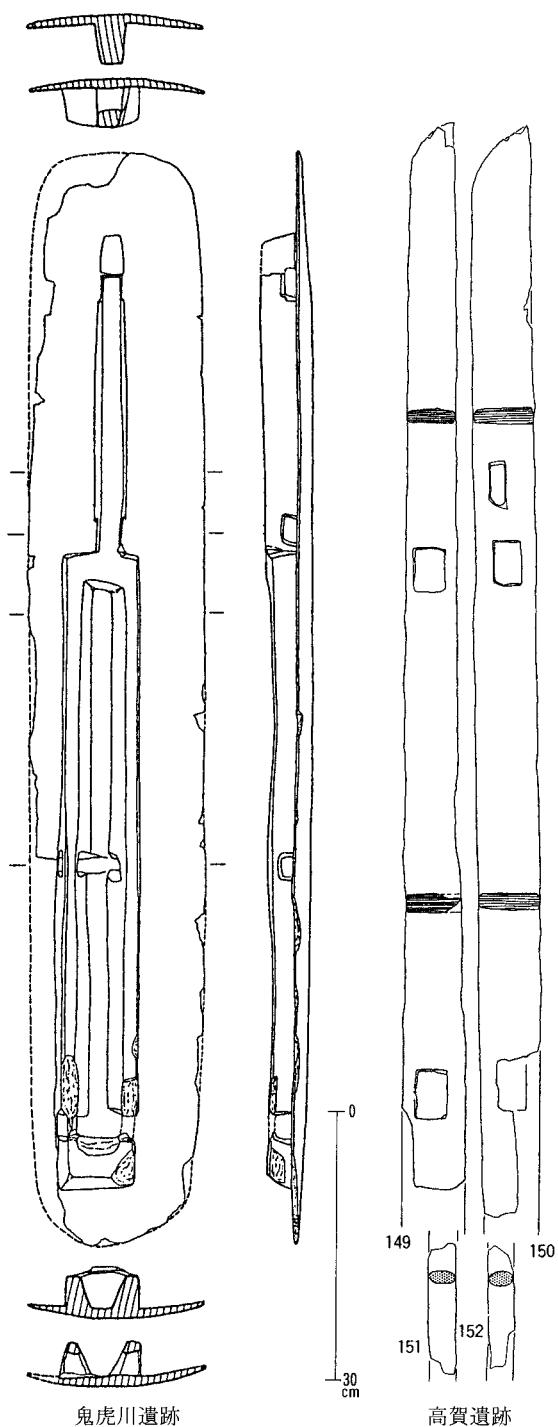
古墳時代後期の遺跡を周辺に求めると、小波田古墳等が該当する。旧上野市内にも周知の遺跡が存在する。これらは畿内勢力の拡大のなかで、在地勢力拡大による群集墳が各地で見られるようになる。この青山では、地形的には狭隘な丘陵尾根の先端部に集中していることがわかる。これらは規模的には直径が 10m までのものが多数を占める。おそらく本田氏城が築城される以前に、相当数の小規模古墳が造営されていたと考えられる。この南東部背後には標高の高い場所には北の権現古墳群が築造されている。これらの墳丘も規模的には小さいもので、5 ~ 6 m 程度の円墳である。

5. 本田氏城の S X 13・14 について

主郭から東へ降った地点及び北側斜面の中腹にて確認した遺構群である。1 も 2 も調査の工程に応じて、任意に上段、中段、下段という石材の積み上げ方があると判断し、隨時作図しながら取り上げていったわけである。S X 13 には、最奥に 50cm の長大な花崗岩質の立石を含む 115 点が認められた。

これらは直径1.2～1.3mの楕円状の範囲に石材が積み上げられていた。各段の石材は花崗岩が大半であった。大きさは平均すると縦20cm、横15cm、重量3.5kgの人頭をひとまわり小さくした石材であった。(第7～8表) 共伴する遺物が陶器片以外に認められなかつたので詳細な時期は判別できないがおおよそ室町後期ころに造られたとみられる。

今回の立石を墓標にする例、五輪塔を墓石にする



第24図 標の使用例

例は時期差はあると考えられ、五輪塔が確認されたSK 1からは共伴して信楽焼の甕の破片も出土した。^{6・7}これは大窯編年では15世紀中葉ころに相当するものであり、若干古い性格の遺構である。

6. 本田氏館跡出土の五輪塔について

本田氏館跡の調査では、地元岡田・柏尾地区には現在は中世に遡る墓所なりは伝わっていない。しかし、調査区周辺を分布調査すると各所で五輪塔を確認できる。

現在の墓所は、岡田向遺跡の東側背後、丘陵上にある小鴨氏城の裾を造成し、設けられている。この境内には、近世の六地蔵とおよそ200基の近世、近代の墓石が並ぶが、この中に、五輪塔が数体点在している状況である。中央には宝篋印塔が安置されている。⁸これは近世以降のものであると考えられる。

ところで今回SK 2等から発見された遺物は、各部位のうち水輪を除いた空風輪・火輪・地輪であつたが、基礎部分に当たる地輪は低く、これは一般的には古い段階の型式であるとも言われている。⁹また、このほかに笠石が1点ある。これはこれ以前の遺物であると考えられる。これらの遺物から墓所が築かれたのは、中世でも前半期あるいは、前期初頭ころまで遡ると考えられる。上述の墓所に見られる五輪塔は、本田氏城出土遺物よりも若干後に造立されたことになる。^{10・11・12}

したがって、今回の調査区から出土した骨蔵器の編年から推定すると、墓所として存続した時期は14世紀の後半から15世紀初頭とみられる。

【註】

- 1 前掲 青山町遺跡調査会『岡田向遺跡発掘調査報告書』
- 2 前掲註 高賀遺跡出土の運搬具
- 3 『木器集成図録』－近畿原始編－奈良国立文化財研究所1992
- 4 芋本隆裕「第5章 考察」『鬼虎川の木質遺物』－第7次発掘調査報告書 第4冊－ (財) 東大阪市文化財協会、1987
- 5 樋上 昇「曲柄鍬の伝播と流通」『考古学ジャーナル』No486 2002
- 6 田岡香逸「日本各地の仏塔」『新版 仏教考古学講座』第三巻塔・塔婆
- 7 同掲註
- 8 金光泰觀墓相研究所編『お墓の歴史』2005
- 9 村木二郎『仏教考古学講座』第3巻岩波書店、1992
- 10 村木二郎他「大和における中・近世墓地の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第111集、2004
- 11 森川櫻男『安田中世墓発掘調査報告』青山町教育委員会、1988
- 12 斎藤 忠「墓と仏教」『仏教民俗学大系』4 祖先祭祀と葬墓、名著出版 1988

取上げ番号	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	備考
1	14	10	3	0.4	
2	46	20	12	14.2	立石
3	17	11	10	2.0	
4	17	14	6	2.2	加工痕有り
5	16	10	6	1.5	
6	19	15	6	2.1	
7	15	11	7	1.6	
8	16	12	8	2.2	
9	29	21	8	6.2	
10	19	12	5	1.5	
11	28	22	20	17.5	
12	14	10	4	0.8	
13	17	11	8	1.7	
14	42	22	15	34.9	
15	24	20	6	4.3	
16	17	8	6	1.1	
17	16	10	5	1.2	
18	22	14	11	4.0	
19	12	10	5	0.7	
20	17	11	5	1.3	
21	15	10	5	1.0	
22	20	8	8	1.7	
23	21	13	6	3.0	
24	15	13	5	1.6	
25	18	18	5	3.4	
26	17	12	5	0.8	
27	14	12	4	1.2	
28	23	14	7	2.7	加工痕有り
29	14	11	5	1.0	
30	13	12	5	1.5	
31	18	11	7	1.9	
32	28	21	7	6.0	
33	13	10	6	0.8	
34	9	8	4	0.2	
35	12	8	3	0.5	
36	14	10	6	1.7	
37	15	14	5	1.6	
38	23	15	6	2.4	
39	18	9	5	1.2	
40	13	8	5	0.9	
41	18	11	7	1.8	
42	24	14	10	4.3	
43	18	11	5	2.0	
44	18	16	7	3.1	立石
45	13	10	5	1.4	
46	16	14	6	2.3	
47	17	10	4	1.2	
48	7	6	2	1.0	
49	20	12	4	2.0	
50	42	21	17	20.8	
51	19	18	7	3.2	
52	17	13	7	1.2	
53	11	8	2	0.3	
54	24	17	7	4.2	
55	19	5	3	0.6	
56	33	24	15	16.0	
57	24	17	5	3.2	
58	24	17	3	1.8	
59	18	12	6	1.5	

取上げ番号	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	備考
60	26	20	7	7.2	
61	35	21	10	9.4	
62	20	8	8	1.6	
63	27	17	11	5.0	
64	10	8	3	0.4	
65	20	17	6	3.0	
66	20	16	5	2.6	
67	12	10	5	0.8	
68	16	9	5	1.0	
69	19	14	5	1.6	
70	27	18	8	5.8	
71	14	12	5	1.0	
72	17	10	7	1.3	
73	17	14	5	1.5	
74	17	15	4	1.0	
75	20	10	6	1.0	
76	18	14	10	3.2	
77	21	19	13	8.4	
78	12	10	5	1.0	
79	21	11	3	1.0	
80	23	18	5	2.4	
81	19	16	12	3.3	
82	24	15	15	6.6	
83	14	8	5	0.8	
84	14	12	4	1.0	
85	16	12	6	1.8	
86	27	20	12	9.8	
87	19	12	8	2.6	
88	18	14	7	2.4	
89	14	11	6	0.9	
90	16	14	8	2.5	
91	12	10	4	0.8	
92	25	26	15	18.2	
93	18	11	6	1.6	
94	34	21	17	10.0	
95	15	9	6	1.2	
96	16	9	3	1.0	
97	16	11	6	2.6	
98	12	9	7	1.1	
99	15	7	7	1.4	
100	17	14	6	1.7	
101	18	11	5	1.2	
102	11	7	5	0.6	
103	14	9	6	1.0	
104	19	8	6	1.2	
105	17	12	10	3.8	
106	12	11	9	1.8	
107	26	18	14	9.8	
108	14	8	5	0.8	
109	12	7	6	0.7	
110	22	14	6	2.0	
111	25	15	13	6.4	
112	14	11	5	1.2	
113	16	13	5	1.8	
114	16	9	9	2.6	
115	21	11	3	1.3	

第7表 SX13石材計測表

取上げ番号	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	備考
1	26	13	5	3.6	
2	25	16	8	5.2	
3	15	15	4	2.6	
4	25	20	7	8.4	
5	20	14	6	2.4	
6	29	26	8	8.8	
7	33	16	6	6.6	
8	28	20	8	11.4	
9	27	21	8	7.4	
10	29	22	9	12.5	
11	24	12	4	2.9	
12	26	20	7	5.9	
13	26	16	5	3.1	
14	23	14	5	3.6	
15	21	19	8	6.0	
16	35	23	8	14.0	
17	23	22	8	7.0	
18	15	9	3	0.8	
19	40	21	10	13.8	
20	30	24	9	11.0	
21	26	21	10	11.4	
22	23	18	4	3.8	
23	29	14	7	4.4	
24	18	18	6	4.8	
25	13	9	5	1.0	
26	8	6	3	0.1	
27	9	8	3	0.4	
28	9	8	4	0.4	
29	11	7	7	0.6	
30	10	7	3	0.4	
31	11	8	3	0.3	
32	22	11	7	1.9	
33	23	15	6	4.3	
34	21	18	5	3.8	
35	18	15	4	2.2	
36	28	21	5	7.0	
37	9	8	2	0.4	
38	10	6	3	0.4	
39	15	13	5	1.6	
40	9	6	3	0.2	
41	16	12	2	1.2	
42	27	22	7	6.4	
43	15	8	2	0.8	
44	20	14	4	2.8	
45	12	7	5	0.6	
46	9	6	3	0.4	
47	15	9	4	0.8	
48	12	9	3	0.6	
49	10	6	3	0.4	
50	12	8	4	0.6	
51	10	9	5	0.6	
52	12	11	2	0.6	
53	9	8	3	0.4	

第8表 S X 14石材計測表

試料番号	樹種	点数	用途
5	ヒノキ科アスナロ属	32	曲物・農具・柱材他
3	マツ科モミ属	19	桁材・柱材・杭
4	スギ科スギ属スギ	11	下駄・梯子・部材
7	ブナ科クリ属クリ	3	柱材
1	イチイ科カヤ属カヤ	2	杭
6	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	2	又鋤
10	クスノキ科タブノキ属	2	柱材
2	マキ科マキ属イヌマキ	1	剣形
8	モクレン科モクレン属	1	曲柄
9	シキミ科シキミ属シキミ	1	桁材
11	ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ	1	緯打具
12	ツバキ科ツバキ属	1	豎杵
13	ツバキ科サカキ属サカキ	1	木錘

第9表 樹種別出土点数一覧

第8章 自然科学分析

(株)吉田生物研究所
汐見 真・白崎 泰子

1. 試料

試料は三重県岡田向遺跡から出土した農具10点、服飾具2点、容器5点、雑具2点、建築部材38点、土木材5点、用途不明品15点の合計77点である。

2. 觀察方法

削刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹5種、広葉樹8種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イチイ科カヤ属カヤ (*Torreya nutifera* Sieb, et Zucc.) (遺物No.74,77) (写真No.74,77)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個ある。仮道管の壁には対になつた螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

2) マキ科マキ属イヌマキ (*Podocarpus macropylus* Sweet) (遺物No.21) (写真No.21)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。板目では放射組織は全て単列であった。イヌマキは本州（中・南部）、四国、九州、琉球に分布する。

3) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

（遺物No.32～35,40,41,43,46,48,52,53,58,60～64,72,75）

（写真No.32～35,40,41,43,46,48,52,53,58,60～64,72,75）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺

部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射乳細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

4) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

（遺物No.1,2,4,6,20,31,38,59,66,67,69）

（写真No.1,2,4,6,20,31,38,59,66,67,69）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

5) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

（遺物No.3,7～19,22,28,29,30,36,37,39,42,44,45,54～56,65,68,70,71,73）

（写真No.3,7～19,22,28,29,30,36,37,39,42,44,45,54～56,65,68,70,71,73）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

6) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

（遺物No.24,26）

（写真No.24,26）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200 μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帶状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平状細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁

孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

7) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)

(遺物No.49,50,76)

(写真No.49,50,76)

環孔材である。木口では円形ないし橢円形で大体単独の大道管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は单穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

8) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp)

(遺物No.23)

(写真No.23)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110 μm）が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は单穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平状細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700 μmとなっている。モクレン属は、ホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

9) シキミ科シキミ属シキミ (*Illicium religiosum*

Sieb. et Zucc)

(遺物No.47)

(写真No.47)

散孔材である。木口では小道管（～40 μm）が単独または2～4個が直線状、放射状に複合して分布する。年輪界の始めで道管が年輪にそって環孔状に配列している。柾目では道管は階段穿孔、側壁に階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と方形、直立細胞からなり

異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～800 μmからなる。シキミは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

10) クスノキ科タブノキ属 (*Persea* sp)

(遺物No.51,57)

(写真No.51,57)

散孔材である。木口では中庸で厚壁の道管（～130 μm）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。柾目では道管は单穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、直立細胞からなり異性である。道管と放射組織間壁孔は円形、レンズ状、篩状の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～600 μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞（樟脳油貯蔵細胞）となったものが見られる。タブノキ属はタブノキ、ホソバタブがあり、本州（日本海側は青森、太平洋側は岩手中部以南）、四国、九州、琉球に分布する。

11) ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ (*Hydrangea paniculata* Sieb.)

(遺物No.25)

(写真No.25)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～50 μm）が単独ないし複数個が接線状、塊状に複合して分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は階段状である。道管内には平板状のチロースがある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1.5mmからなる。直立細胞からなる單列翼部はきわめて長い。ノリウツギは北海道、本州、四国、九州に分布する。

12) ツバキ科ツバキ属 (*Camellia* sp)

(遺物No.27)

(写真No.27)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～40 μm）が単独ないし2～3個接合して均等に分布する。放射組織は1～3細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性

である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1mm以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木纖維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

13) ツバキ科サカキ属サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg. Pro parte emend. Sieb. et Zucc.)

(遺物No.5)

(写真No.5)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～50μm）が単独ないし2～4個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ

～1.5からなる。木纖維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州（茨城、石川以西南）、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

No	報告No	実測図番号	品名	樹種
1	42	007-01	下駄	スギ科スギ属スギ
2	43	012-01	下駄	スギ科スギ属スギ
3	44	005-01	木鍤	ヒノキ科アスナロ属
4	45	022-01	木鍤	スギ科スギ属スギ
5	46	002-02	木鍤	ツバキ科サカキ属サカキ
6	47	022-02	杓形木製品	スギ科スギ属スギ
7	48	029-04	棒状具	ヒノキ科アスナロ属
8	49	031-03	棒状具	ヒノキ科アスナロ属
9	50	031-04	棒状具	ヒノキ科アスナロ属
10	51	021-01	角形棒状具	ヒノキ科アスナロ属
11	52	032-01	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
12	53	002-01	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
13	54	006-03	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
14	55	001-01	柄付容器	ヒノキ科アスナロ属
15	56	004-01	案(未整)	ヒノキ科アスナロ属
16	57	011-01	案	ヒノキ科アスナロ属
17	58	009-02	剣形木製品	ヒノキ科アスナロ属
18	59	021-02	鎌形木製品	ヒノキ科アスナロ属
19	60	021-03	矢形木製品	ヒノキ科アスナロ属
20	61	029-02	小刀形木製品	スギ科スギ属スギ
21	62	029-03	剣形木製品	マキ科マキ属イヌマキ
22	63	035-01	桶	ヒノキ科アスナロ属
23	64	003-01	曲柄鍛柄装着部	モクレン科モクレン属
24	65	008-01	曲柄又鍛	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
25	66	014-01	エブリ状木製品	ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ
26	67	032-02	曲柄鍛柄	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
27	68	005-03	堅杵	ツバキ科ツバキ属
28	69	030-01	大足	ヒノキ科アスナロ属
29	70	017-01	檻	ヒノキ科アスナロ属
30	71	017-02	檻	ヒノキ科アスナロ属
31	72	013-01	梯子	スギ科スギ属スギ
32	73	010-02	桁材	マツ科モミ属
33	74	018-01	桁材	マツ科モミ属
34	75	023-01	桁材	マツ科モミ属
35	76	001-02	柱材	マツ科モミ属
36	77	019-01	柱材	ヒノキ科アスナロ属
37	78	019-02	柱材	ヒノキ科アスナロ属
38	79	015-03	柱材	スギ科スギ属スギ

第10表 岡田向遺跡出土木製品同定表

No	報告No	実測図番号	品名	樹種
39	80	020-01	板材	ヒノキ科アスナロ属
40	(未)	027-01	板材	マツ科モミ属
41	81	027-02	板材	マツ科モミ属
42	82	005-02	建材	ヒノキ科アスナロ属
43	83	026-01	建材	マツ科モミ属
44	84	034-01	加工板状製品	ヒノキ科アスナロ属
45	85	030-03	加工木片	ヒノキ科アスナロ属
46	86	006-02	加工材	マツ科モミ属
47	87	013-02	桁材	シキミ科シキミ属シキミ
48	88	009-01	柱材(角)	マツ科モミ属
49	89	015-02	柱材	ブナ科クリ属クリ
50	90	016-01	柱材	ブナ科クリ属クリ
51	91	023-02	柱材	クスノキ科タブノキ属
52	92	023-03	柱材	マツ科モミ属
53	93	023-04	柱材	マツ科モミ属
54	94	026-02	柱材	ヒノキ科アスナロ属
55	95	026-03	柱材	ヒノキ科アスナロ属
56	96	026-04	柱材	ヒノキ科アスナロ属
57	97	028-01	柱材	クスノキ科タブノキ属
58	98	033-02	柱材	マツ科モミ属
59	99	006-01	板材	スギ科スギ属スギ
60	100	024-01	板材	マツ科モミ属
61	101	024-02	板材	マツ科モミ属
62	102	025-01	板材	マツ科モミ属
63	103	025-02	板材	マツ科モミ属
64	104	025-03	板材	マツ科モミ属
65	105	027-03	板材	ヒノキ科アスナロ属
66	106	028-02	板材	スギ科スギ属スギ
67	107	010-04	角材	スギ科スギ属スギ
68	108	013-03	角材	ヒノキ科アスナロ属
69	109	029-01	角材	スギ科スギ属スギ
70	110	029-05	角材	ヒノキ科アスナロ属
71	111	030-02	角材	ヒノキ科アスナロ属
72	112	031-01	角杭	マツ科モミ属
73	113	031-02	角杭	ヒノキ科アスナロ属
74	114	010-03	杭	イチイ科カヤ属カヤ
75	115	010-01	杭?	マツ科モミ属
76	116	024-03	杭	ブナ科クリ属クリ
77	117	033-01	杭	イチイ科カヤ属カヤ

写 真 図 版



調査前風景（南から）



調査区全景（南から）



調査区西壁土層（東から）



S D 1 (北から)



SD 1 北柱穴 (南から)



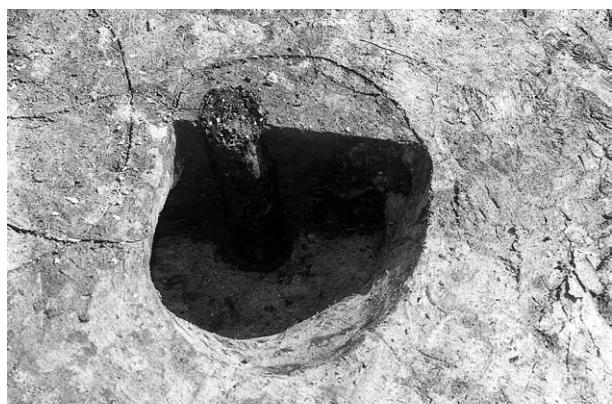
SD 1 北柱穴 (西から)



B 2 Pit 3 検出状況 (南から)



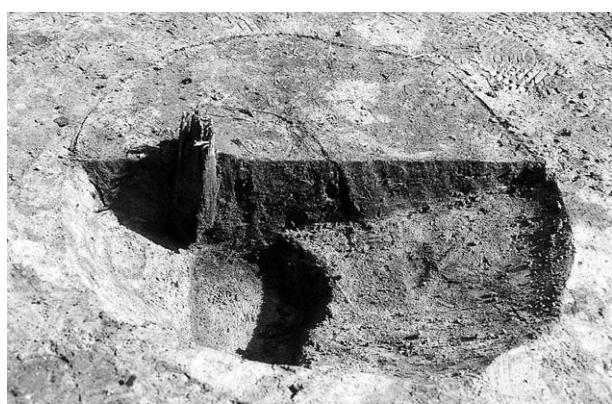
B 3 Pit 1 検出状況 (東から)



B 2 Pit 7 検出状況 (西から)



A 2 Pit 4 検出状況 (南から)



A 1 Pit 9 検出状況 (西から)



A 1 Pit 10 検出状況 (東から)



SD 1 柱材出土状況 (東から)



SD 1 木製品出土状況 (東から)



SD 1 桶出土状況 (南から)



SD 1 橋出土状況 (西から)



SD 1 橋出土状況 (東から)

図版5 岡田向遺跡出土遺物(1) SD1出土土器



1



3



4



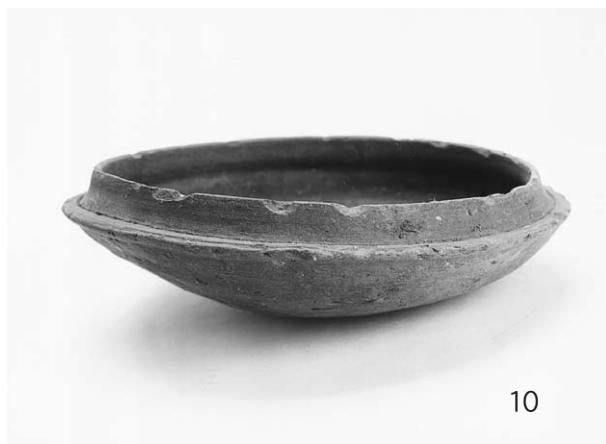
6



8



9



10



13

図版6 岡田向遺跡出土遺物(2)
SD1出土土器



14



15



19



20



23



24



32



35

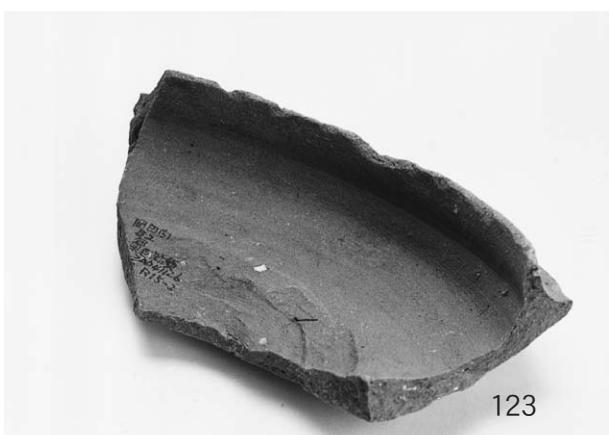
図版7 岡田向遺跡出土遺物(3) 包含層出土土器



121



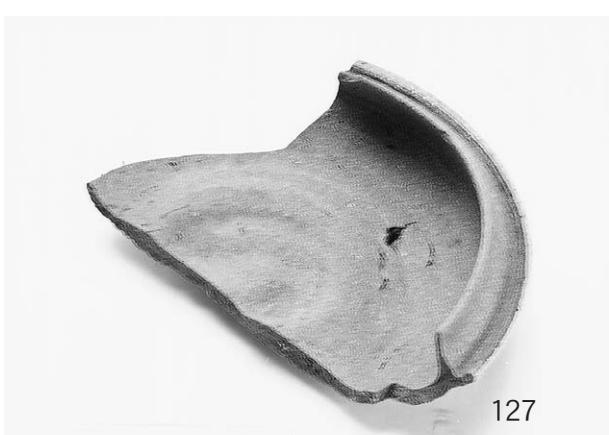
122



123



126



127



130



131



132



136



137 138 139 140



表
141



裏
141



150



151



153



160



167

図版9 岡田向遺跡出土遺物(5)
SD1出土木製品



44



45



46



47



49



50



52



51



59



60



53



前面



側面



背面
55



上面
57



109



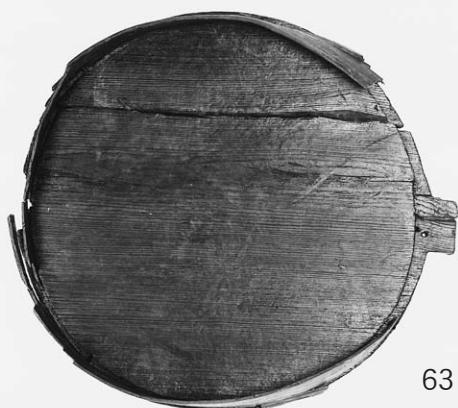
61



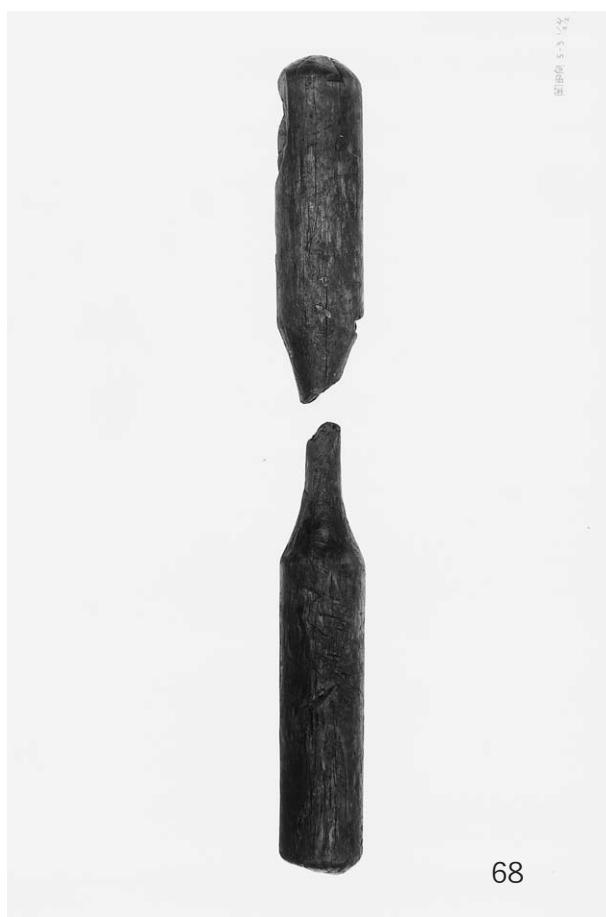
62



56

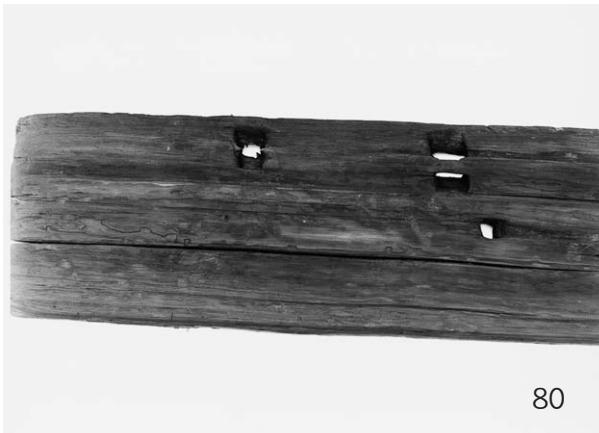


63





77



80



77



84



86



112



113

82



78



調査前風景（西から）



調査区西斜面（西から）



調査区全景（東から）



調査区全景（直上から）



東斜面掘削前（東から）



東斜面検出状況（東から）



S X 13検出状況 (東から)



積石取上後 (東から)



S X 13掘り下げ状況 (東から)



腰曲輪検出状況 (北から)



腰曲輪検出状況 (南から)



SK 2完掘状況 (西から)



調査区東半（東から）



丘陵頂付近（西から）



西斜面近接（西から）



東斜面（西から）





8



10



11



9



12



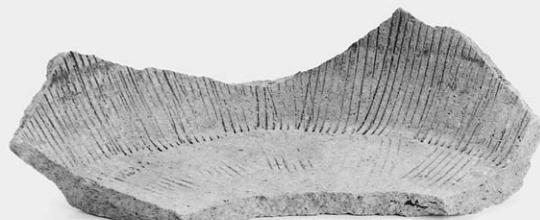
13



18



17



14



19



20



21



22



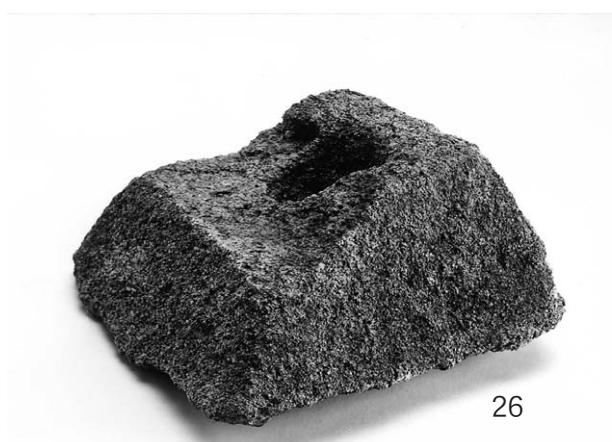
23



24



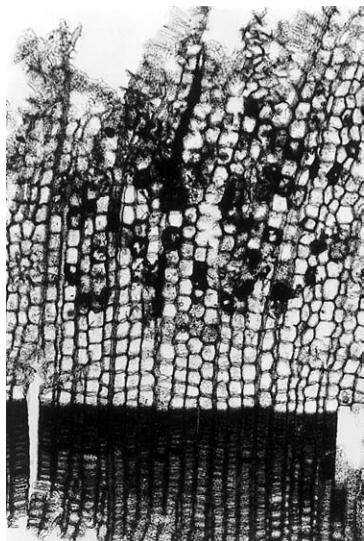
25



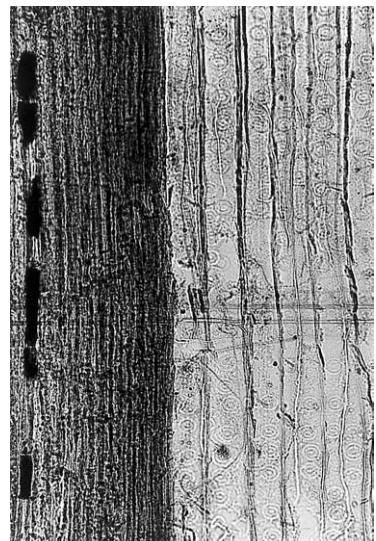
26



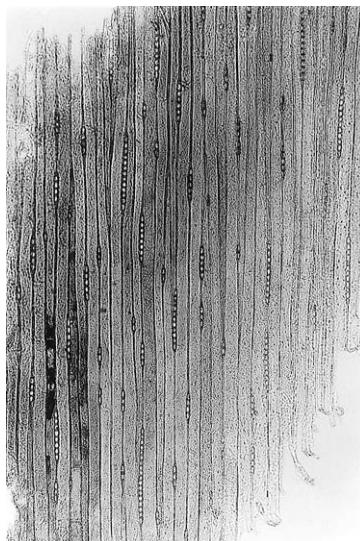
27



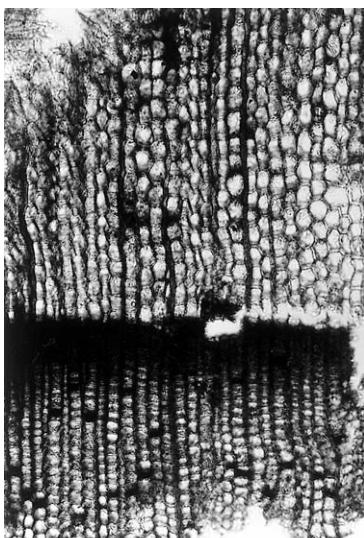
No - 1 木口 × 40
スギ科スギ属スギ



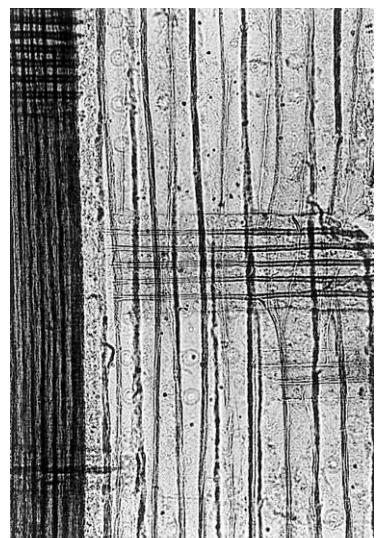
柾目 × 100



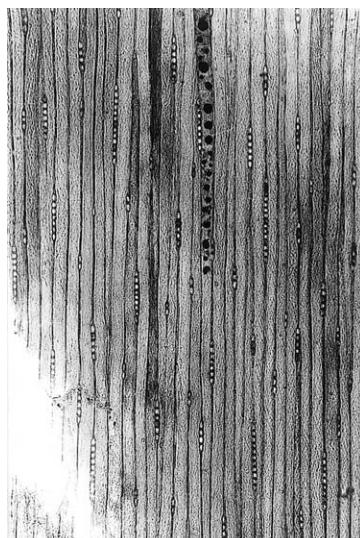
板目 × 40



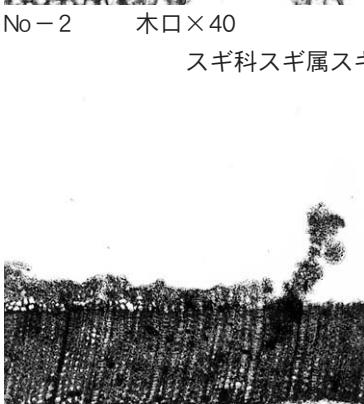
No - 2 木口 × 40
スギ科スギ属スギ



柾目 × 100



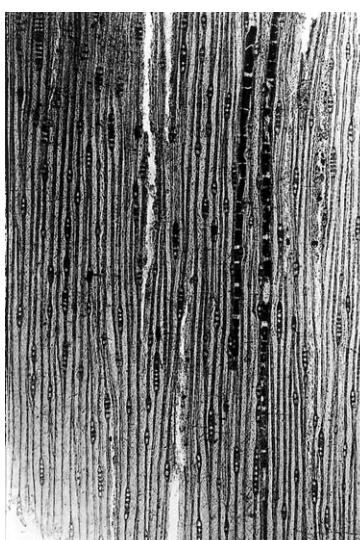
板目 × 40



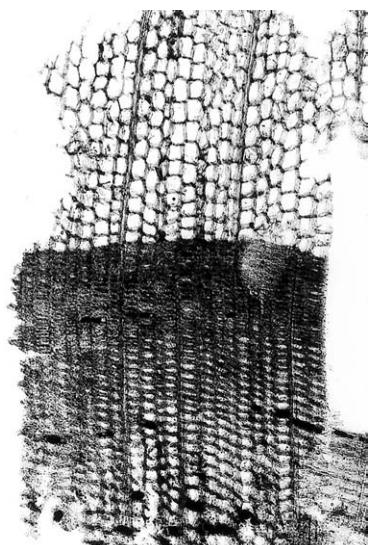
No - 3 木口 × 40
ヒノキ科アスナロ属



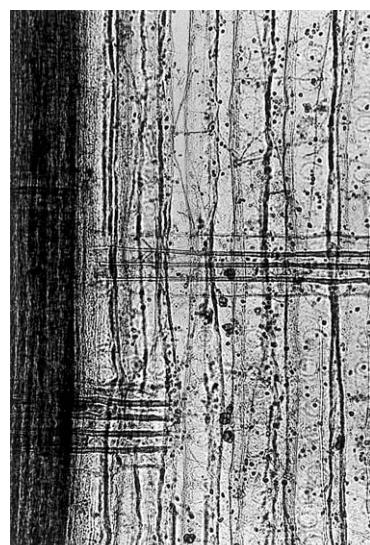
柾目 × 100



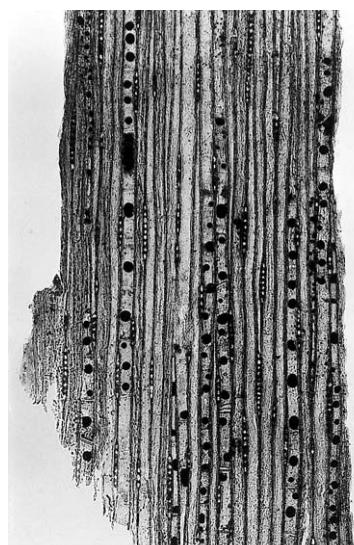
板目 × 40



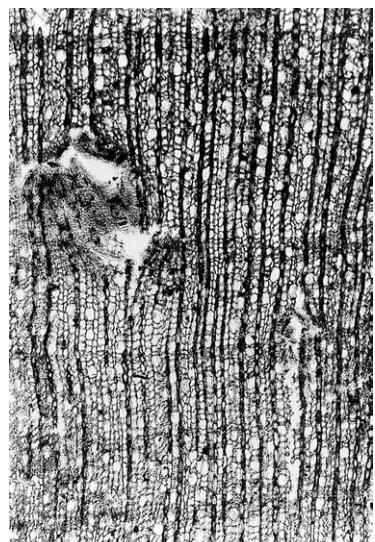
No-4 木口×10
スギ科スギ属スギ



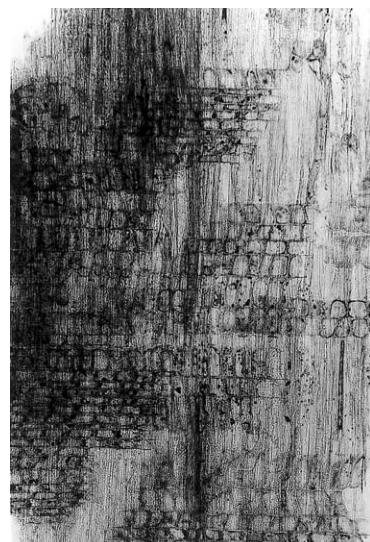
柾目×100



板目×40



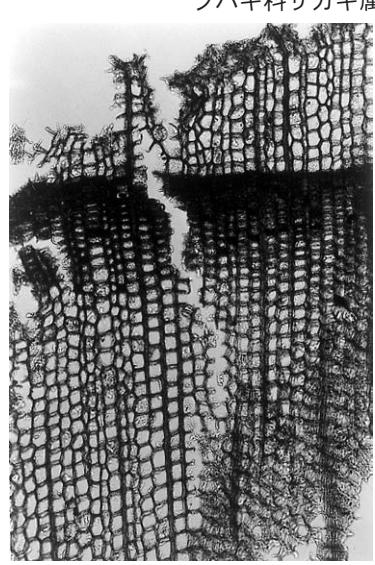
No-5 木口×40
ツバキ科サカキ属サカキ



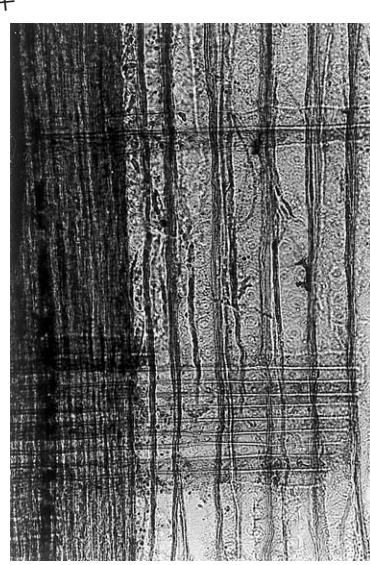
柾目×40



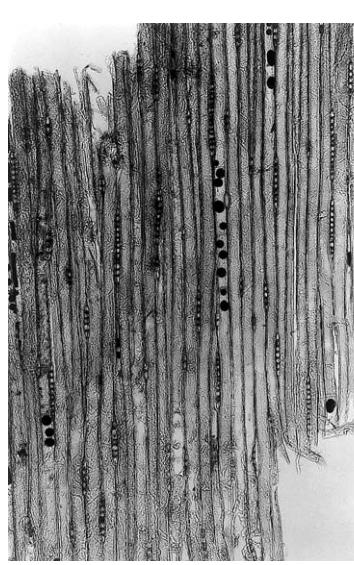
板目×40



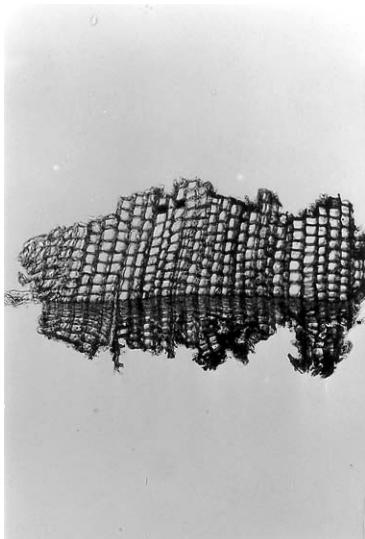
No-6 木口×40
スギ科スギ属スギ



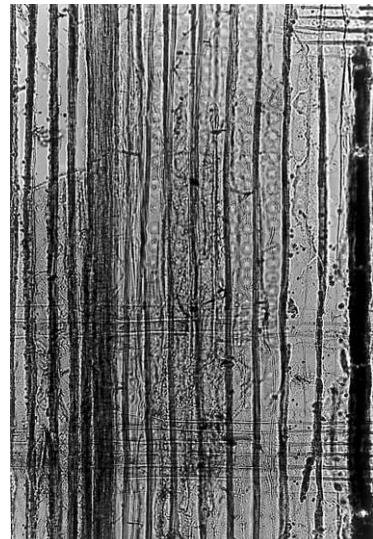
柾目×100



板目×40



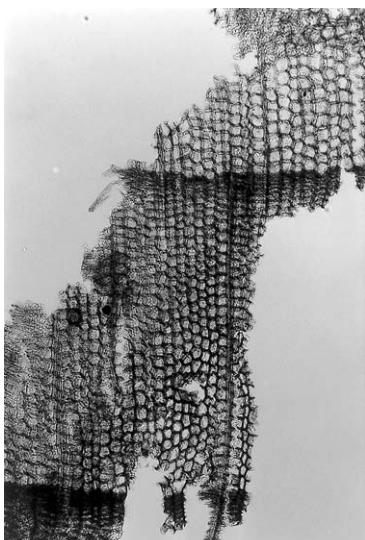
No-7 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



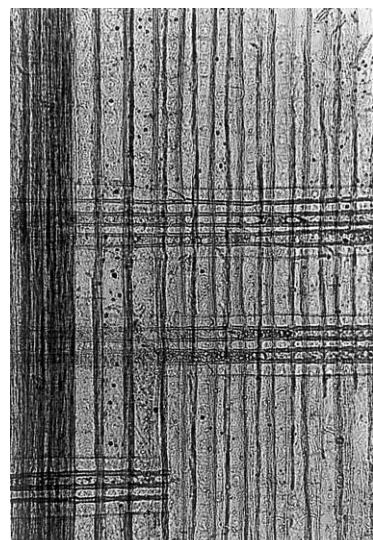
柾目×100



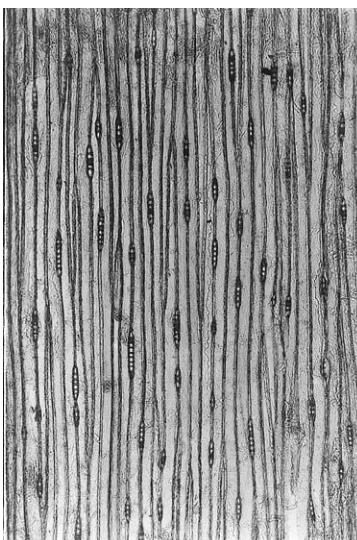
板目×40



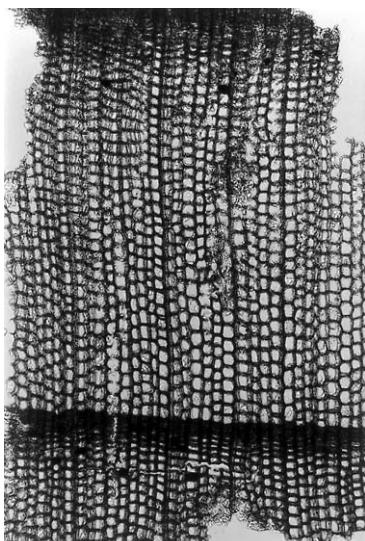
No-8 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



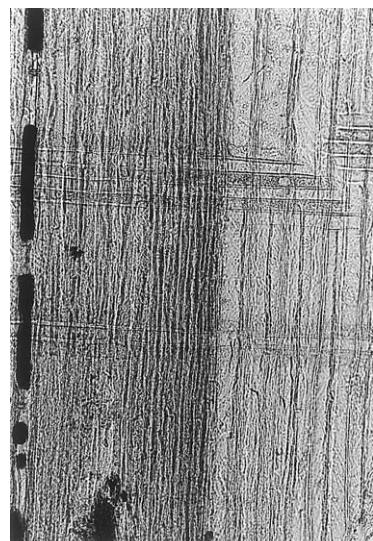
柾目×100



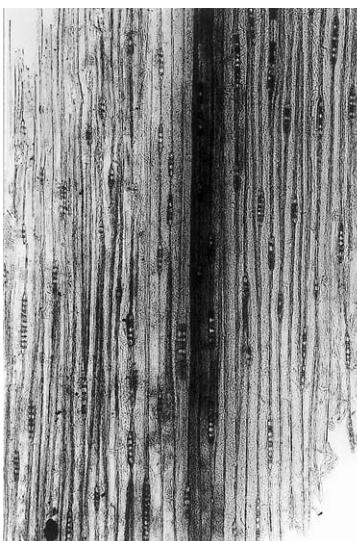
板目×40



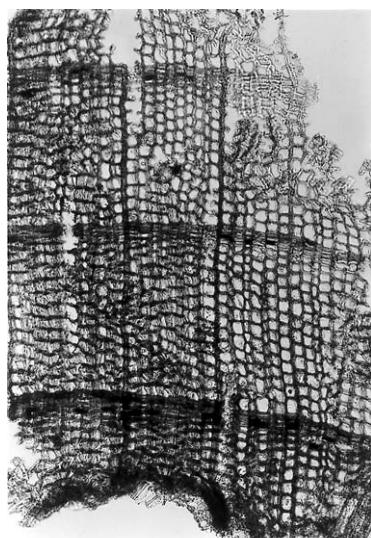
No-9 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



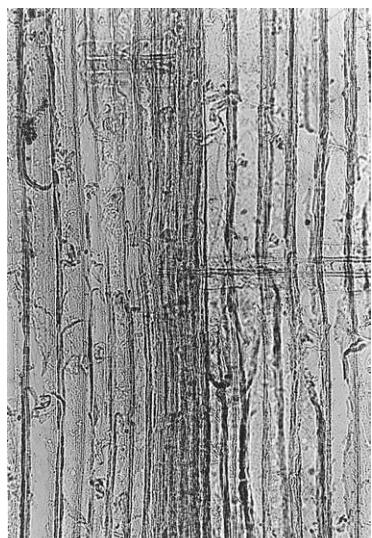
柾目×100



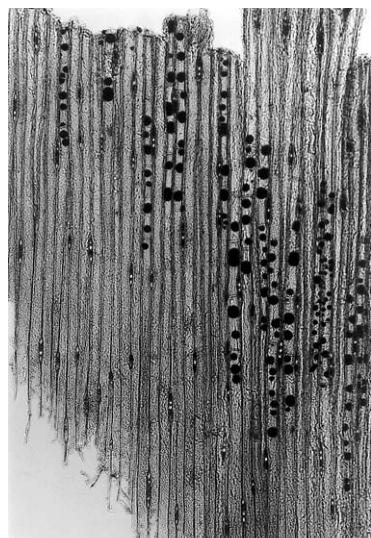
板目×40



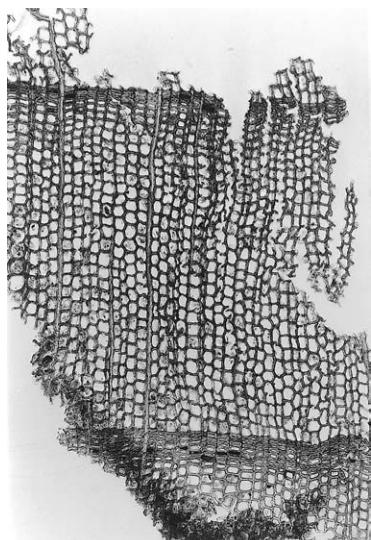
No-10 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



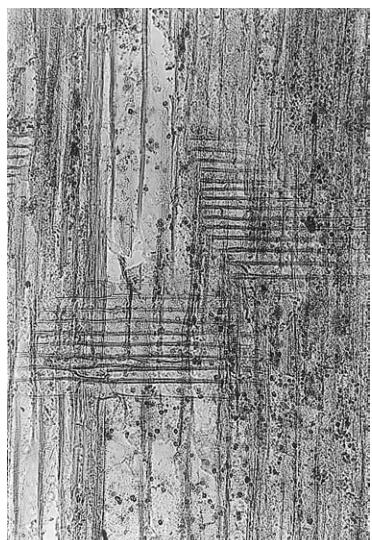
柾目×100



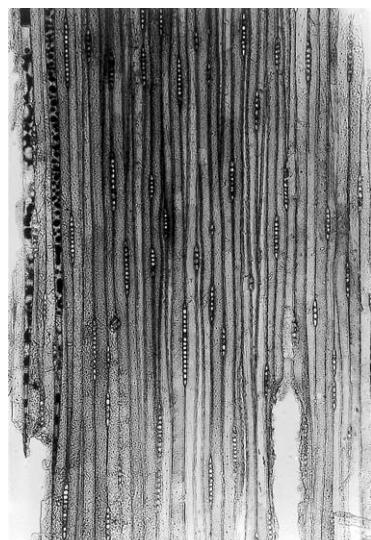
板目×40



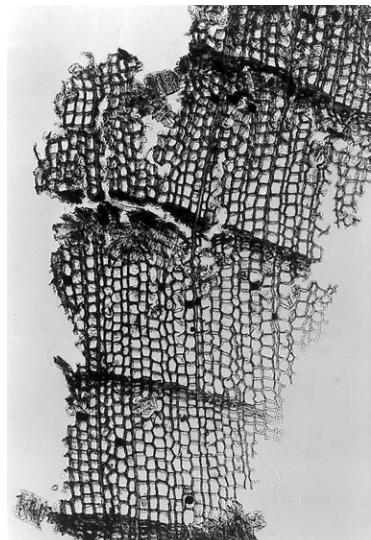
No-11 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



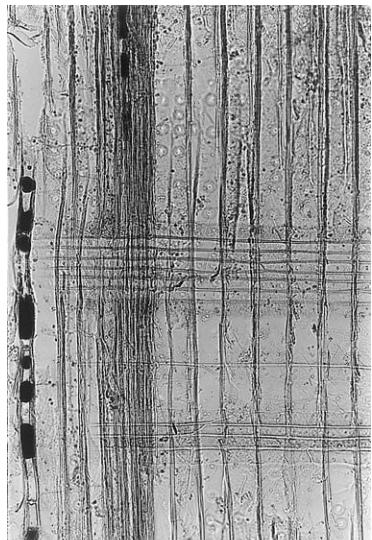
柾目×100



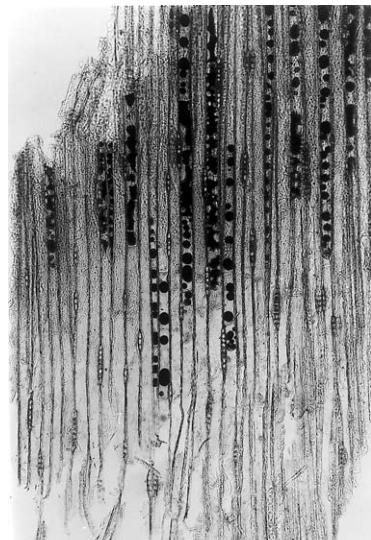
板目×40



No-12 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



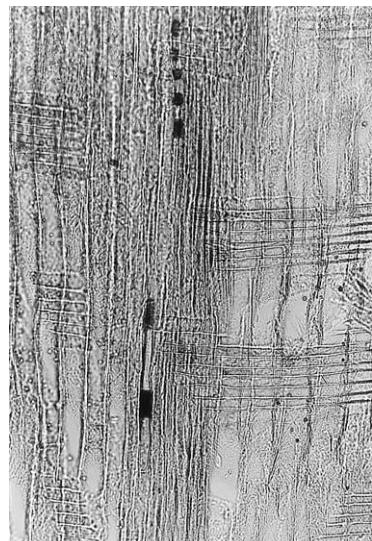
柾目×100



板目×40



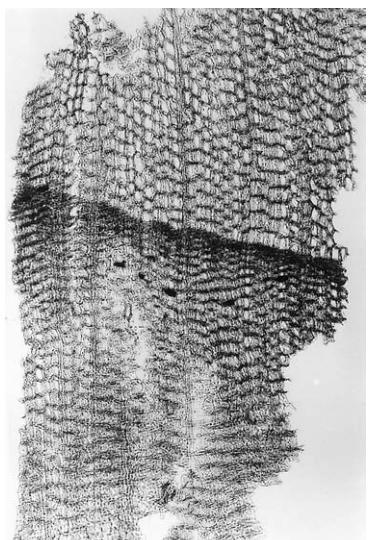
No-13 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



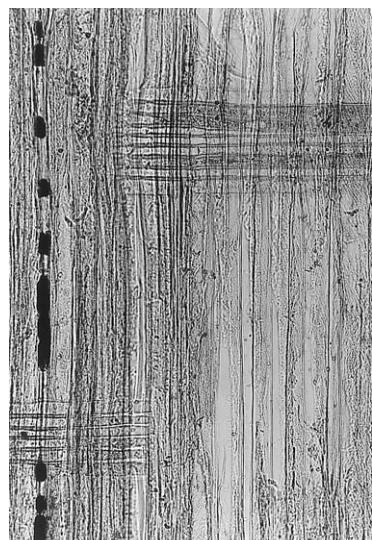
柾目×100



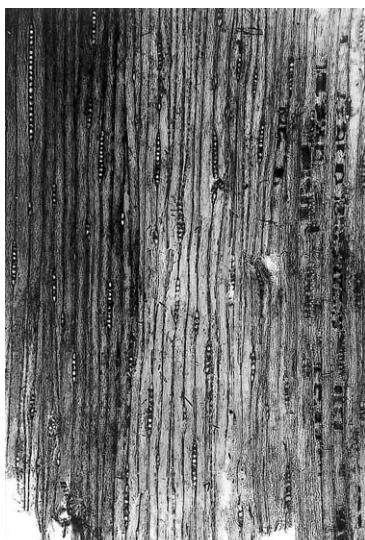
板目×40



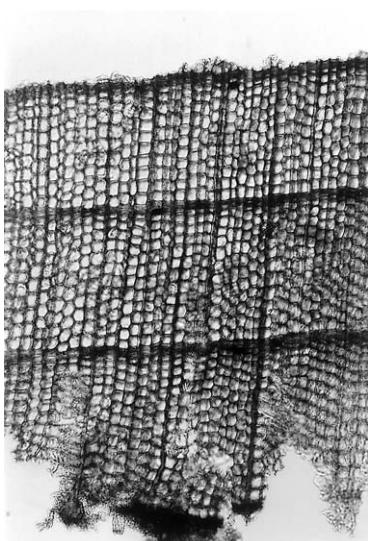
No-14 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



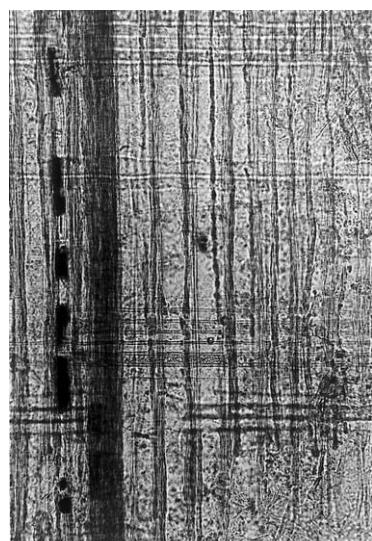
柾目×100



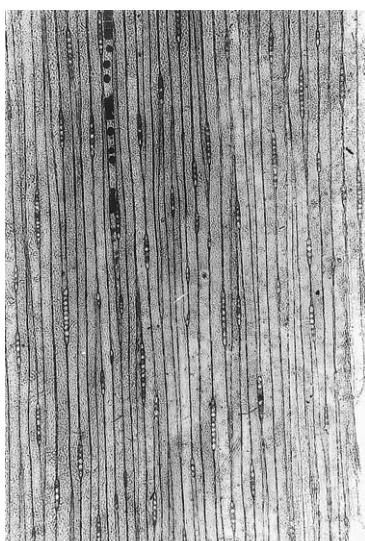
板目×40



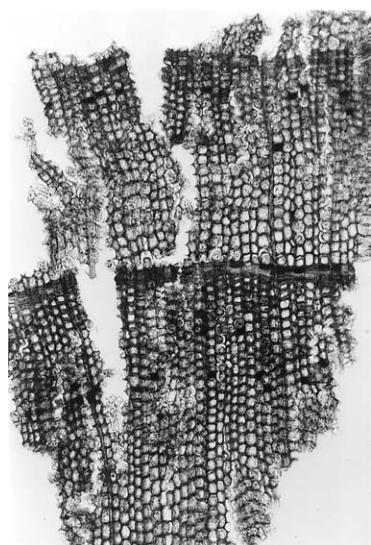
No-15 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



柾目×100

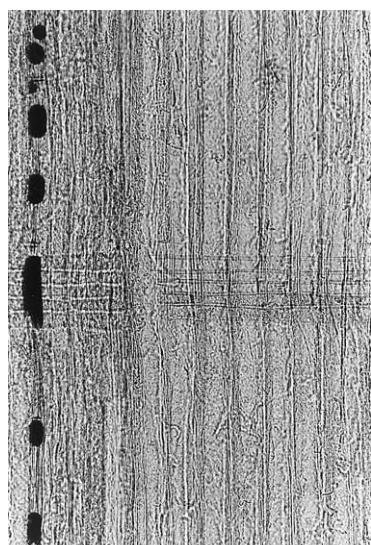


板目×40



No-16 木口×40

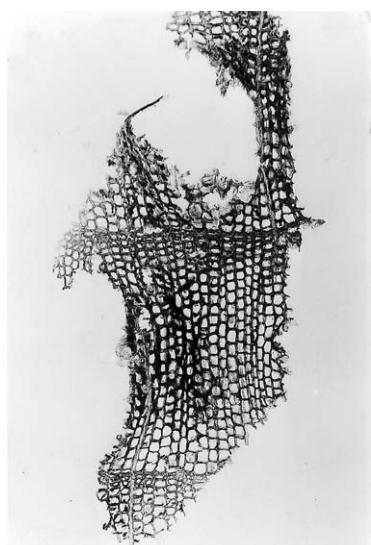
ヒノキ科アスナロ属



柾目×100



板目×40

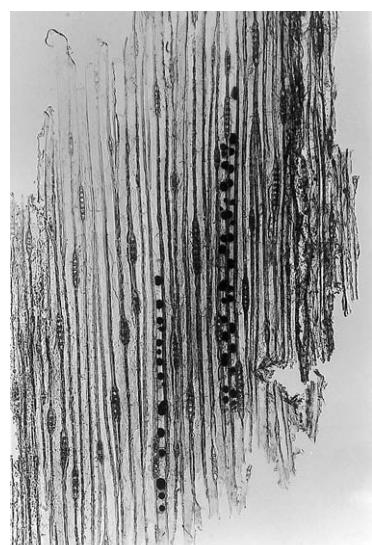


No-17 木口×40

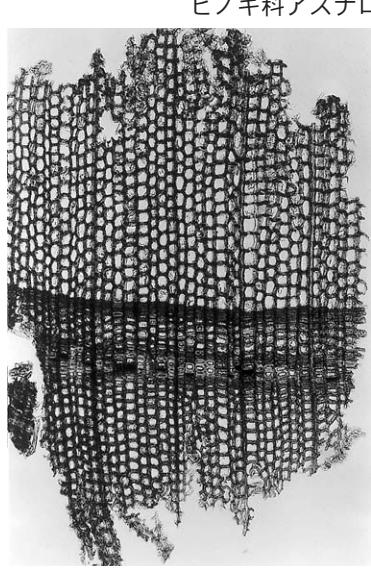
ヒノキ科アスナロ属



柾目×100

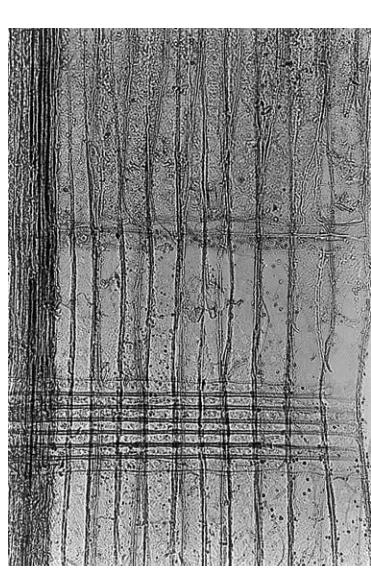


板目×40

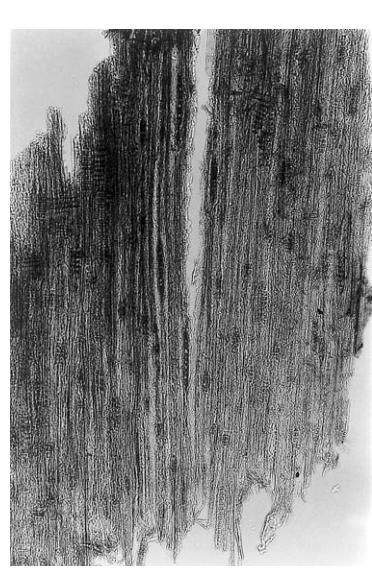


No-18 木口×40

ヒノキ科アスナロ属



柾目×100



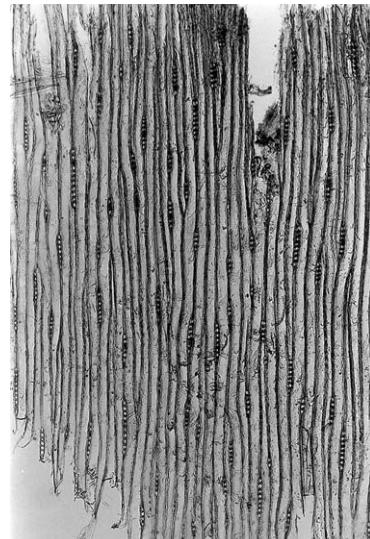
板目×40

No - 19

ヒノキ科アスナロ属



柾目 × 100



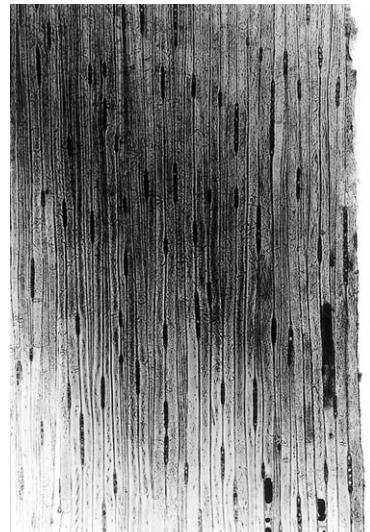
板目 × 40

No - 20

スギ科スギ属スギ



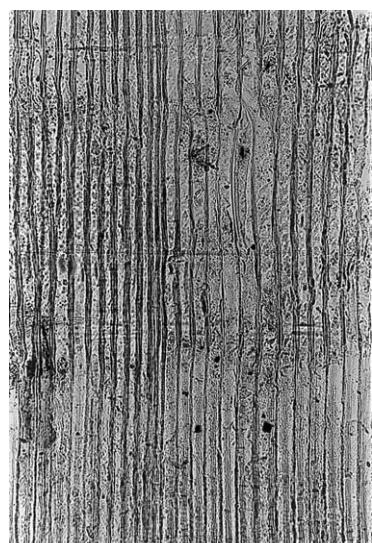
柾目 × 100



板目 × 40

No - 21

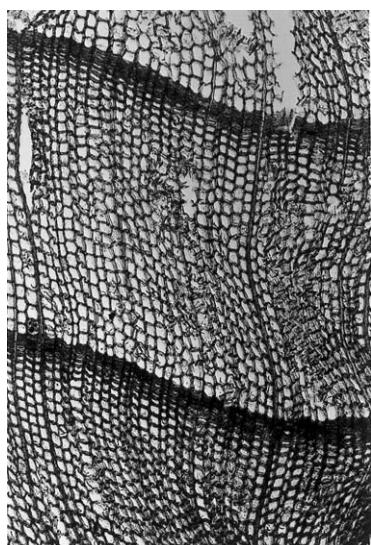
マキ科マキ属イヌマキ



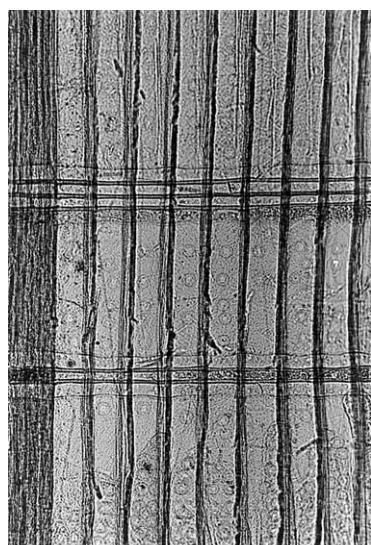
柾目 × 100



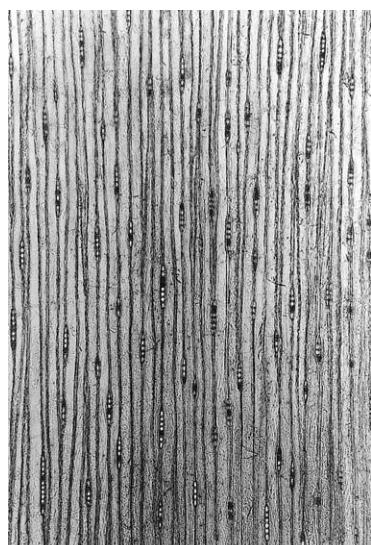
板目 × 40



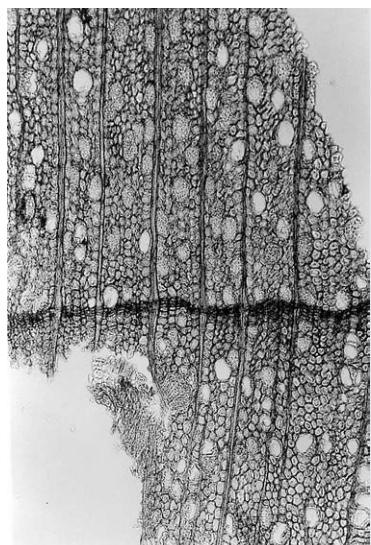
No-22 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



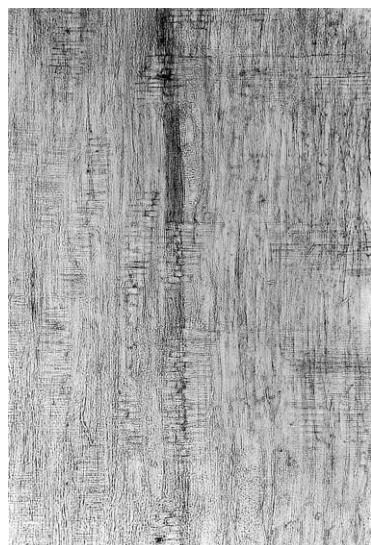
柾目×100



板目×40



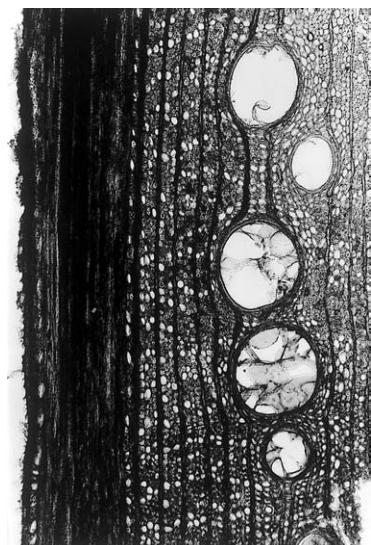
No-23 木口×40
モクレン科モクレン属



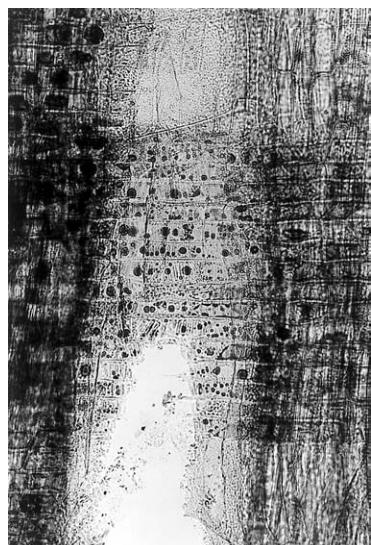
柾目×40



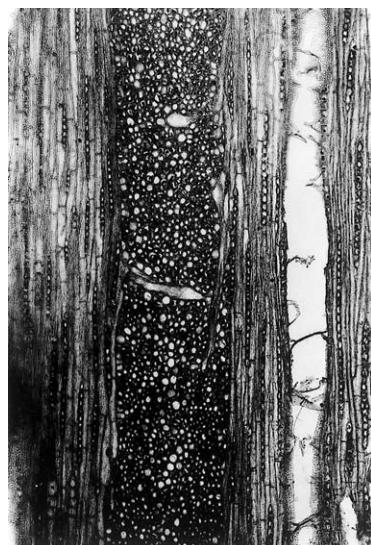
板目×40



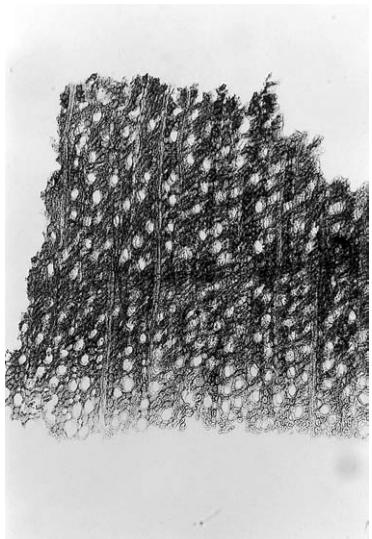
No-24 木口×40
ブナ科コナラ属アカガシ亜属



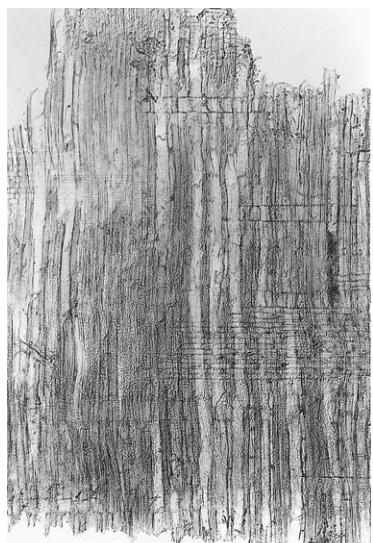
柾目×100



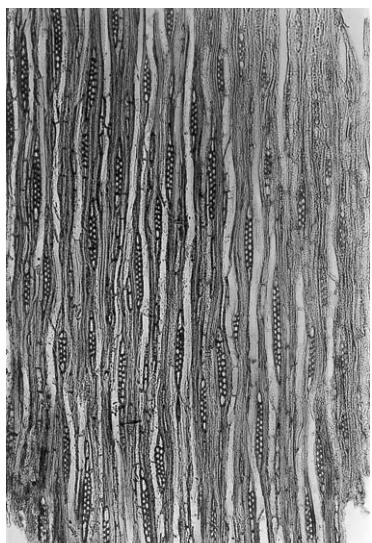
板目×40



No-25 木口×40

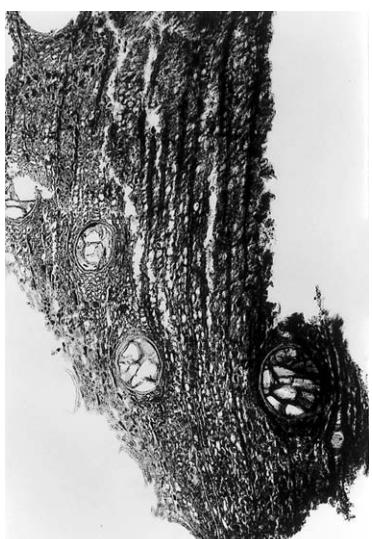


柾目×40

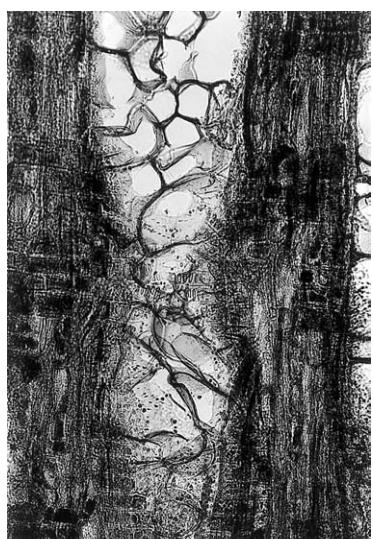


板目×40

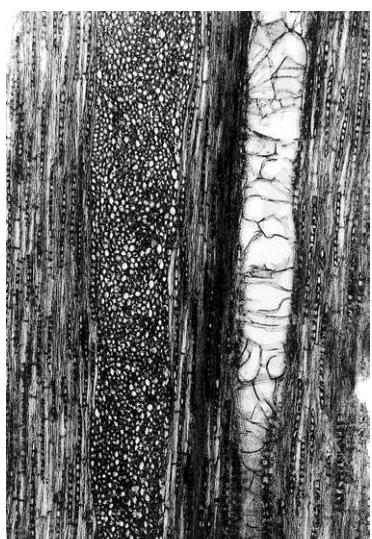
ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ



No-26 木口×40

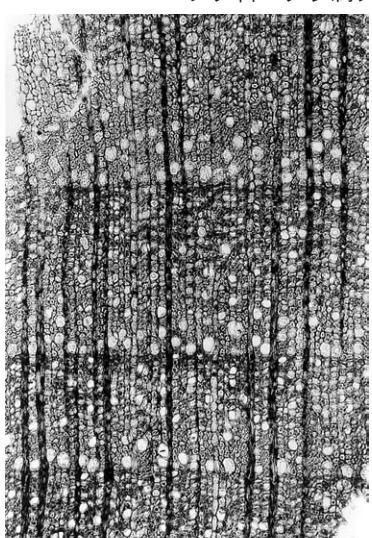


柾目×100

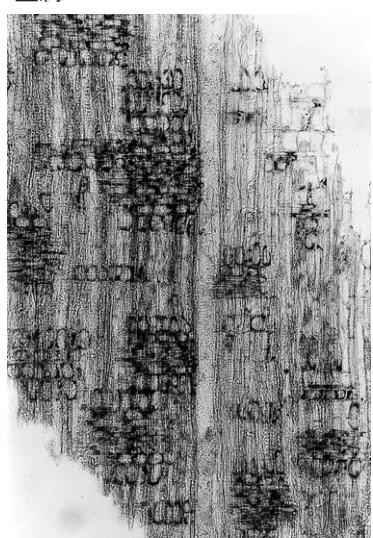


板目×40

ブナ科コナラ属アガシ亜属



No-27 木口×40

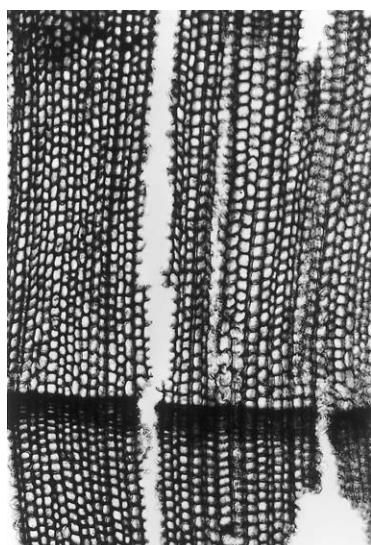


柾目×40

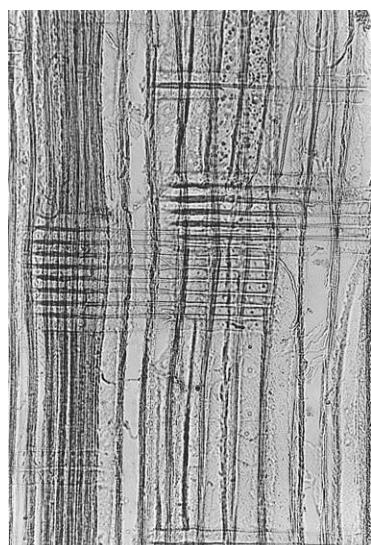


板目×40

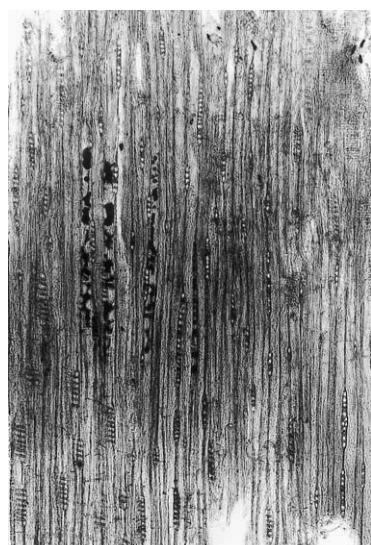
ツバキ科ツバキ属



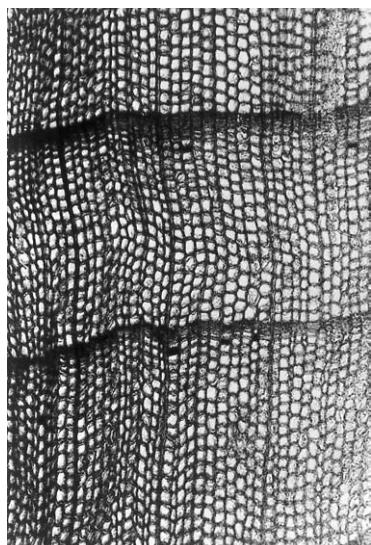
No-28 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



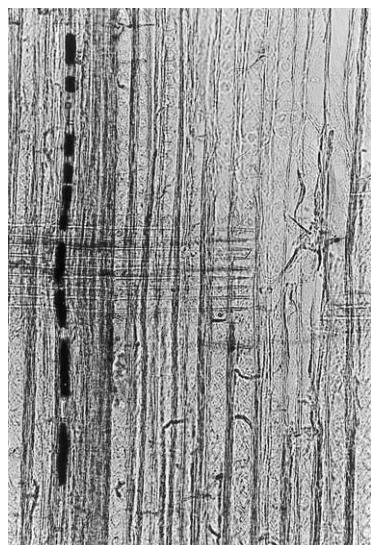
柾目×100



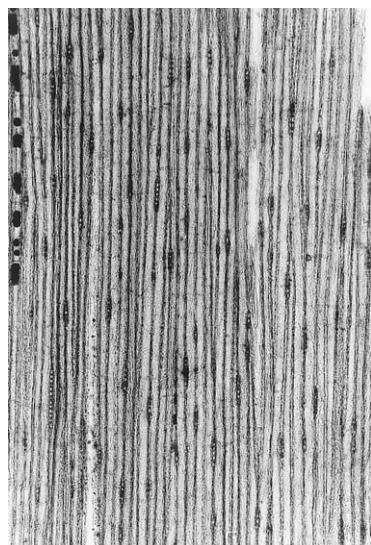
板目×40



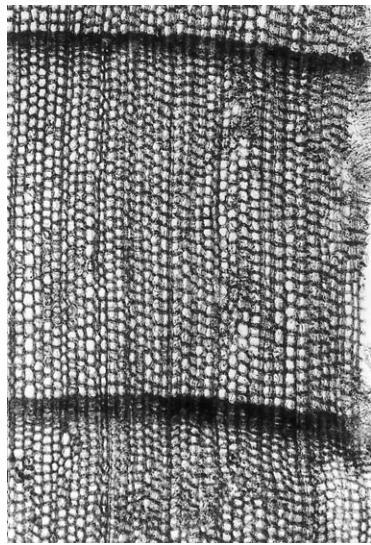
No-29 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



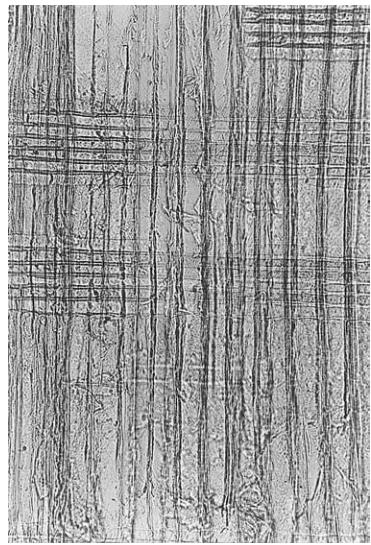
柾目×100



板目×40



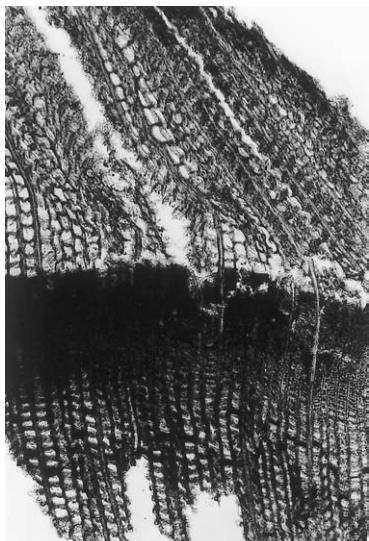
No-30 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



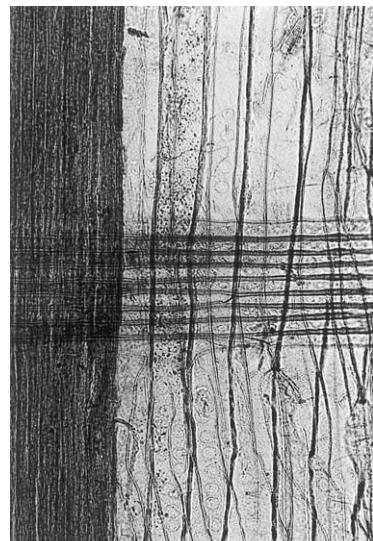
柾目×100



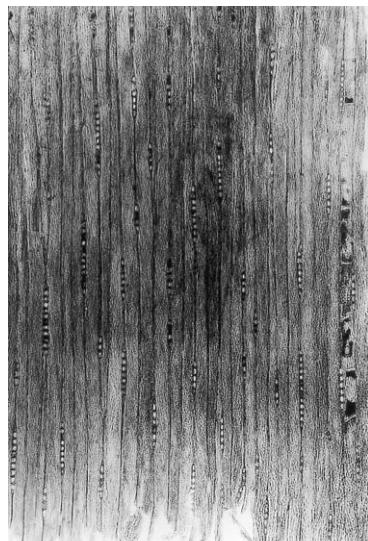
板目×40



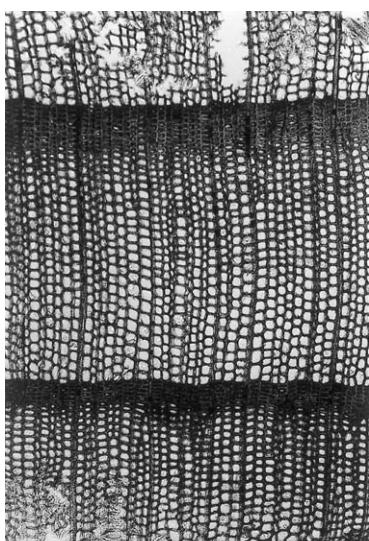
No - 31 木口 × 40
スギ科スギ属スギ



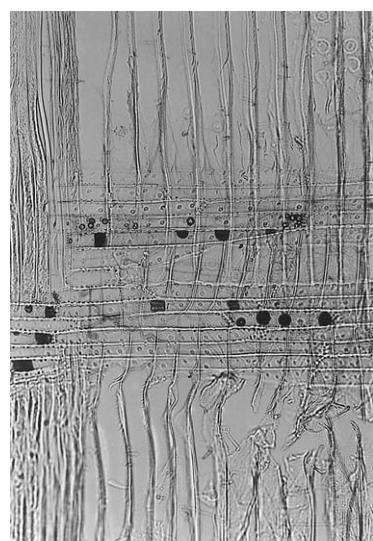
柾目 × 100



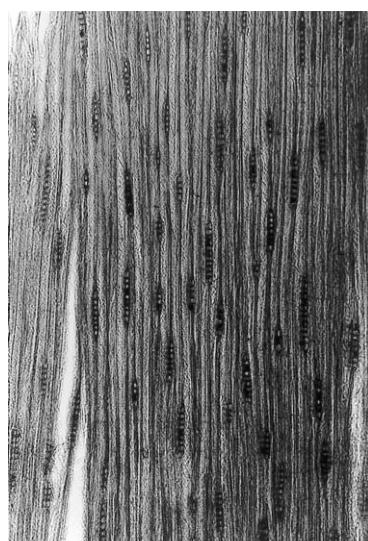
板目 × 40



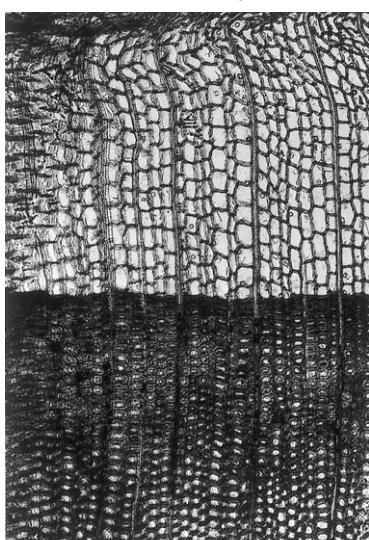
No - 32 木口 × 40
マツ科モミ属



柾目 × 100



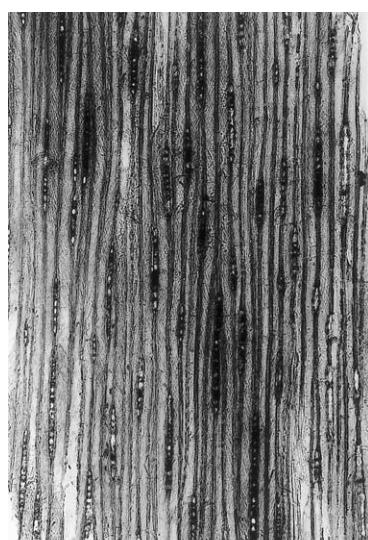
板目 × 40



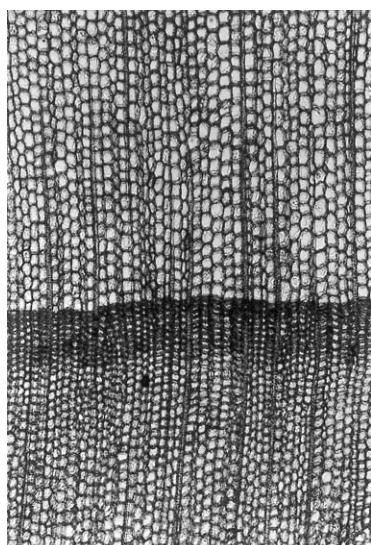
No - 33 木口 × 40
マツ科モミ属



柾目 × 100

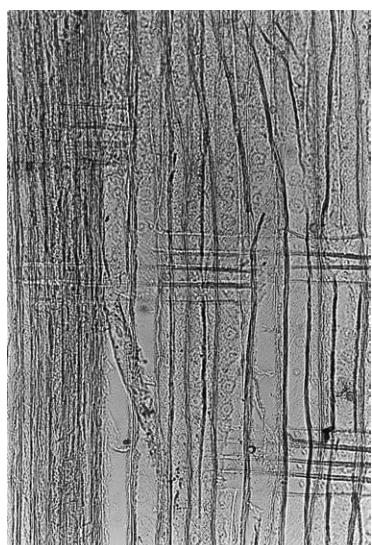


板目 × 40

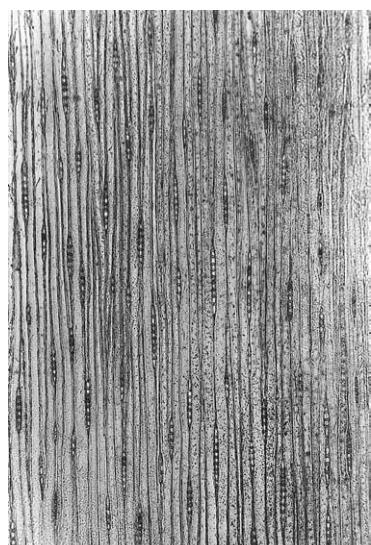


No-34 木口×40

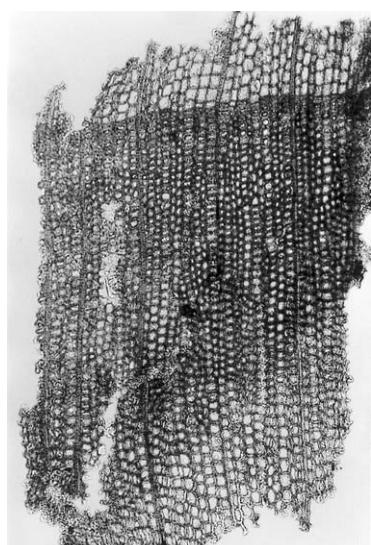
マツ科モミ属



柾目×100

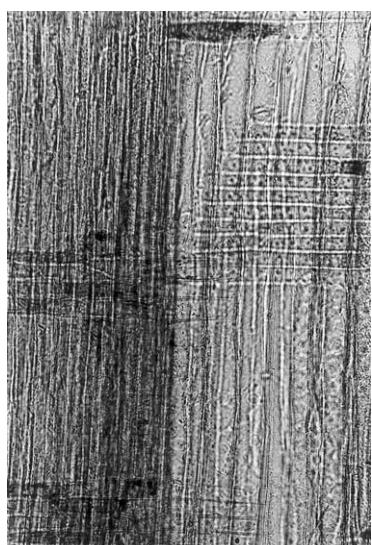


板目×40

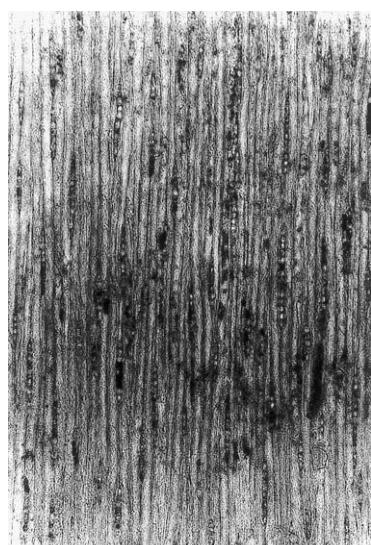


No-35 木口×40

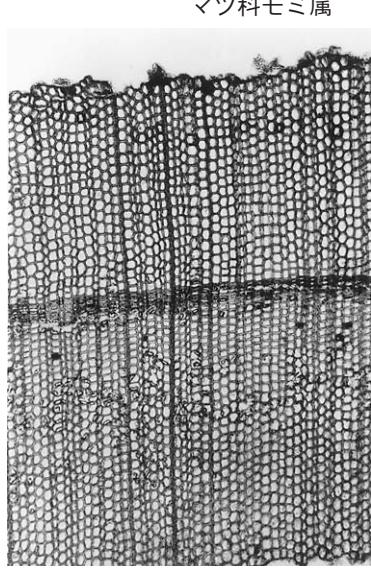
マツ科モミ属



柾目×100

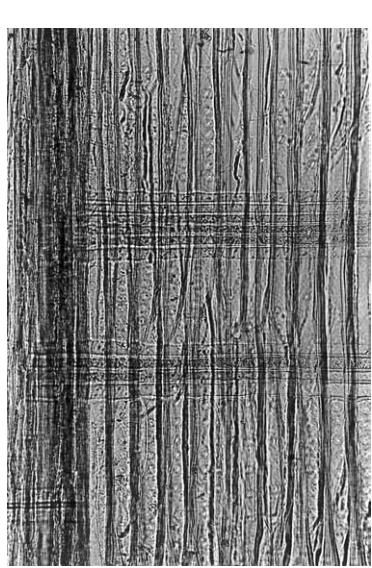


板目×40

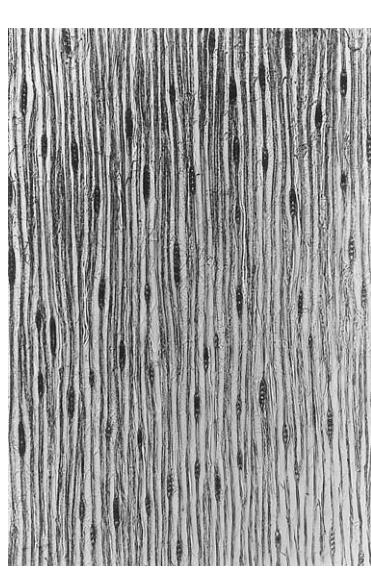


No-36 木口×40

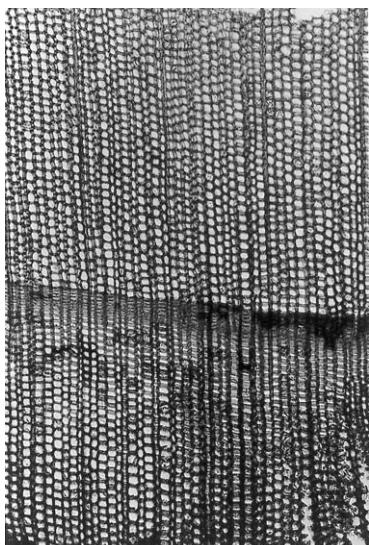
ヒノキ科アスナロ属



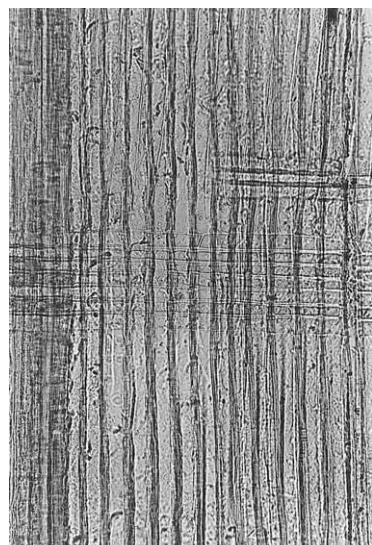
柾目×100



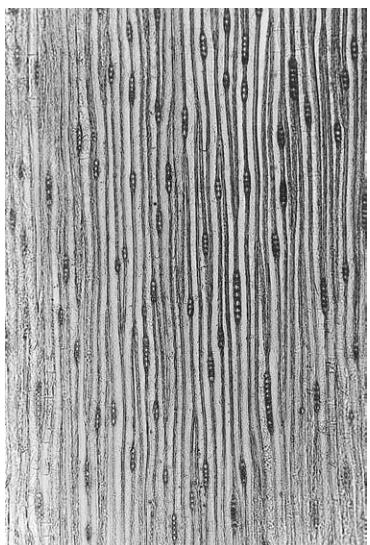
板目×40



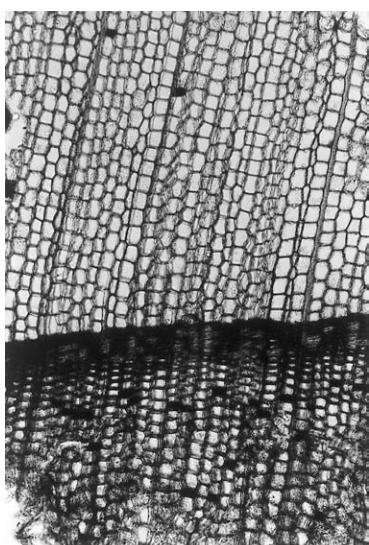
No - 37 木口 × 40
ヒノキ科アスナロ属



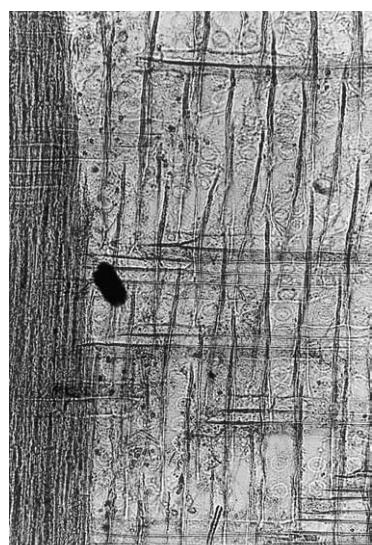
柾目 × 100



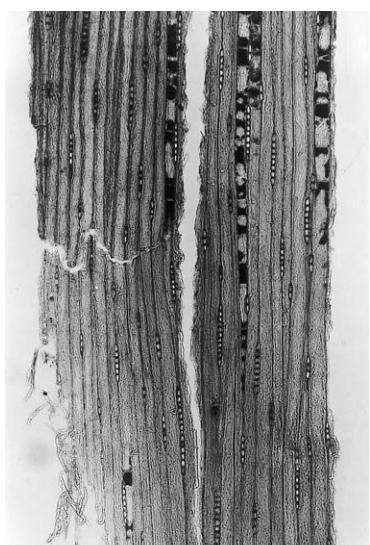
板目 × 40



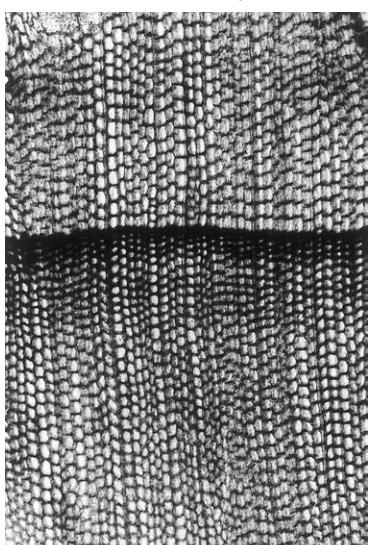
No - 38 木口 × 40
スギ科スギ属スギ



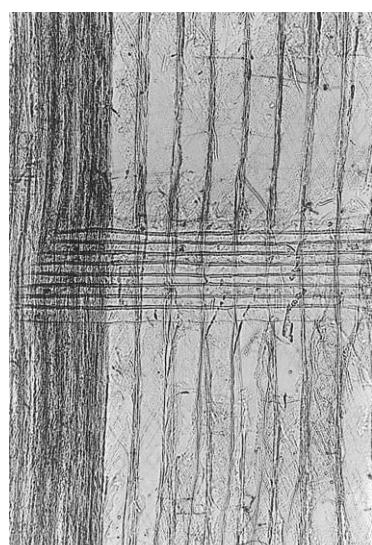
柾目 × 100



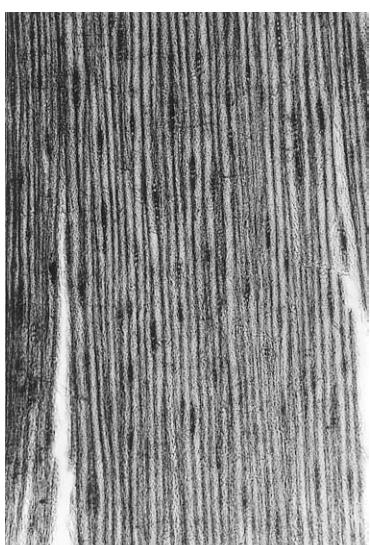
板目 × 40



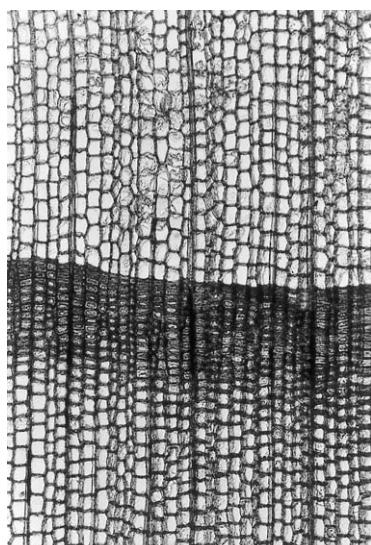
No - 39 木口 × 40
ヒノキ科アスナロ属



柾目 × 100

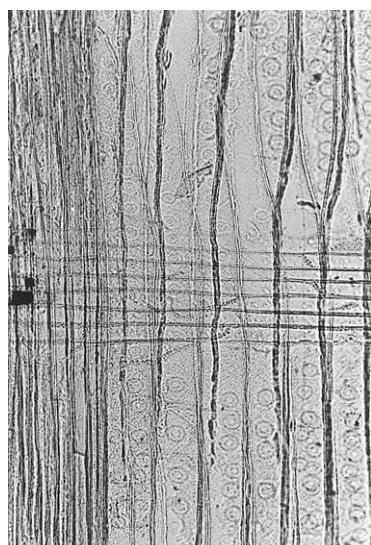


板目 × 40

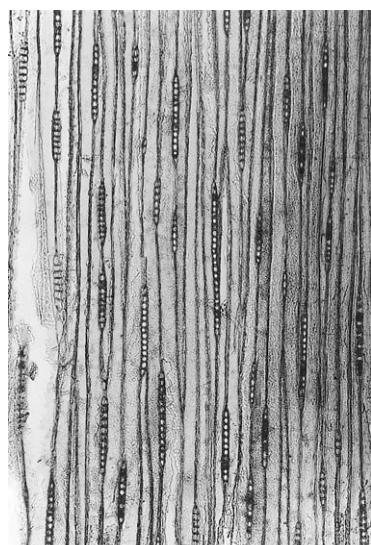


No - 40 木口 × 40

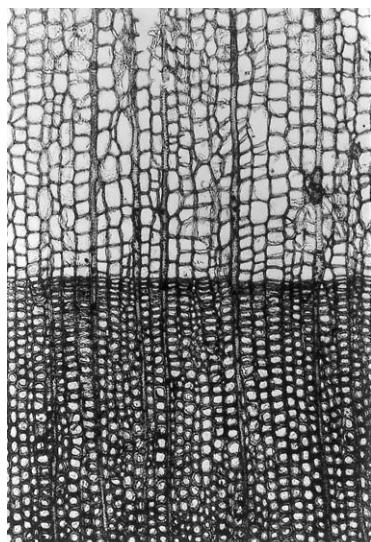
マツ科モミ属



柾目 × 100

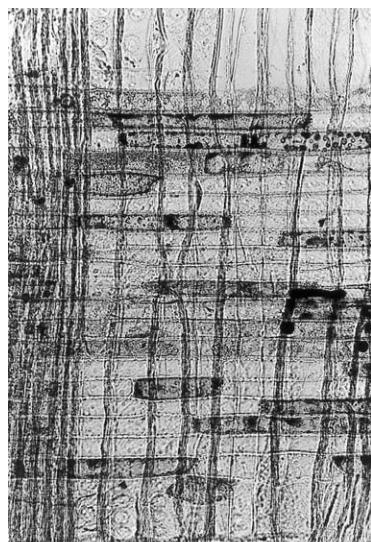


板目 × 40

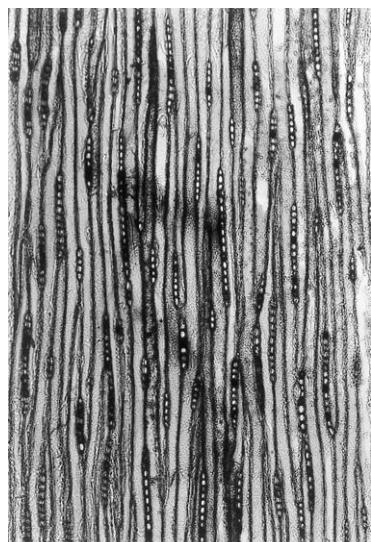


No - 41 木口 × 40

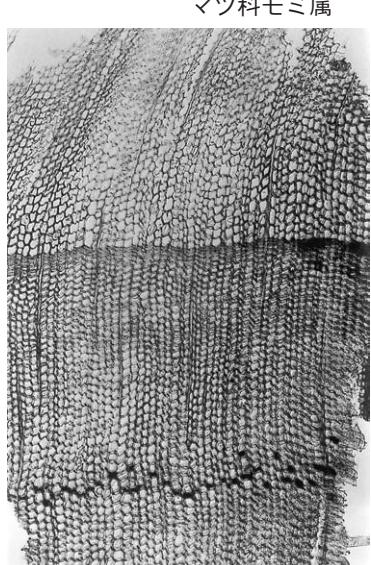
マツ科モミ属



柾目 × 100

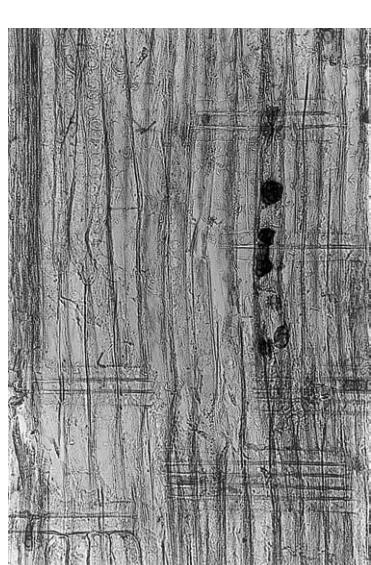


板目 × 40

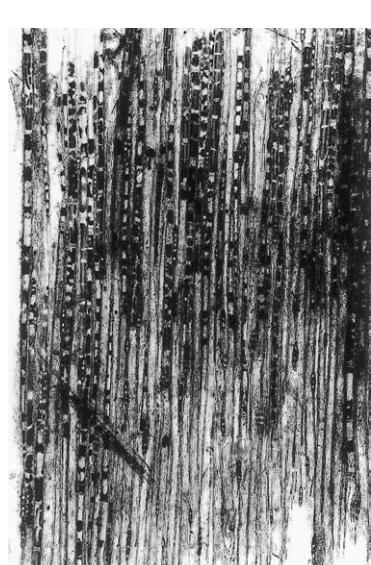


No - 42 木口 × 40

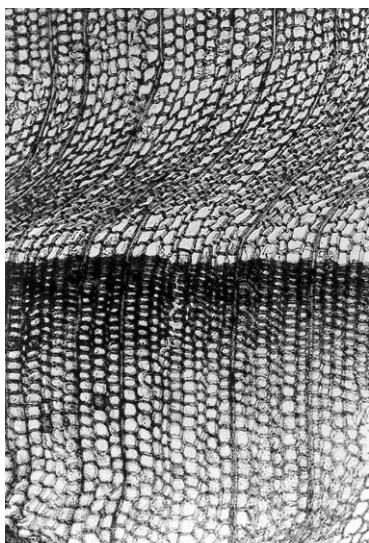
ヒノキ科アスナロ属



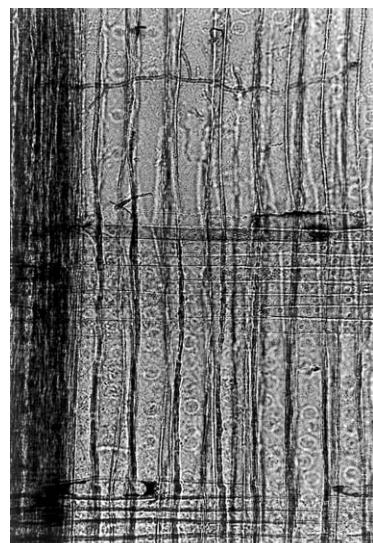
柾目 × 100



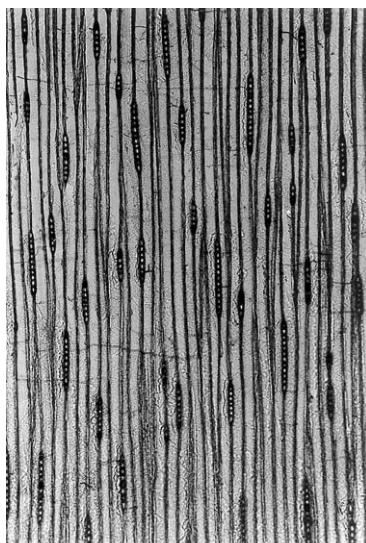
板目 × 40



No-43 木口×40
マツ科モミ属

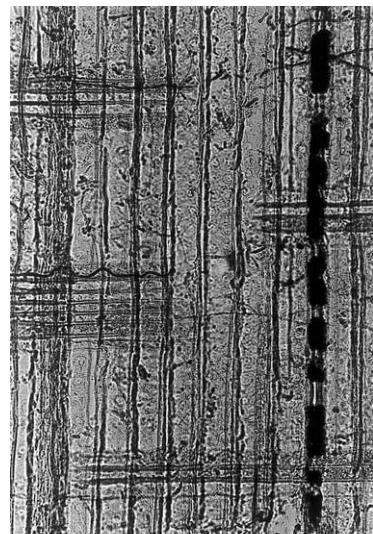


柾目×100

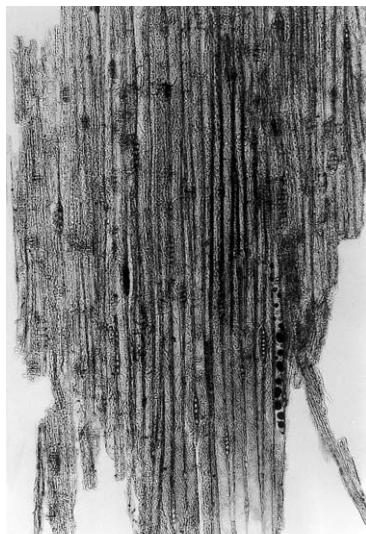


板目×40

No-44 ヒノキ科アスナロ属

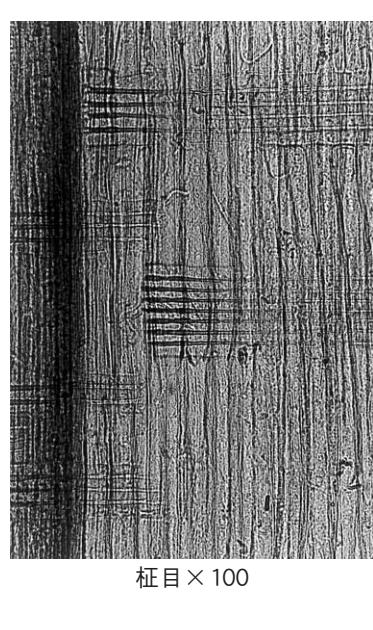


柾目×100

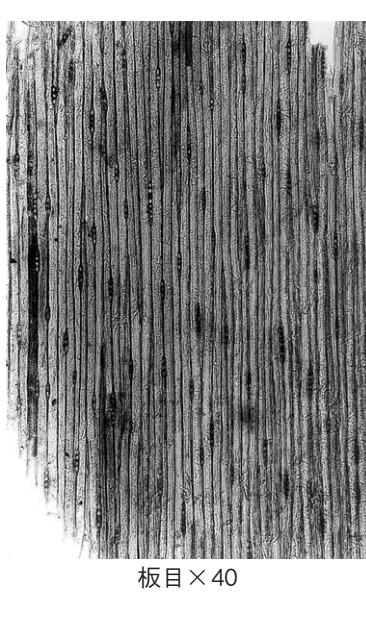


板目×40

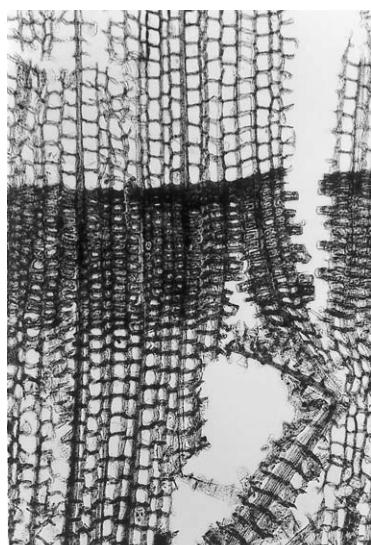
No-45 ヒノキ科アスナロ属



柾目×100

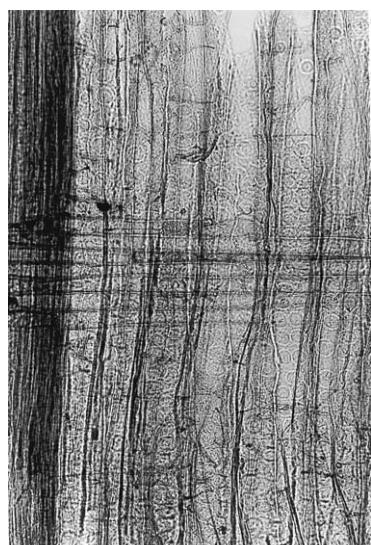


板目×40



No-46 木口×40

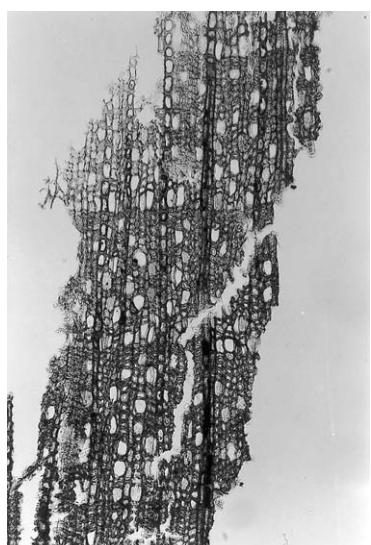
マツ科モミ属



柾目×100



板目×40

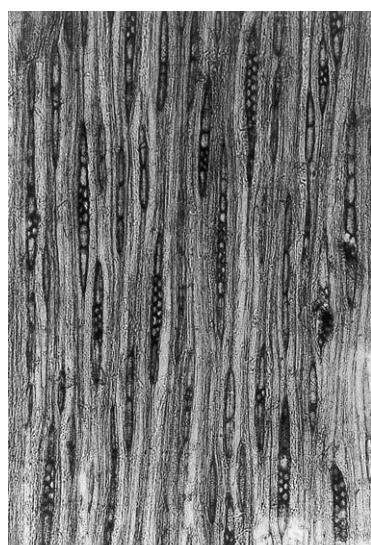


No-47 木口×40

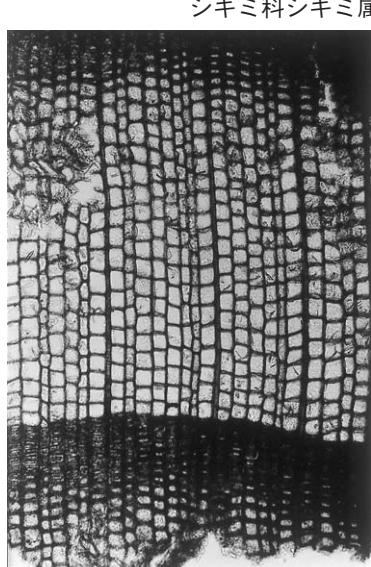
シキミ科シキミ属シキミ



柾目×40

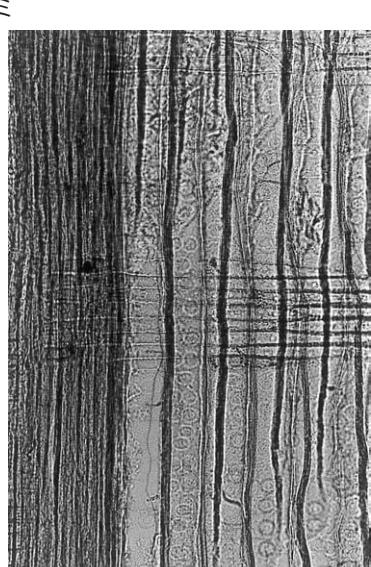


板目×40



No-48 木口×40

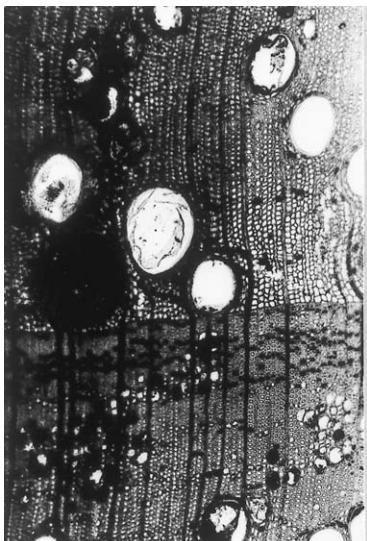
マツ科モミ属



柾目×100



板目×40



No - 49 木口 × 40
ブナ科クリ属クリ



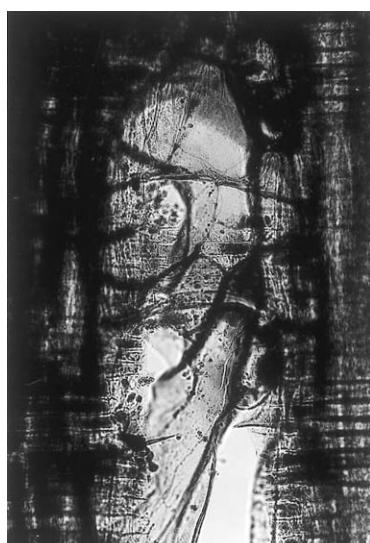
柾目 × 100



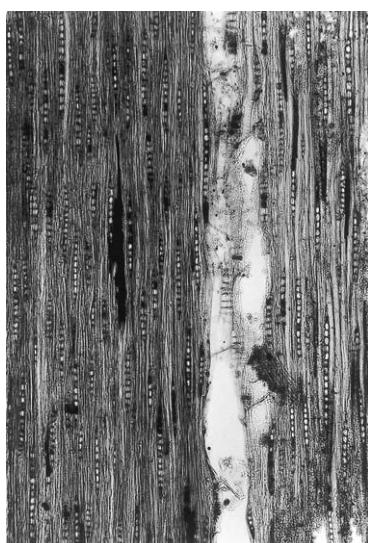
板目 × 40



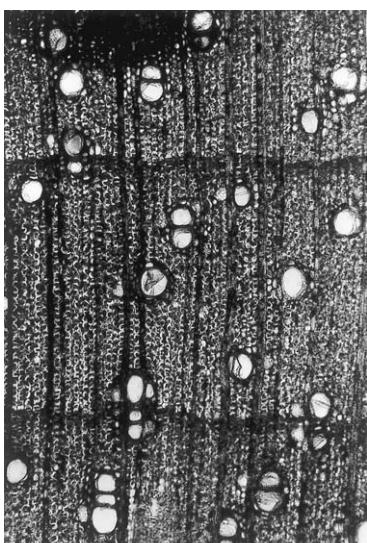
No - 50 木口 × 40
ブナ科クリ属クリ



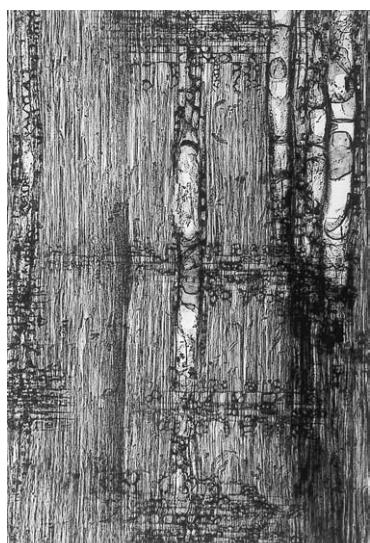
柾目 × 100



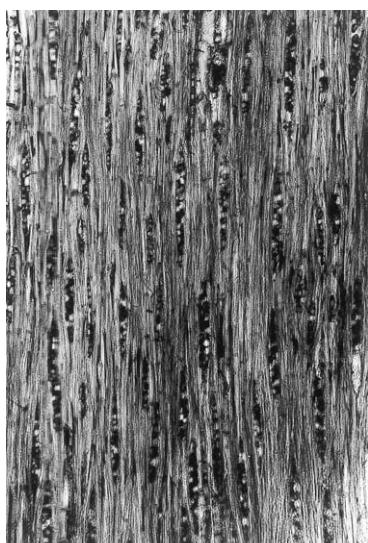
板目 × 40



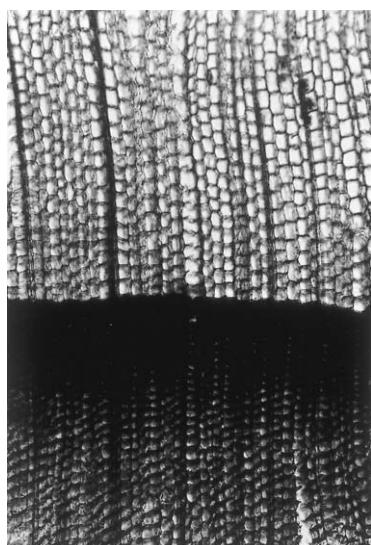
No - 51 木口 × 40
クスノキ科タブノキ属



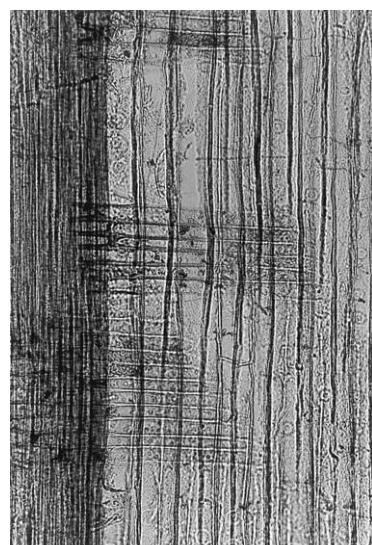
柾目 × 40



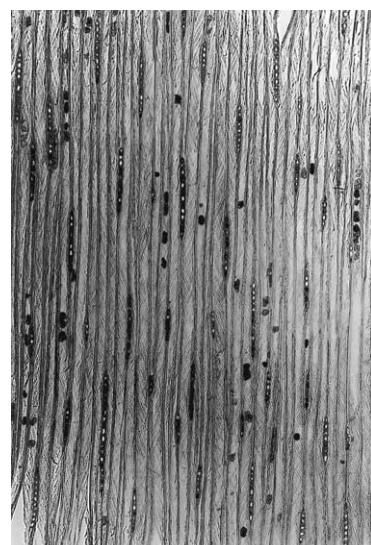
板目 × 40



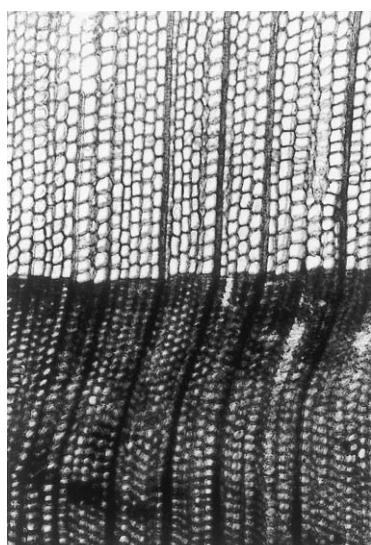
No - 52 木口 × 40
マツ科モミ属



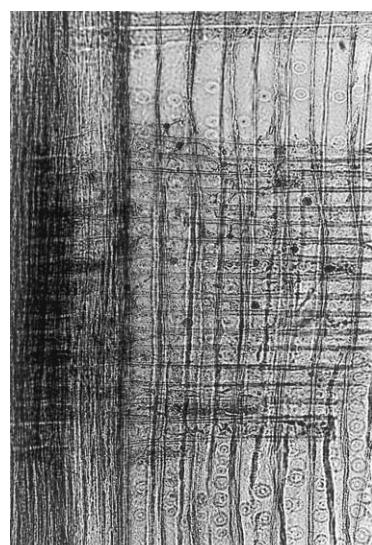
柾目 × 100



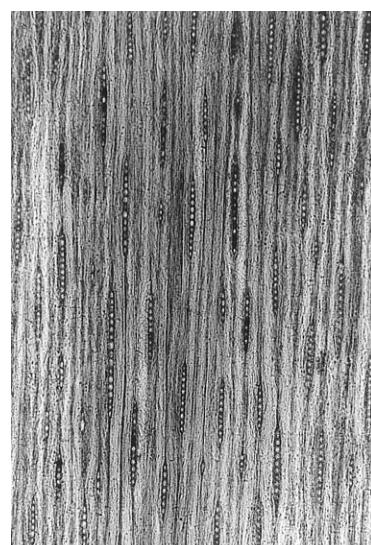
板目 × 40



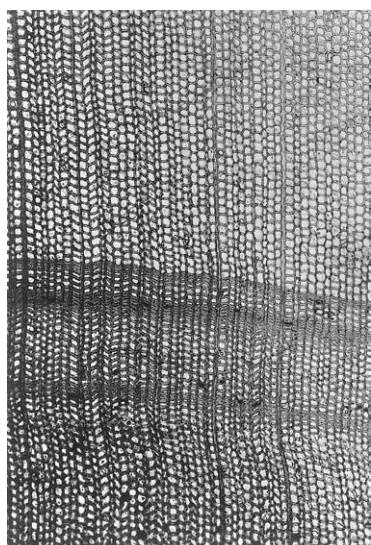
No - 53 木口 × 40
マツ科モミ属



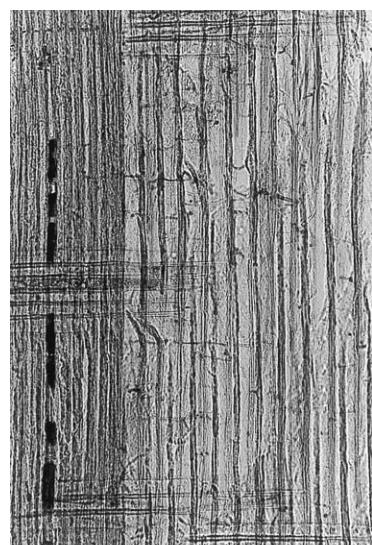
柾目 × 100



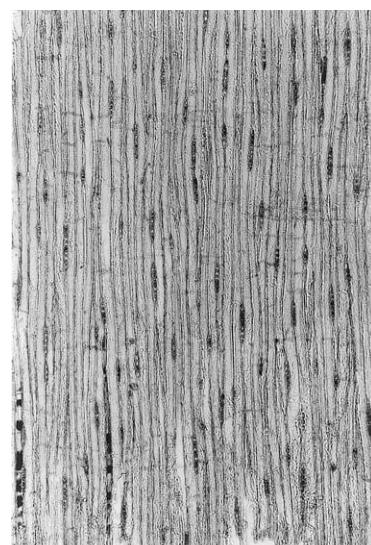
板目 × 40



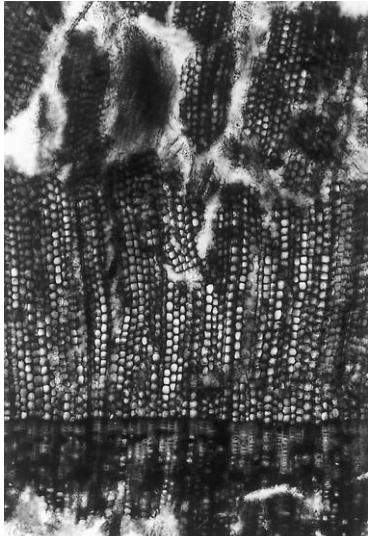
No - 54 木口 × 40
ヒノキ科アスナロ属



柾目 × 100



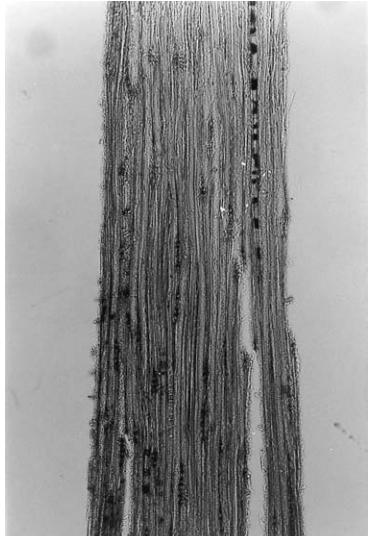
板目 × 40



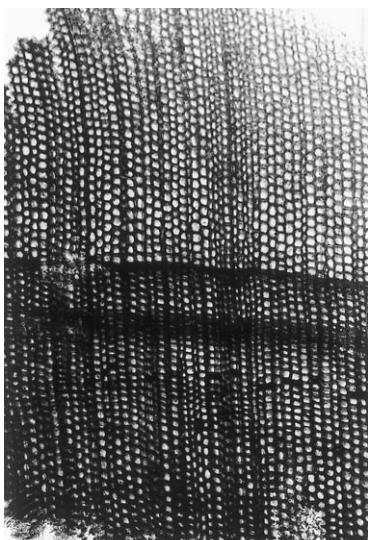
No - 55 木口 × 40
ヒノキ科アスナロ属



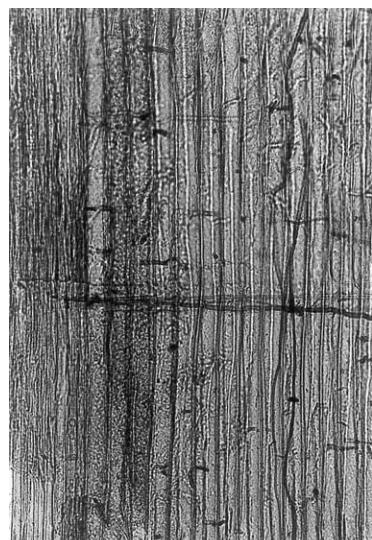
柾目 × 100



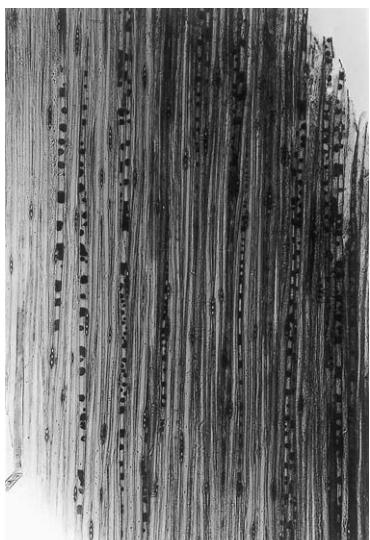
板目 × 40



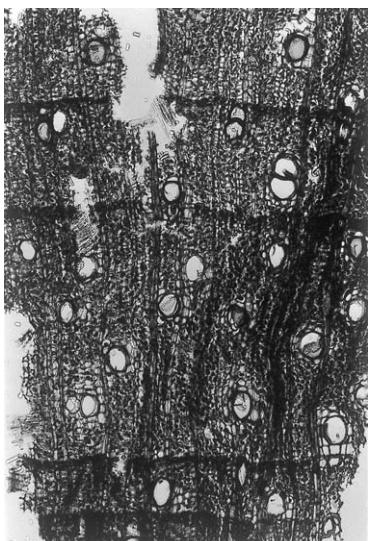
No - 56 木口 × 40
ヒノキ科アスナロ属



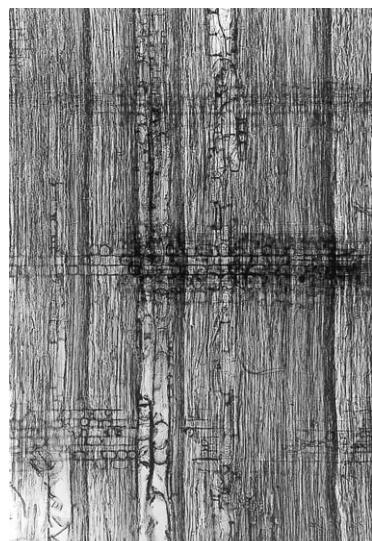
柾目 × 100



板目 × 40



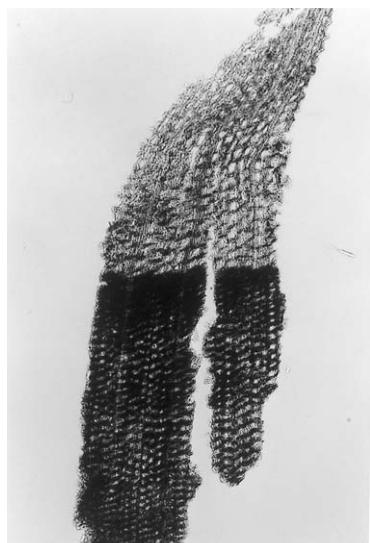
No - 57 木口 × 40
クスノキ科タブノキ属



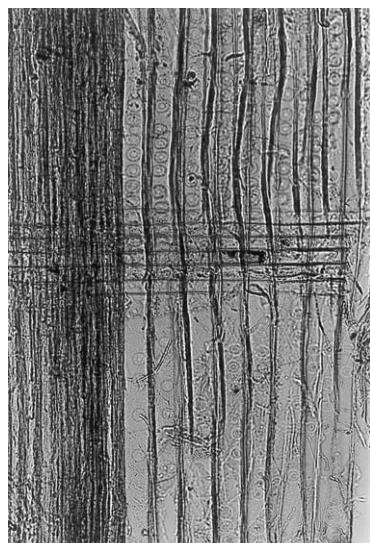
柾目 × 40



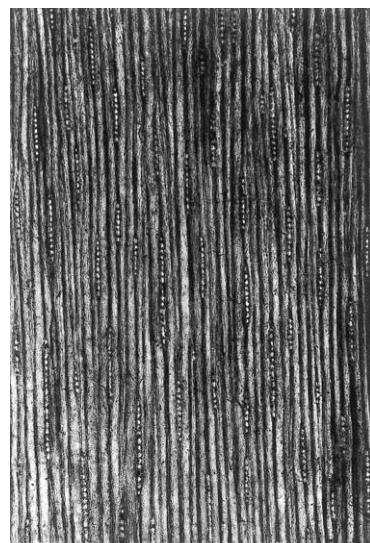
板目 × 40



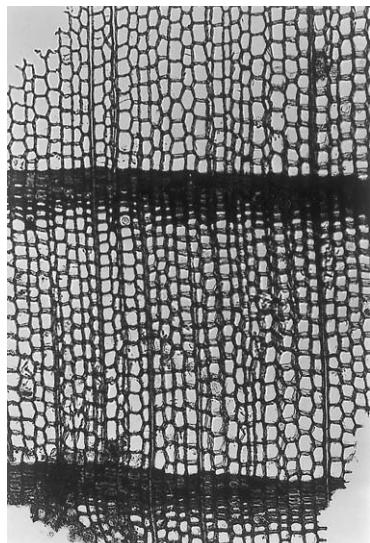
No - 58 木口 × 40
マツ科モミ属



柾目 × 100



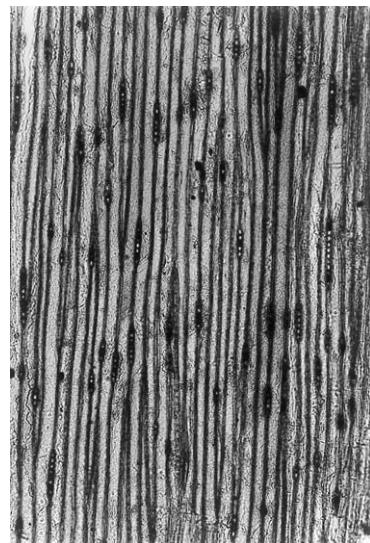
板目 × 40



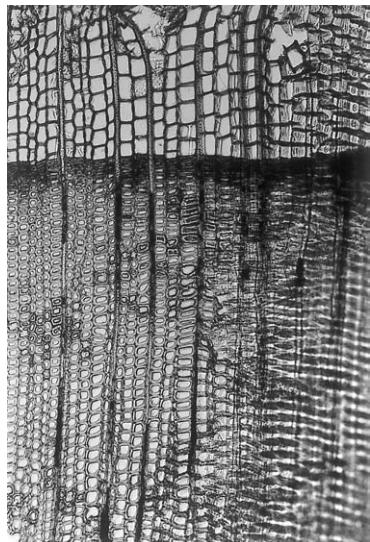
No - 59 木口 × 40
スギ科スギ属スギ



柾目 × 40



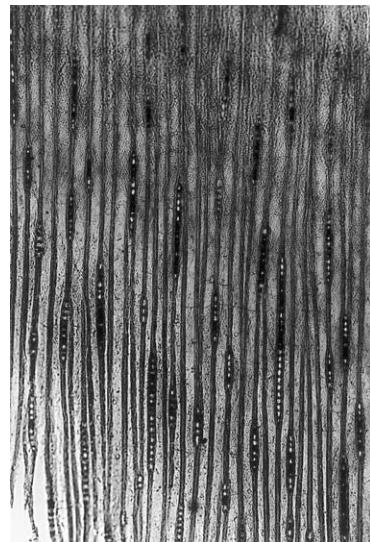
板目 × 40



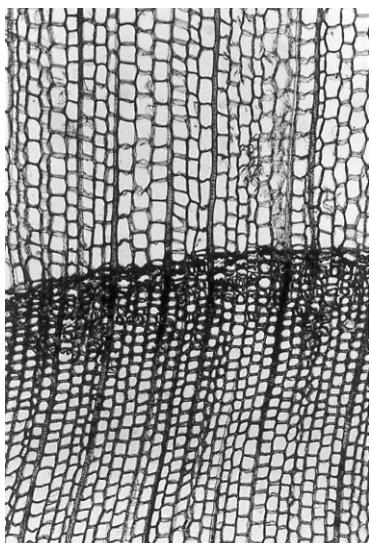
No - 60 木口 × 40
マツ科モミ属



柾目 × 100

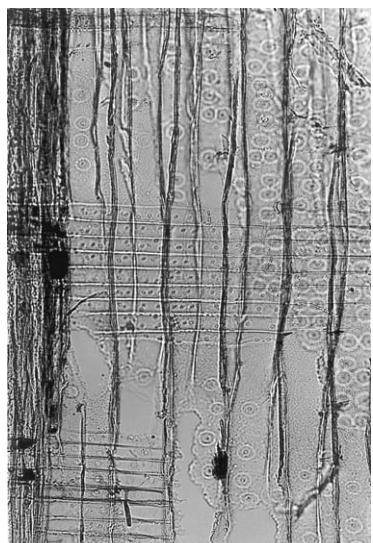


板目 × 40

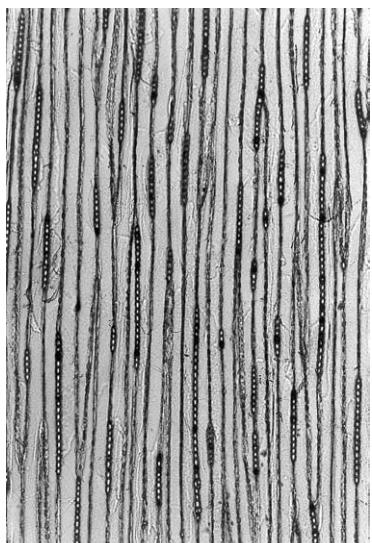


No - 61 木口 × 40

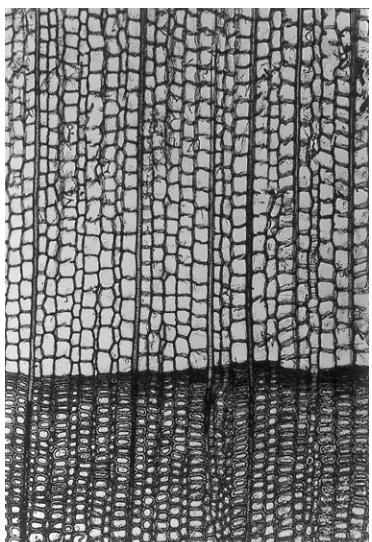
マツ科モミ属



柾目 × 100

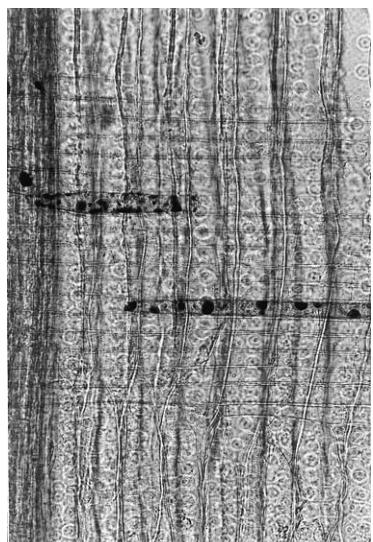


板目 × 40

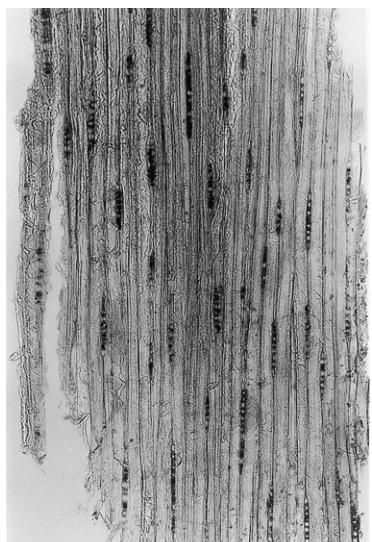


No - 62 木口 × 40

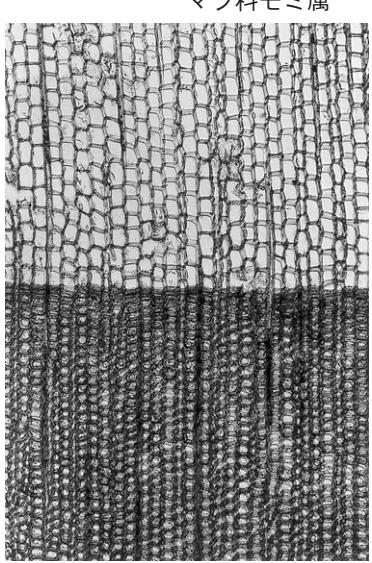
マツ科モミ属



柾目 × 100

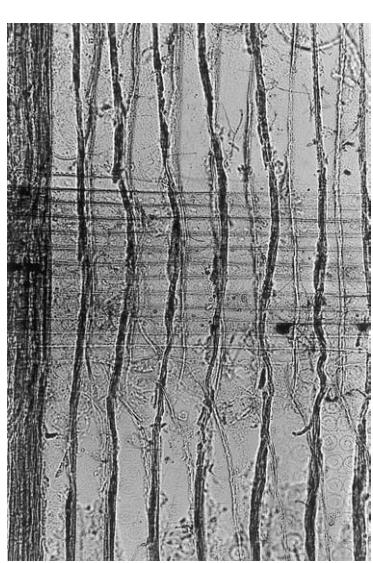


板目 × 40

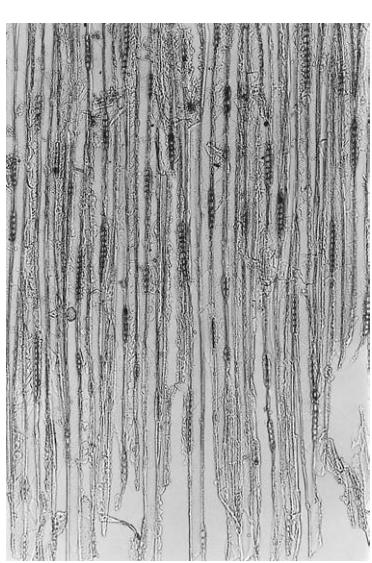


No - 63 木口 × 40

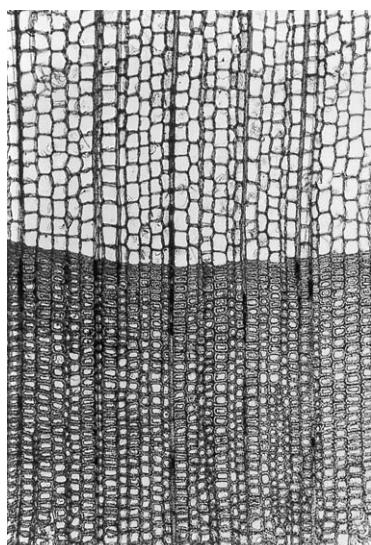
マツ科モミ属



柾目 × 100

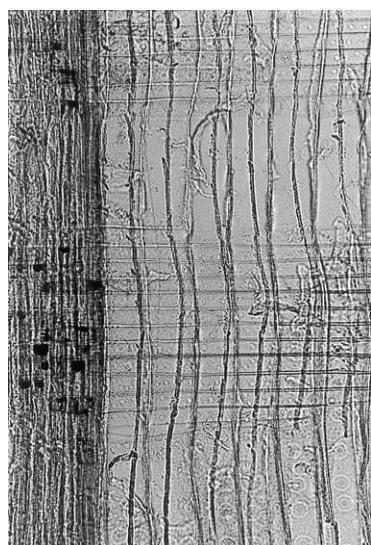


板目 × 40

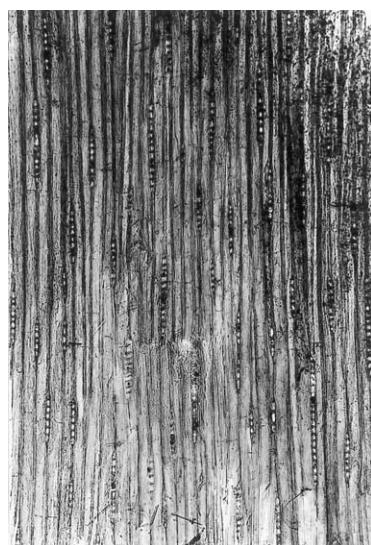


No - 64 木口 × 40

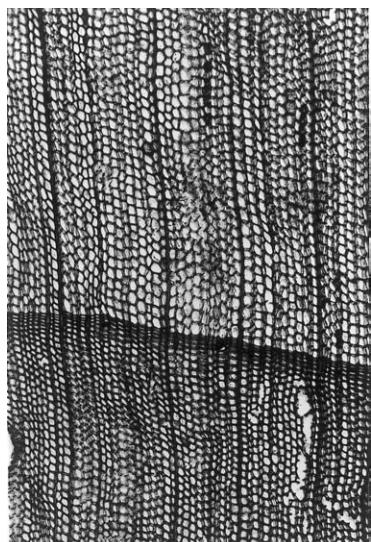
マツ科モミ属



柾目 × 100

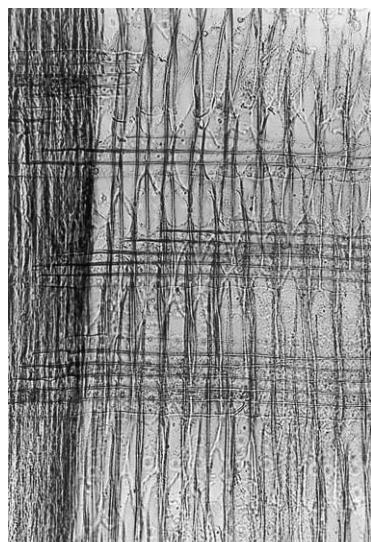


板目 × 40

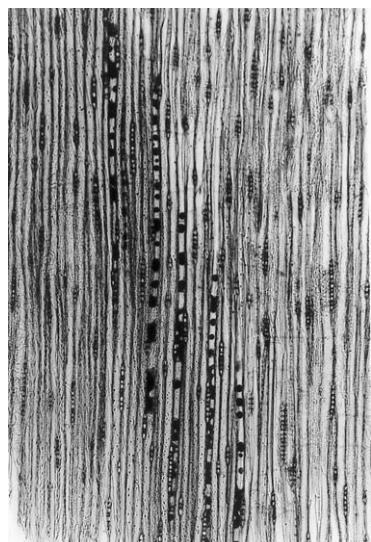


No - 65 木口 × 40

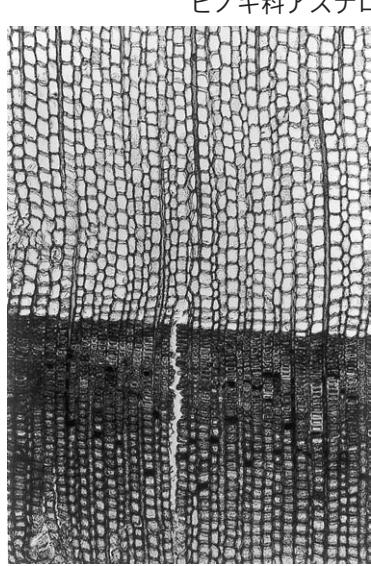
ヒノキ科アスナロ属



柾目 × 100

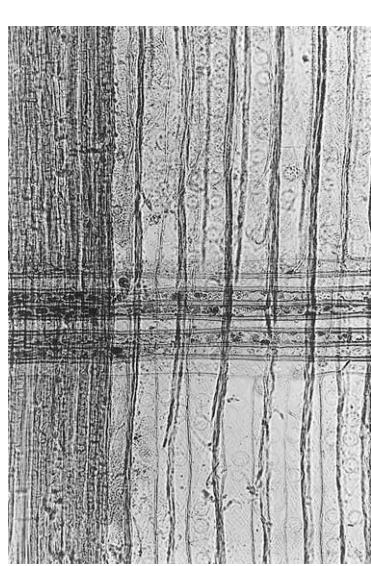


板目 × 40

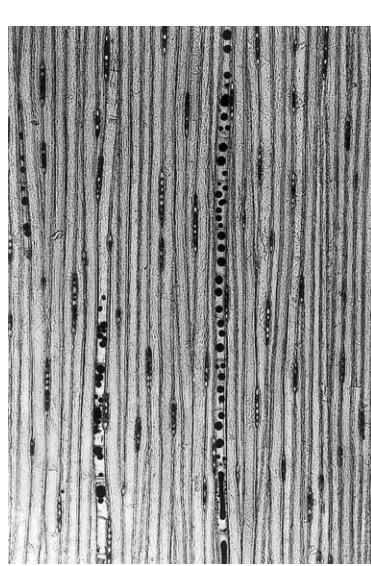


No - 66 木口 × 40

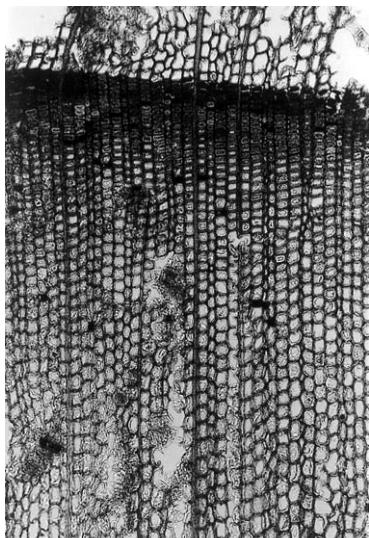
スギ科スギ属スギ



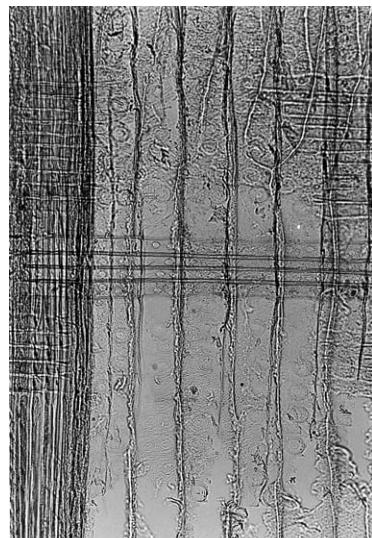
柾目 × 100



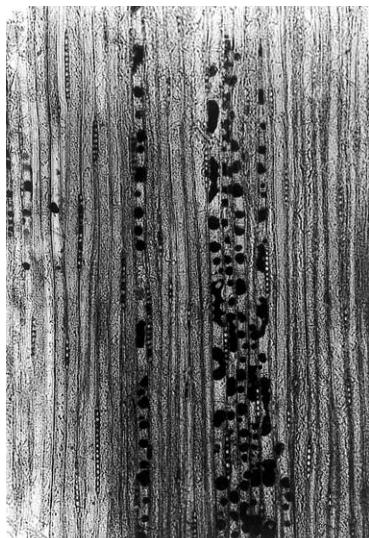
板目 × 40



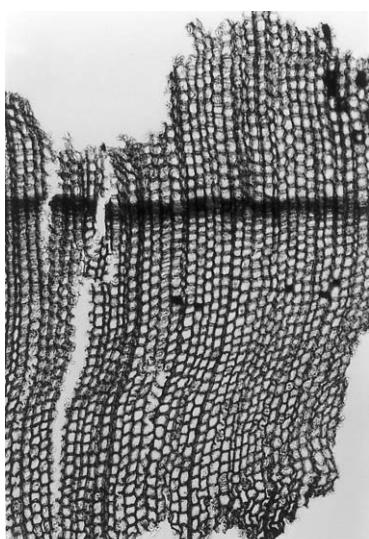
No. 67 木口×40
スギ科スギ属スギ



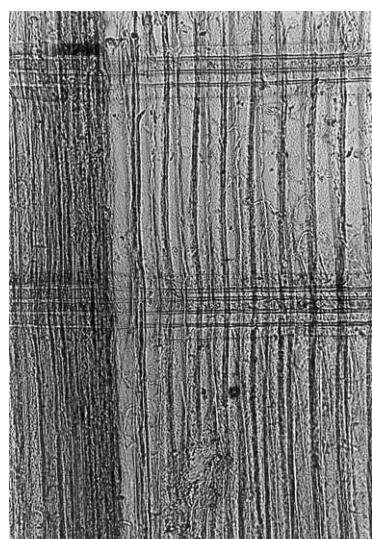
柾目×100



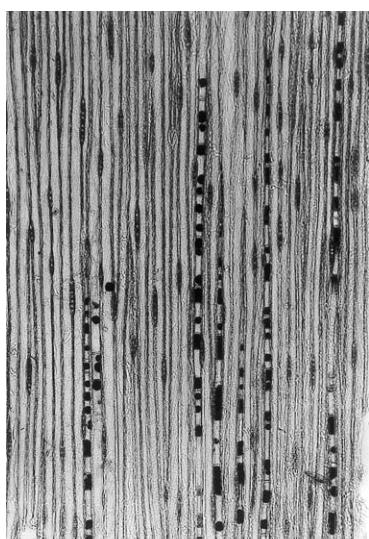
板目×40



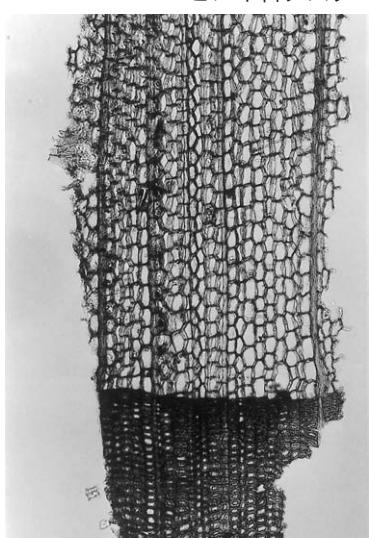
No. 68 木口×40
ヒノキ科アスナロ属



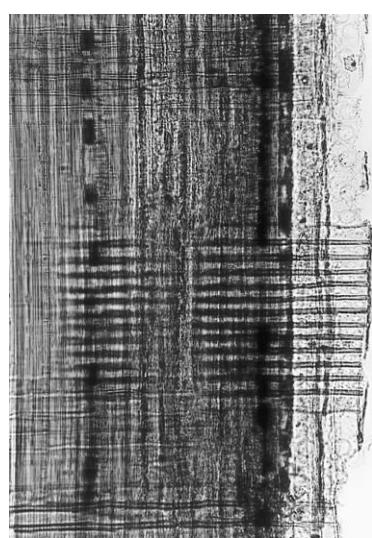
柾目×100



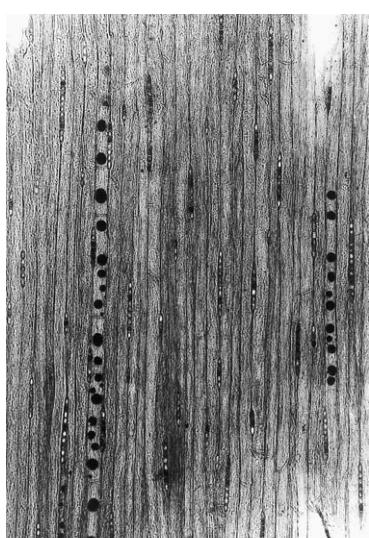
板目×40



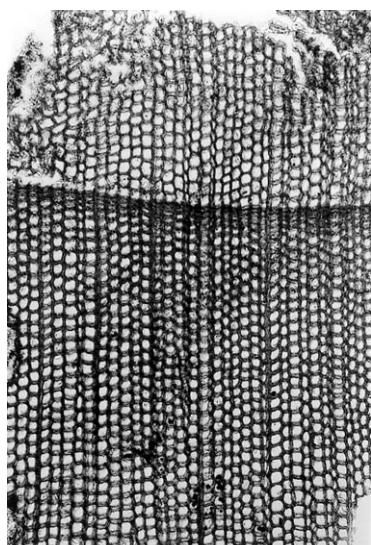
No. 69 木口×40
スギ科スギ属スギ



柾目×100

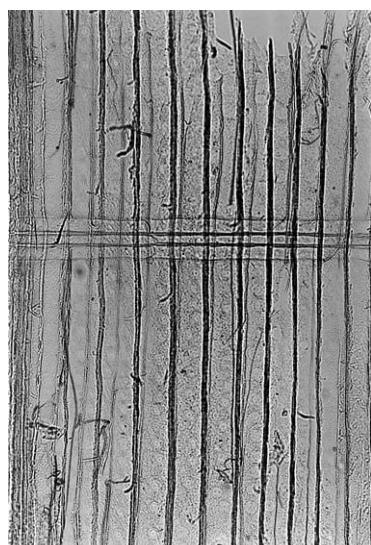


板目×40



No-70 木口×40

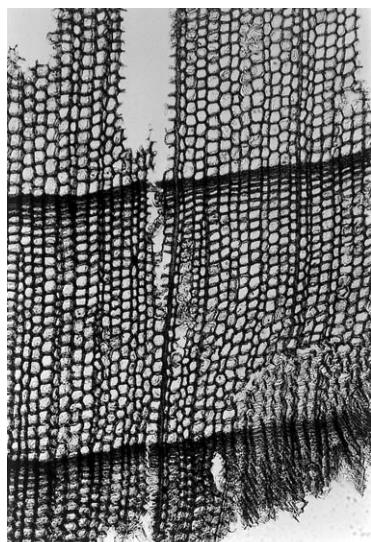
ヒノキ科アスナロ属



柾目×100

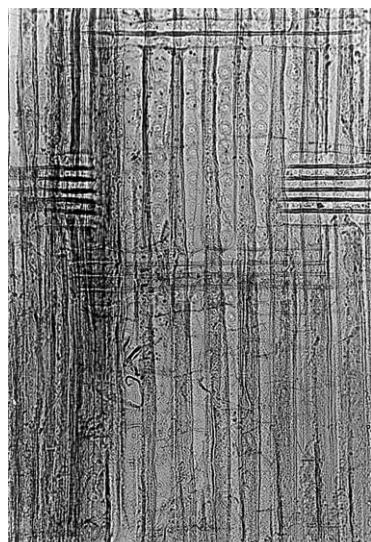


板目×40



No-71 木口×40

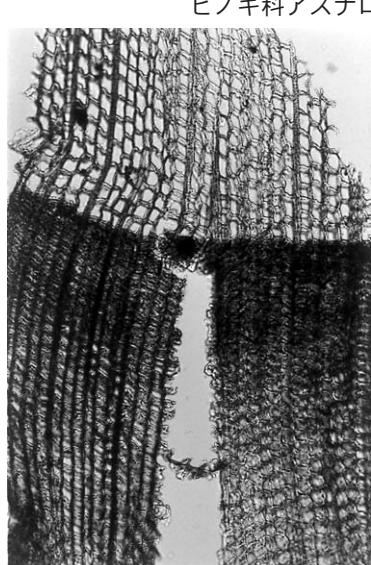
ヒノキ科アスナロ属



柾目×100

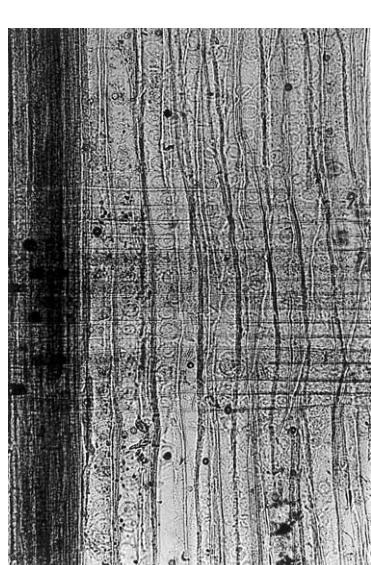


板目×40

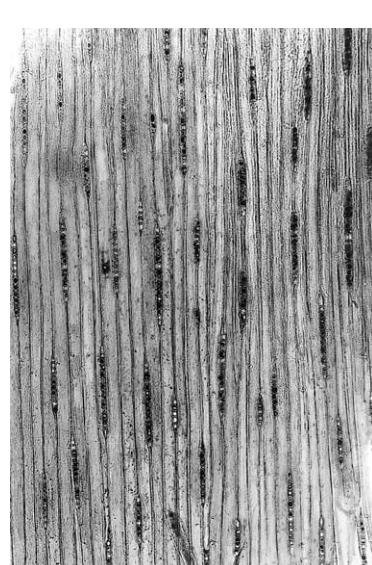


No-72 木口×40

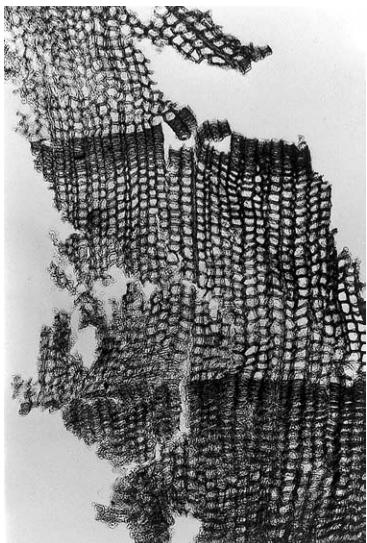
マツ科モミ属



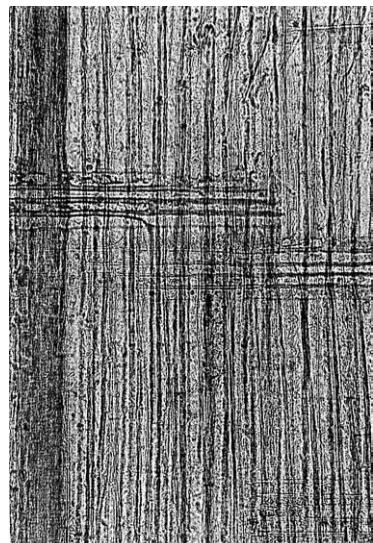
柾目×100



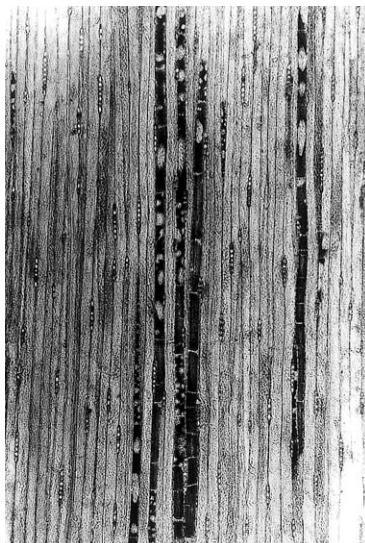
板目×40



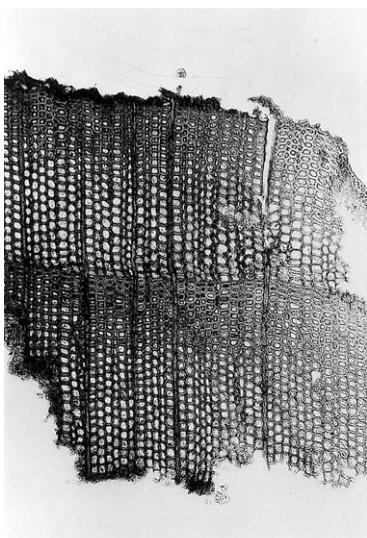
No - 73 木口 × 40
ヒノキ科アスナロ属



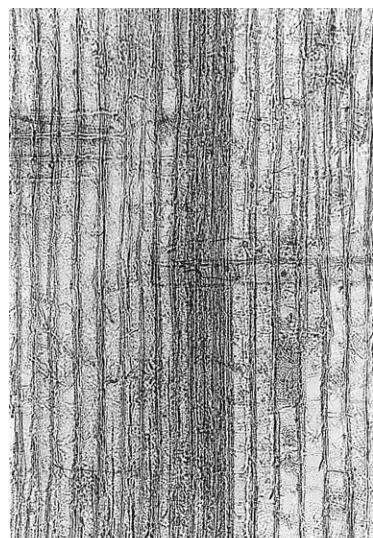
柾目 × 100



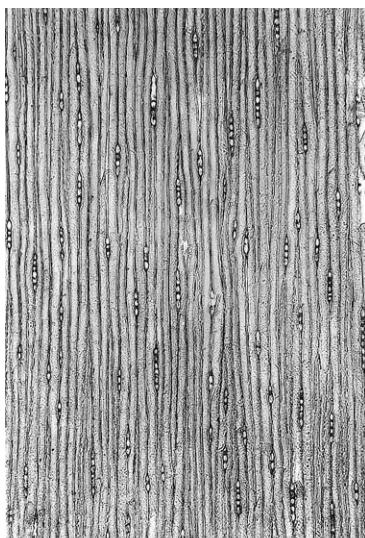
板目 × 40



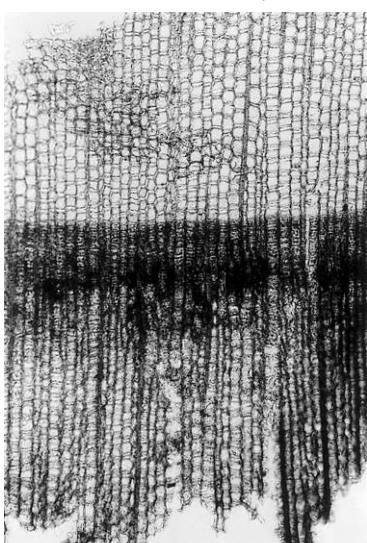
No - 74 木口 × 40
イチイ科カヤ属カヤ



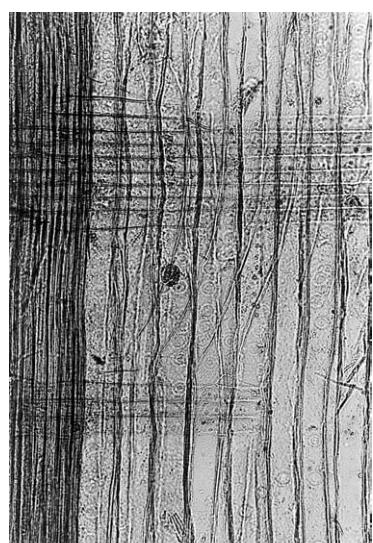
柾目 × 100



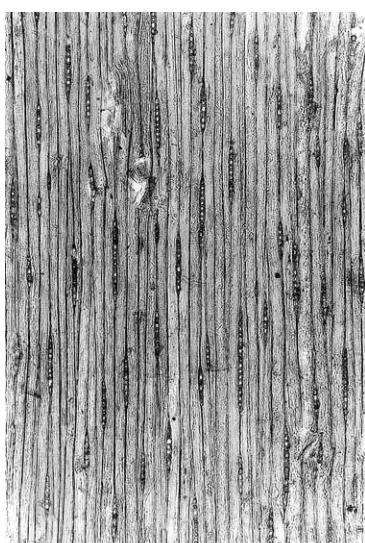
板目 × 40



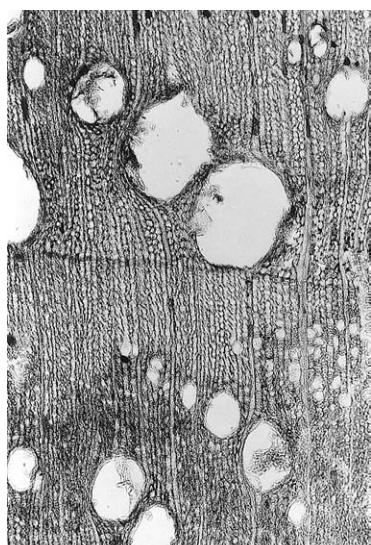
No - 75 木口 × 40
マツ科モミ属



柾目 × 100

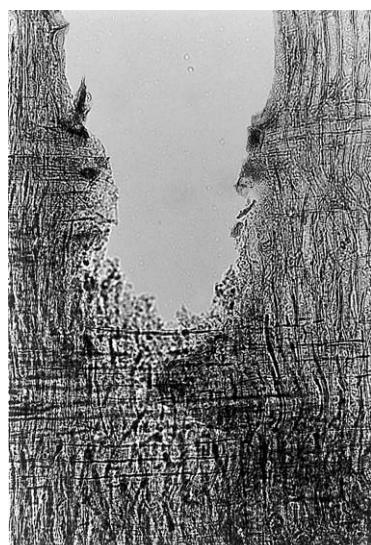


板目 × 40

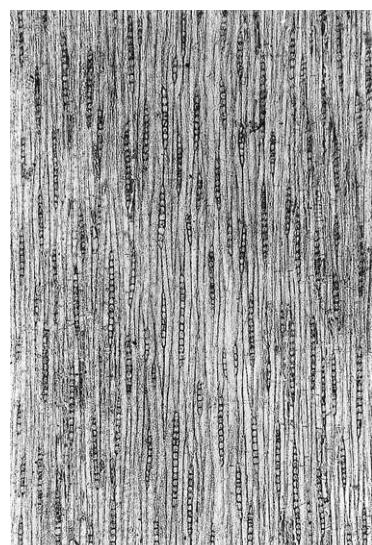


No - 76 木口 × 40

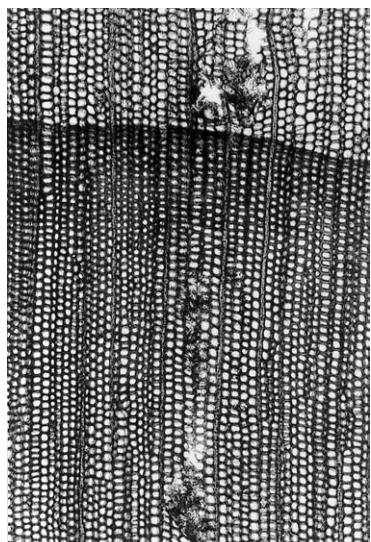
ブナ科クリ属クリ



柾目 × 100

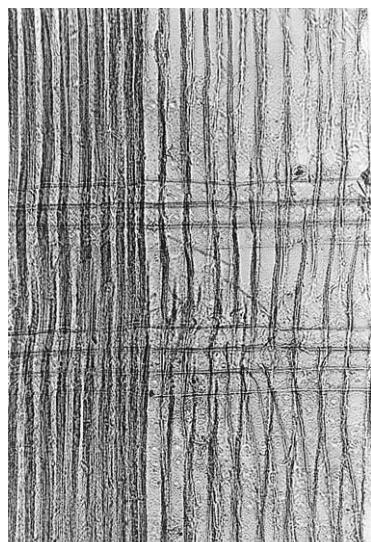


板目 × 40

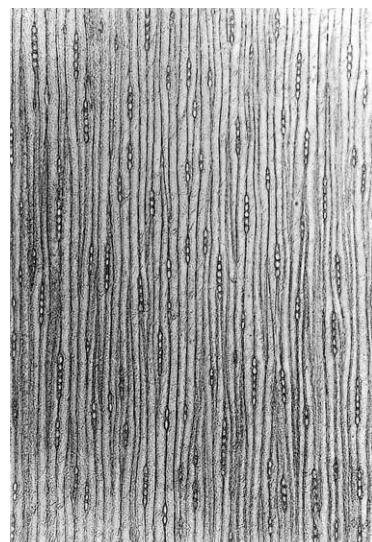


No - 77 木口 × 40

イチイ科カヤ属カヤ



柾目 × 100



板目 × 40

報告書抄録

ふりがな	おかだむかいいせき ほndaしやかたあとはくつちょうさほうこく							
書名	岡田向遺跡・本田氏館跡発掘調査報告							
副書名	伊賀市岡田・柏尾所在							
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	287							
編著者名	中川 明							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかだむかいいせき 岡田向遺跡	いがし 伊賀市 おかだ 岡田 あざむかい 字向	216	f 191	136度 12分 04秒	34度 40分 10秒	20040916～ 20050131	212	農村総合整備 事業(畿央伊賀 地区)
ほんだしやかたあと 本田氏館跡	いがし 伊賀市 かしお 柏尾 あざなかもり 字中森	216	f 144	136度 12分 11秒	34度 40分 06秒	20040916～ 20050131	1,400	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おかだむかいいせき 岡田向遺跡	集落跡	古墳時代	溝、建物	土師器杯・甕、須恵器 杯・蓋、木製品農具・ 建築部材・曲物 (重量75.6kg)				
ほんだしやかたあと 本田氏館跡	城館	室町時代 以降	曲輪、通路、 中世墓・土坑	常滑焼壺・五輪塔・古銭 (重量51.9kg)				
その他	(株)吉田生物研究所による木製品の保存処理および樹種同定結果							
要約	岡田向遺跡は、柏尾地区の丘陵裾に広がる遺跡である。谷地形が遺跡の中央部を木津川に向かって形成され、僅かな平坦部に存在したと考えられる。建物跡の柱穴が確認され、須恵器が出土し、流路からは容器や運搬具のほか柱材などが多量に認められた。また、近接する本田氏館跡で、山城の施設である曲輪や通路跡が数箇所確認できた。積石を伴う中世墓も中腹や丘陵頂で見つかっている。							

三重県埋蔵文化財調査報告287

岡田向遺跡・本田氏館跡発掘調査報告

～三重県伊賀市岡田・柏尾所在～

2007（平成19）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 株式会社アイブレーン

